

5. 鳥類調査の概要

5.1 調査結果の概要

(1) 確認種数

令和2年度に鳥類調査が実施された13ダムにおいて、17目48科156種の鳥類が確認されました。「日本鳥類目録改訂第7版」(日本鳥学会, 2012)には、日本鳥類目録と国内で繁殖記録のある外来種として667種が掲載されており、今回の確認種数は、その約23.3%に相当します。

調査を実施した13ダムのうち、確認種数が多かったのは、北海道の岩尾内ダム100種、東北の森吉山ダム97種、中部の丸山ダム91種、中国の苦田ダム87種等でした。13ダム全てで確認された種はマガモ、カルガモ、キジバト、アオバト、カワウ、アオサギ、トビ、コゲラ、ハシブトガラス、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、エナガ、カワガラス、キビタキ、オオルリ、キセキレイ、カワラヒワ、イカル、ホオジロの22種ありました。

(2) 重要種

今回とりまとめを行った13ダムでは、14科22種の重要種^{注)}が確認されました。

確認された重要種のうち、レッドリストのランクごとの内訳をみると、絶滅危惧IA類(CR)に該当する種は確認されず、絶滅危惧IB類(EN)に該当する種は、イヌワシ、クマタカ、ヤイロチョウの3種が確認されました。

注) 重要種について

本資料においては、次の文献のいずれかに該当する種や亜種を重要種としました。

- ・「文化財保護法」の特別天然記念物及び天然記念物
- ・「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」の国内希少野生動植物及び緊急指定種
- ・「環境省レッドリスト2020の公表について(絶滅のおそれのある野生生物の種のリスト)」(環境省レッドリスト2020:令和2年3月27日報道発表資料)

絶滅危惧IA類(CR):ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高い種

絶滅危惧IB類(EN):IA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高い種

絶滅危惧II類(VU):絶滅の危険が増大している種

準絶滅危惧(NT):現時点では絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種

情報不足(DD):評価するだけの情報が不足している種

絶滅のおそれのある地域個体群(LP):地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの

(3) 国外外来種

1) 国外外来種の確認状況

今回とりまとめを行った13ダムでは、コジュケイ、カワラバト(ドバト)、ガビチョウ、ソウシチョウの3科4種の国外外来種^{注1)}が確認されました。

外来生物法において特定外来生物^{注2)}に指定されている種としては、ガビチョウが1ダムで、ソウシチョウが4ダムで確認されました。なお、2種ともに生態系被害防止外来種リスト^{注3)}の「総合的な対策が必要な外来種」に選定されています。

(注) 国外外来種の選定基準について

注1) 外来種とは、本来その生物が生息していない地域に貿易や人の移動等を介して意図的・非意図的に導入された種をいいます。外来種のうち、日本国外から持ち込まれた種を「国外外来種」

といい、日本国内の種であっても本来その生物が生息していない地域に、他の場所から持ち込まれた種は「国外外来種」といいます。本資料における国外外来種とは、おおむね明治以降に人為的影響により侵入したと考えられる国外由来の動植物すべてを指し、侵入以後に国内に定着した種であるか否かの判断は、選定の際に考慮していません。また、国外外来種の選定は、I-9～11 ページに掲載した文献および I-12～13 ページに掲載した学識者による意見をもとに行っています。

注2) 特定外来生物とは、『特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律(平成 17 年 6 月 1 日施行)』により、輸入や飼養等が規制される生物(生きているものに限られ、個体だけではなく、卵、種子、器官等も含まれる)です。おおむね明治以降に国外から導入された国外外来種のうち、生態系、人の生命・身体及び農林水産業へ被害を及ぼすもの、または及ぼすおそれがある生物が指定されています。

注3) 生態系被害防止外来種リスト(我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト)とは、我が国の生物多様性を保全するため、さまざまな主体の参画のもとで外来種対策の一層の進展を図ることを目的とし、環境省及び農林水産省が「生態系、人の生命・身体、農林水産業に被害を及ぼす又はそのおそれがある生物」を生態的特性及び社会的状況も踏まえて選定した外来種リストです。リスト中には特定外来生物法で指定された生物も含まれています。また、魚類、植物、哺乳類、両生類、爬虫類、陸上昆虫類においては、国内外来種も一部選定されています。

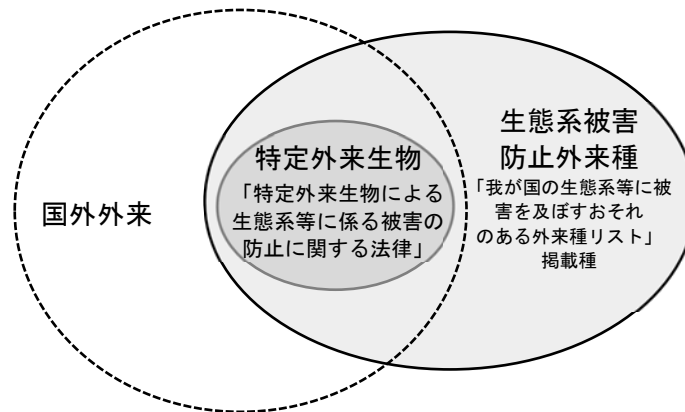


図 (参考) 国外外来種、生態系被害防止外来種、特定外来生物の関係

鳥類確認種一覧<1> (令和2年度)

No	目名	科名	種名	学名	北海道	東北	北陸			中部				中国	九州	確認ダム数
					岩尾内ダム	森吉山ダム	三國川ダム	大町ダム	宇奈月ダム	丸山ダム	横山ダム	味噌川ダム	阿木川ダム	徳山ダム	岩屋ダム	
1	キジ目	キジ科	エゾライチョウ	<i>Tetrastes bonasia</i>	●											1
2			コジュケイ	<i>Bambusicola thoracicus</i>						●	●	●	●	●	●	7
3			ヤマドリ	<i>Syrnaticus soemmerringii</i>		●	●		●	●	●	●	●	●	●	10
4			キジ	<i>Phasianus colchicus</i>						●		●			●	4
5	カモ目	カモ科	コハクチョウ	<i>Cygnus columbianus</i>	●											1
6			オオハクチョウ	<i>Cygnus cygnus</i>	●											1
7			オシドリ	<i>Aix galericulata</i>	●	●	●	●	●			●		●	●	10
8			ヒドリガモ	<i>Anas penelope</i>	●	●	●	●	●						●	4
9			マガモ	<i>Anas platyrhynchos</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	13
10			カルガモ	<i>Anas zonorhyncha</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	13
11			ハシビロガモ	<i>Anas clypeata</i>			●									1
12			オナガガモ	<i>Anas acuta</i>	●	●						●				4
13			コガモ	<i>Anas crecca</i>	●	●	●	●	●	●		●	●	●	●	12
14			ホシハジロ	<i>Aythya ferina</i>			●	●	●	●		●	●	●	●	9
15			キンクロハジロ	<i>Aythya fuligula</i>			●		●			●				5
16			スズガモ	<i>Aythya marila</i>	●											1
17			ミコアイサ	<i>Mergellus albellus</i>						●						2
18			カワアイサ	<i>Mergus merganser</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	11
19			ウミアイサ	<i>Mergus serrator</i>						●						0
20	カイツブリ目	カイツブリ科	カイツブリ	<i>Tachybaptus ruficollis</i>		●	●			●	●	●	●	●	●	9
21			カンムリカイツブリ	<i>Podiceps cristatus</i>						●	●	●	●	●	●	7
22	ハト目	ハト科	カワラバト(ドバト)	<i>Columba livia</i>								●			●	2
23			キジバト	<i>Streptopelia orientalis</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	13
24			アオバト	<i>Ireron sieboldii</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	13
25	カツオドリ目	ウ科	カワウ	<i>Phalacrocorax carbo</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	13
26	ベリカン目	サギ科	ミゾゴイ	<i>Gorsachius goisagi</i>						●						1
27			ゴイサギ	<i>Nycticorax nycticorax</i>											●	2
28			ササゴイ	<i>Butorides striata</i>						●						1
29			アオサギ	<i>Ardea cinerea</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	13
30			ダイサギ	<i>Ardea alba</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	9
31			コサギ	<i>Egretta garzetta</i>											●	1
32	ツル目	クイナ科	オオバン	<i>Fulica atra</i>	●	●	●	●	●						●	7
33	カッコウ目	カッコウ科	ジュウイチ	<i>Hierococcyx hyperythrus</i>	●	●	●	●	●		●					6
34			ホトトギス	<i>Cuculus poliocephalus</i>	●	●	●			●	●	●	●	●	●	10
35			セグロカッコウ	<i>Cuculus micropterus</i>											●	1
36			ツツドリ	<i>Cuculus optatus</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	12
37			カッコウ	<i>Cuculus canorus</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	7
38	ヨタカ目	ヨタカ科	ヨタカ	<i>Caprimulgus indicus</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	9
39	アマツバメ目	アマツバメ科	ハリオアマツバメ	<i>Hirundapus caudacutus</i>	●			●								2
40			アマツバメ	<i>Apus pacificus</i>				●				●				3
41	チドリ目	チドリ科	イカルチドリ	<i>Charadrius placidus</i>	●	●	●			●		●		●		7
42			コチドリ	<i>Charadrius dubius</i>	●		●									2
43		シギ科	ヤマシギ	<i>Scolopax rusticola</i>	●											1
44			オオジシギ	<i>Gallinago hardwickii</i>	●											1
45			タシギ	<i>Gallinago gallinago</i>	●											1
46			イソシギ	<i>Actitis hypoleucos</i>	●	●				●					●	4
47		カモメ科	ウミネコ	<i>Larus crassirostris</i>									●			1
48			セグロカモメ	<i>Larus argentatus</i>					●							1
49			オオセグロカモメ	<i>Larus schistisagus</i>	●											1
50	タカ目	ミサゴ科	ミサゴ	<i>Pandion haliaetus</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	12
51		タカ科	ハチクマ	<i>Pernis ptilorhynchus</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	4
52			トビ	<i>Milvus migrans</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	13
53			オジロワシ	<i>Haliaeetus albicilla</i>	●	●						●				4
54			オオワシ	<i>Haliaeetus pelagicus</i>	●											1
55			ツミ	<i>Accipiter gularis</i>			●		●				●			3
56			ハイタカ	<i>Accipiter nisus</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	8
57			オオタカ	<i>Accipiter gentilis</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	12
58			サンバ	<i>Buteo indicus</i>	●	●	●					●				5
59			ノスリ	<i>Buteo buteo</i>	●	●	●	●	●				●		●	8
60			イヌワシ	<i>Aquila chrysaetos</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	2
61			クマタカ	<i>Nisaetus nipalensis</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	11
62	フクロウ目	フクロウ科	コノハズク	<i>Otus sunia</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	6
63			フクロウ	<i>Strix uralensis</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	9
64			アオバズク	<i>Ninox scutulata</i>	●	●	●	●	●							5
65	ブッポウソウ目	カワセミ科	アカショウビン	<i>Halcyon coromanda</i>	●	●			●						●	4
66			カワセミ	<i>Alcedo atthis</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	10
67			ヤマセミ	<i>Megaceryle lugubris</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	12
68	キツツキ目	キツツキ科	アリスイ	<i>Jynx torquilla</i>	●											1
69			コケラ	<i>Dendrocopos kizuki</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	13
70			オオアカケラ	<i>Dendrocopos leucotos</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	8
71			アカケラ	<i>Dendrocopos major</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	10
72			クマケラ	<i>Dryocopus martius</i>	●											1
73			アオケラ	<i>Picus awokera</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	12
74			ヤマケラ	<i>Picus canus</i>	●											1
75	ハヤブサ目	ハヤブサ科	ハヤブサ	<i>Falco peregrinus</i>			●			●			●	●		4

鳥類確認種一覧<2> (令和2年度)

No	目名	科名	種名	学名	北海道	東北	北陸	中部				中国	九州	確認 ダム数				
					岩 尾 内 ダム	森 吉 山 ダム	三 国 川 ダム	大 町 ダム	宇 奈 月 ダム	丸 山 ダム	横 山 ダム	味 噌 川 ダム	阿 木 川 ダム		徳 山 ダム	岩 屋 ダム	吉 田 ダム	耶 馬 溪 ダム
76	スズメ目	ヤイロチョウ科	ヤイロチョウ	<i>Pitta nympha</i>										●	2			
77		サンショウクイ科	サンショウクイ	<i>Pericrocotus divaricatus</i>		●		●	●	●	●	●	●	●	10			
78			サンショウクイ (亜種)	<i>Pericrocotus divaricatus divaricatus</i>			●								1			
79			リュウキュウサンショウクイ	<i>Pericrocotus divaricatus tegimae</i>										●	1			
80		カササギヒタキ科	サンコウチョウ	<i>Terpsiphone atrocaudata</i>		●		●	●	●	●	●	●	●	8			
81		モズ科	モズ	<i>Lanius bucephalus</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	12			
82		カラス科	カケス	<i>Garrulus glandarius</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	12			
83			ハシボソガラス	<i>Corvus corone</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	11			
84			ハシブトガラス	<i>Corvus macrorhynchos</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	13			
85		クワイタダキ科	クワイタダキ	<i>Regulus regulus</i>	●	●		●	●	●	●	●	●	●	10			
86		シジュウカラ科	ハシブトガラ	<i>Poecile palustris</i>	●										1			
87			コガラ	<i>Poecile montanus</i>		●	●	●	●	●	●	●	●	●	12			
88			ヤマガラ	<i>Poecile varius</i>		●	●	●	●	●	●	●	●	●	12			
89			ヒガラ	<i>Periparus ater</i>		●	●	●	●	●	●	●	●	●	13			
90			シジュウカラ	<i>Parus minor</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	13			
91		ヒバリ科	ヒバリ	<i>Alda arvensis</i>	●										1			
92		ツバメ科	ツバメ	<i>Hirundo rustica</i>		●	●	●	●	●	●	●	●	●	9			
93			コシアカツバメ	<i>Hirundo daurica</i>				●						●	4			
94			イワツバメ	<i>Delichon dasypus</i>		●	●	●	●	●	●	●	●	●	10			
95		ヒヨドリ科	ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis</i>		●	●	●	●	●	●	●	●	●	13			
96		ウグイス科	ウグイス	<i>Cetta diphone</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	13			
97			ヤブサメ	<i>Urosphena squameiceps</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	13			
98		エナガ科	エナガ	<i>Aegithalos caudatus</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	13			
99		ムシクイ科	オオムシクイ	<i>Phylloscopus examinandus</i>	●						●				4			
100			メボソムシクイ	<i>Phylloscopus xanthodryas</i>		●									1			
101			エゾムシクイ	<i>Phylloscopus borealoides</i>	●					●					2			
102			センダイムシクイ	<i>Phylloscopus coronatus</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	11			
103		チメドリ科	ガビチョウ	<i>Garrulax canorus</i>										●	1			
104			ソウシチョウ	<i>Leiothrix lutea</i>				●			●	●	●	●	4			
105		メジロ科	メジロ	<i>Zosterops japonicus</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	12			
106		センニュウ科	シマセンニュウ	<i>Locustella ochotensis</i>		●									1			
107			エゾセンニュウ	<i>Locustella fasciolata</i>										●	1			
108		ヨシキリ科	オオヨシキリ	<i>Acrocephalus orientalis</i>		●									1			
109		レンジャク科	キレンジャク	<i>Bombycilla garrulus</i>		●									1			
110			ヒレンジャク	<i>Bombycilla japonica</i>		●									1			
111		ゴジュウカラ科	ゴジュウカラ	<i>Sitta europaea</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	10			
112		キバシリ科	キバシリ	<i>Certhia familiaris</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	4			
113		ミソサザイ科	ミソサザイ	<i>Troglodytes troglodytes</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	11			
114		ムクドリ科	ムクドリ	<i>Spodiopsar cinereus</i>	●	●		●		●	●	●	●	●	6			
115			コムクドリ	<i>Agropsar philippensis</i>						●					1			
116		カワガラス科	カワガラス	<i>Circus pallasii</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	13			
117		ヒタキ科	トラツグミ	<i>Zoothera dauma</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	8			
118			クロツグミ	<i>Turdus cardis</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	11			
119			シロハラ	<i>Turdus pallidus</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	9			
120			アカハラ	<i>Turdus chrysolaus</i>	●										1			
121			ツグミ	<i>Turdus naumanni</i>	●	●	●		●		●	●	●	●	9			
122			コマドリ	<i>Luscinia akahige</i>	●	●									3			
123			コルリ	<i>Luscinia cyane</i>	●						●				2			
124			ルリビタキ	<i>Tarsiger cyanurus</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	9			
125			ジョウビタキ	<i>Phoenicurus aureus</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	12			
126			ノビタキ	<i>Saxicola torquatus</i>	●										1			
127			イソヒヨドリ	<i>Monticola solitarius</i>			●		●		●				4			
128			コサメビタキ	<i>Muscicapa dauurica</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	4			
129			キビタキ	<i>Ficedula narcissina</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	13			
130			オオルリ	<i>Cyanoptila cyanomelana</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	13			
131		イワヒバリ科	カヤクグリ	<i>Prunella rubida</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	8			
132		スズメ科	ニューナイスズメ	<i>Passer rutilans</i>	●		●								2			
133			スズメ	<i>Passer montanus</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	6			
134		セキレイ科	キセキレイ	<i>Motacilla cinerea</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	13			
135			ハクセキレイ	<i>Motacilla alba</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	10			
136			セグロセキレイ	<i>Motacilla grandis</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	11			
137			ピンズイ	<i>Anthus hodgsoni</i>	●			●						●	4			
138			タヒバリ	<i>Anthus rubescens</i>	●										1			
139		アトリ科	アトリ	<i>Fringilla montifringilla</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	7			
140			カワラヒワ	<i>Chloris sinica</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	13			
141			マヒワ	<i>Carduelis spinus</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	11			
142			ハギマシコ	<i>Leucosticte arctoa</i>			●								1			
143			ベニマシコ	<i>Uragus sibiricus</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	9			
144			オオマシコ	<i>Carpodacus roseus</i>	●										1			
145			イスカ	<i>Loxia curvirostra</i>	●	●								●	3			
146			ウソ	<i>Pyrrhula pyrrhula</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	11			
147			シメ	<i>Coccothraustes coccothraustes</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	5			
148			イカル	<i>Eophona personata</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	13			
149		ホオジロ科	ホオジロ	<i>Emberiza cioides</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	13			
150			ホオアカ	<i>Emberiza fucata</i>	●		●								2			
151			カシラダカ	<i>Emberiza rustica</i>	●	●		●			●	●	●	●	7			
152			ミヤマホオジロ	<i>Emberiza elegans</i>	●			●		●	●	●	●	●	7			
153			ノジコ	<i>Emberiza sulphurata</i>	●		●								1			
154			アオジ	<i>Emberiza spodocephala</i>	●		●	●	●	●	●	●	●	●	9			
155			クロジ	<i>Emberiza variabilis</i>	●	●	●	●	●						5			
156			オオジュリン	<i>Emberiza schoeniclus</i>										●	1			
合計	17目	48科		156種	100	97	73	74	68	91	62	68	74	84	62	87	73	1

注1) 本リストは家禽・籠抜けを含む。

注2) 種を基準として種数を数えている (亜種は当該亜種が含まれる種が確認されているときは数えていない)。

鳥類重要種一覧（令和2年度）

No	目名	科名	種名	学名	選定基準			北海道	東北	北陸	中部					中国	九州	確認ダム数				
					①	②	③	岩尾内ダム	森吉山ダム	三国川ダム	大町ダム	宇奈月ダム	丸山ダム	横山ダム	味噌川ダム	阿木川ダム	徳山ダム		岩屋ダム	苦田ダム	耶馬溪ダム	
1	キジ目	キジ科	エゾライチョウ	<i>Tetrastes bonasia</i>			DD	●											1			
2			ヤマドリ	<i>Syrnaticus soemmerringii</i>			亜種アカヤマドリ：NT		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●	1		
3	カモ目	カモ科	オシドリ	<i>Aix galericulata</i>			DD	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	10		
4	ペリカン目	サギ科	ミソゴイ	<i>Gorsachius goisagi</i>			VU				●								1			
5	ヨタカ目	ヨタカ科	ヨタカ	<i>Caprimulgus indicus</i>			NT		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	9			
6	チドリ目	シギ科	オオジシギ	<i>Gallinago hardwickii</i>			NT	●											1			
7		カモメ科	オオセグロカモメ	<i>Larus schistisagus</i>			NT	●											1			
8	タカ目	ミサゴ科	ミサゴ	<i>Pandion haliaetus</i>			NT	●	◎	◎	◎	●	●	●	●	◎	●	●	●	13		
9		タカ科	ハチクマ	<i>Pernis ptilorhynchus</i>			NT		●		●				●				4			
10			オジロワシ	<i>Haliaeetus albicilla</i>	天然	国内	VU	●	◎		◎				◎				4			
11			オオワシ	<i>Haliaeetus pelagicus</i>	天然	国内	VU	●											1			
12			ハイタカ	<i>Accipiter nisus</i>			NT	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	8			
13			オオタカ	<i>Accipiter gentilis</i>			亜種オオタカ：NT	●	◎	●	●	●	●	◎	●	●	◎	●	12			
14			イヌワシ	<i>Aquila chrysaetos</i>	天然	国内	EN			●	●	●							2			
15			クマタカ	<i>Nisaetus nipalensis</i>		国内	EN	●	◎	●	●	●	●	●	●	●	●	●	11			
16	キツツキ目	キツツキ科	クマゲラ	<i>Dryocopus martius</i>	天然		VU	●											1			
17	ハヤブサ目	ハヤブサ科	ハヤブサ	<i>Falco peregrinus</i>		国内・国際	亜種ハヤブサ：VU	●		◎		◎			●	◎			4			
18	スズメ目	ヤイロチョウ科	ヤイロチョウ	<i>Pitta nympha</i>		国内	EN											●	2			
19		サンショウクイ科	サンショウクイ	<i>Pericrocotus divaricatus</i>			亜種サンショウクイ：VU		●		●	●	●	●	●	●	●	●	10			
20			サンショウクイ（亜種）	<i>Pericrocotus divaricatus divaricatus</i>			VU			●									1			
21		ムシクイ科	オオムシクイ	<i>Phylloscopus examinandus</i>			DD	●	●						●		●		4			
22		ホオジロ科	ノジコ	<i>Emberiza sulphurata</i>			NT		●										1			
合計	9目	14科	22種		4	6		22	12	7	6	6	7	8	6	5	5	8	6	6	6	1

凡例) ●、◎：重要種に該当するため種数計数(うち◎は、P5-7～P5-9 に示す分析対象種のうち、当該ダム等で今回確認)

注1) 耶馬溪ダムにおいて亜種アカヤマドリが確認されている。それ以外のダムでは種ヤマドリとし、重要種ではないため○で示し、カウントからは除外した。

注2) ハヤブサは基亜種ハヤブサ(F. p. japonensis)がVUに、亜種シマハヤブサ(F. p. fluruitii)がEXに、オオハヤブサ(F. p. pealei)、アメリカハヤブサ(F. p. anatum)が指定なしに指定されている。ここではオオハヤブサ、アメリカハヤブサはごく希な渡来であるため、基亜種として指定されているVUで示した。

注3) サンショウクイは基亜種サンショウクイ(P. d. divaricatus)がVUに指定、亜種リュウキュウサンショウクイ(P. d. tegimae)は指定がない。ここでは分布から、種サンショウクイとして記録されているものも、VUに指定されている基亜種サンショウクイと同じランクで示した。ただし亜種リュウキュウサンショウクイは生息地を九州・四国へ拡げているという見もある。

選定基準

①文化財保護法

特天：国指定特別天然記念物 天然：天然記念物

②絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律〔種の保存法〕(平成5年)

国内：国内希少野生動植物種

③環境省〔レッドリスト2020〕掲載種

CR：絶滅危惧ⅠA類—ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高い種

EN：絶滅危惧ⅠB類—ⅠA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高い種

VU：絶滅危惧Ⅱ類—絶滅の危険が増大している種

NT：準絶滅危惧—現時点では絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種

DD：情報不足—評価するだけの情報が不足している種

LP：絶滅のおそれのある地域個体群—地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの。

鳥類国外外来種一覧（令和2年度）

No	目名	科名	種名	学名	国外外来種	北海道	東北	北陸			中部					中国	九州	確認ダム数		
						岩尾内ダム	森吉山ダム	三国川ダム	大町ダム	宇奈月ダム	丸山ダム	横山ダム	味噌川ダム	阿木川ダム	徳山ダム	岩屋ダム	苦田ダム		耶馬溪ダム	
1	キジ目	キジ科	コジュケイ	<i>Bambusicola thoracicus</i>	外来種						●	●	●	●		●	●	●	7	
2	ハト目	ハト科	カワラバト(ドバト)	<i>Columba livia</i>	家禽								●					●	2	
3	スズメ目	チメドリ科	ガビチョウ	<i>Garrulax canorus</i>	特定/総合対策(重点)													●	1	
4			ソウシチョウ	<i>Leiothrix lutea</i>	特定/総合対策(重点)						●			●		●	●		4	
合計	3目	3科		4種		4	0	0	0	0	0	2	1	1	2	1	1	2	4	—

注) ●は確認を示す。

凡例)

「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（以下「特定外来生物法」）指定種

特定外来：「特定外来生物法」における特定外来生物

未判定：「特定外来生物法」における未判定外来生物

「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（以下「生態系被害防止外来種リスト」）掲載種

定着予防（侵入予防）：国内に未侵入・未定着であり、定着した場合に生態系等への被害のおそれがあるため、特に国内への侵入を未然に防ぐ必要がある外来種。

定着予防（その他）：侵入の情報はあるが、国内に未定着であり、定着した場合に生態系等への被害のおそれがあるため、早期防除が必要な外来種。

総合対策（緊急）：国内に定着が確認されており、生態系等への被害のおそれがあるため、総合的に対策が必要な外来種のうち、緊急性が高く、積極的に防除が必要な外来種。

総合対策（重点）：国内に定着が確認されており、生態系等への被害のおそれがあるため、総合的に対策が必要な外来種のうち、甚大な被害が予想される重点的に対策が必要な外来種。

総合対策（その他）：国内に定着が確認されており、生態系等への被害のおそれがあるため、総合的に対策が必要な外来種のうち、緊急、重点に該当しない種。

産業管理：産業又は公益的役割において重要であり、利用において逸出等の防止のための適切な管理に重点を置いた対策が必要な外来種。

「日本鳥類目録 改訂第7版」において国内で繁殖記録のある外来種のリスト掲載種

外来種：国内で繁殖記録のある外来種（「Part B 種・亜種」掲載種）

5.2 生物多様性

(1) ダム湖周辺環境の指標となる猛禽類の確認状況

ここでは、食物連鎖の上位に位置する生物種の生息状況が、下位に位置する生物を含めた地域の生態系の指標となるという観点から、ダムのある山間地域を生息の場とする猛禽類のイヌワシ、オオタカ、クマタカ、ハヤブサについて、ダム湖周辺環境における確認状況を整理しました。また参考として、オオワシ、オジロワシの確認状況も整理しました。

なお、1～4巡目との比較は、調査の範囲や時期、回数等の条件が必ずしも同一ではありません。比較結果は同一ダムでの消長を示すものではなく、全国的な傾向を検討するための参考です。

・今回分析対象とした 13 ダムでは、イヌワシ、オオタカ、クマタカ、ハヤブサ、オオワシ、オジロワシのいずれかを確認

猛禽類は食物連鎖の上位に位置することから、地域の生態系の指標となります。

ダムのある山間地域やダム湖周辺等を採餌・生息の場とする猛禽類であるオオタカが 12 ダムで、イヌワシが 2 ダムで、クマタカが 11 ダムで、ハヤブサが 4 ダムで、オオワシが 1 ダムで、オジロワシが 4 ダムで確認されました。

指標となる猛禽類の確認ダム数の巡目比較

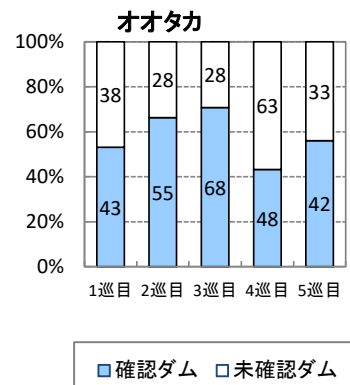
種名	1巡目調査 (81ダム)	2巡目調査 (83ダム)	3巡目調査 (96ダム)	4巡目調査 (111ダム)	5巡目調査 (75ダム)	今回 確認	
留鳥	イヌワシ	7ダム [8.6%]	12ダム [14.4%]	12ダム [12.5%]	6ダム [5.4%]	4ダム [5.3%]	○
	オオタカ	43ダム [53.1%]	55ダム [66.3%]	68ダム [70.8%]	48ダム [43.2%]	42ダム [56.0%]	○
	クマタカ	35ダム [43.2%]	48ダム [57.8%]	53ダム [55.2%]	64ダム [57.7%]	52ダム [69.3%]	○
	ハヤブサ	12ダム [14.8%]	20ダム [24.1%]	41ダム [41.8%]	43ダム [38.7%]	40ダム [53.3%]	○
渡りの鳥	オオワシ	4ダム [4.9%]	3ダム [3.6%]	7ダム [7.3%]	9ダム [8.1%]	5ダム [6.7%]	○
	オジロワシ	13ダム [16.0%]	15ダム [18.1%]	20ダム [20.8%]	23ダム [20.7%]	10ダム [13.3%]	○

※ ()内は各巡目において調査を実施しているダムの数を示す。巡目の途中から調査を行っていたり、途中の年度を調査していないダムがあるため、巡目毎の調査ダム数は同じではない。

※ []内は確認ダム数の対象ダム数に対する%を示す。

今回とりまとめを行った 13 ダムで、イヌワシ、オオタカ、クマタカ、ハヤブサ、オオワシ、オジロワシのいずれかを確認しました。

なお、国内外の絶滅のおそれのある野生生物を保護するため「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」（種の保存法）が平成 5(1993)年 4 月に制定された後、環境省等により猛禽類の調査マニュアルが整備され、猛禽類調査が実施されたことから、猛禽類が確認されたダムの割合は 1 巡目より 2 巡目以降の方が高くなったものと考えられます。また、今回とりまとめ対象としたダムのうち、森吉山ダムは、河川水辺の国勢調査を初めて実施したダムですので、すべての種は初めての確認となりますので、過年度との比較は行っていません。



※グラフ中の数字はダム数

オオタカは、今回取りまとめを行った13ダムのうち12ダムで確認されました。3巡目まで確認されていた中部の丸山ダムでは、今回は確認されませんでした。オオタカは環境省のレッドリストで準絶滅危惧に指定されており、陸域環境を保全する上で注目される種であり、北海道から九州まで分布する種で、稀な旅鳥・冬鳥として沖縄にも飛来します。オオタカは、小型の鳥類で、リス等の小型哺乳類も捕食します。

イヌワシは、今回取りまとめを行った13ダムのうち北陸の三国川ダムと宇奈月ダムで確認されました。4巡目まで確認されていた中部の横山ダムでは、今回は確認されませんでした。

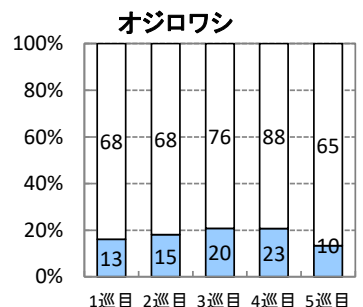
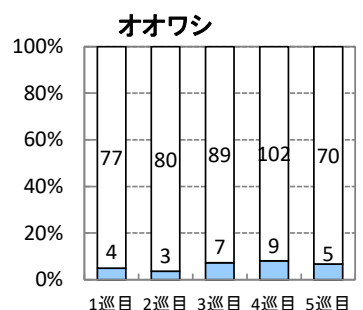
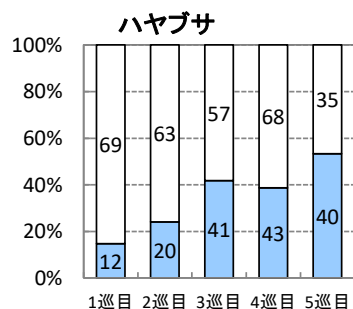
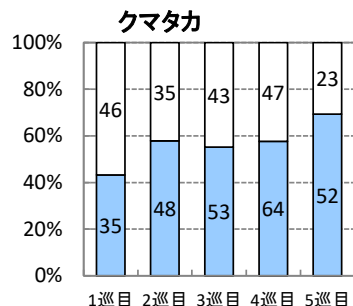
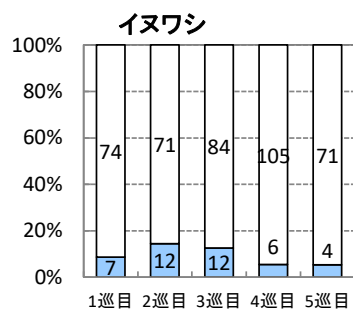
クマタカは、今回取りまとめを行った13ダムのうち11ダムで確認されました。3巡目まで確認されていた九州の耶馬溪ダムでは、今回は確認されませんでした。

クマタカ、イヌワシは、陸域環境を保全する上で注目される種であり、北海道から九州まで分布する種です。環境省のレッドリストで絶滅危惧IB類に指定されており、小型～中型哺乳類、小型から中型の鳥類やヘビ類等を主な餌とする高次捕食者です。

ハヤブサは、今回取りまとめを行った13ダムのうち4ダムで確認されました。このうち、北陸の三国川ダム、中部の丸山ダム、徳山ダムでは初めて確認されました。ハヤブサは海岸や河川等の開けたところに生息し、崖や岩棚に営巣します。小型から中型の鳥類を捕食する中型猛禽類であり、北海道から九州まで分布する種で、稀な旅鳥・冬鳥として沖縄にも飛来します。環境省のレッドリストで絶滅危惧II類に指定されています。

オオワシは、北海道の岩尾内ダムで確認されました。オオワシは、ロシア極東ベーリング海沿岸部等で繁殖し、越冬のため北海道や本州北部・中部に飛来します。大型魚を主な餌としていますが、水鳥や哺乳類の漂着死体も捕食します。環境省のレッドリストで絶滅危惧II類に指定されています。

オジロワシは、北海道の岩尾内ダム、東北の森吉ダム、北陸の宇奈月ダム、中部の徳山ダムで確認されました。このうち岩尾内ダムでは繁殖活動（営巣）が確認されています。オジロワシは、ロシア極東地方や北海道でも繁殖します。海岸や湖沼周辺、河川流域の大木に営巣します。冬季には越冬のため本州北部～中部に飛来し、九州には少数飛来します。最近、人間の活動圏近くで営巣するつがいも増え、営巣地はやや増加傾向にありますが、繁



■ 確認ダム □ 未確認ダム

※グラフ中の数字はダム数

殖は必ずしも安定していません。環境省のレッドリストで絶滅危惧Ⅱ類に指定されています。

なお、猛禽類は小鳥類より多くの餌を必要とすることから、猛禽類が生息・繁殖するためには、餌となる生物が豊富に生息している環境が存在することが重要です。ダム湖周辺の環境が猛禽類の生息環境として適切であるか、今後も継続して確認していく必要があります。



オオタカ (苫田ダム)



イヌワシ (宇奈月ダム)



クマタカ (苫田ダム)

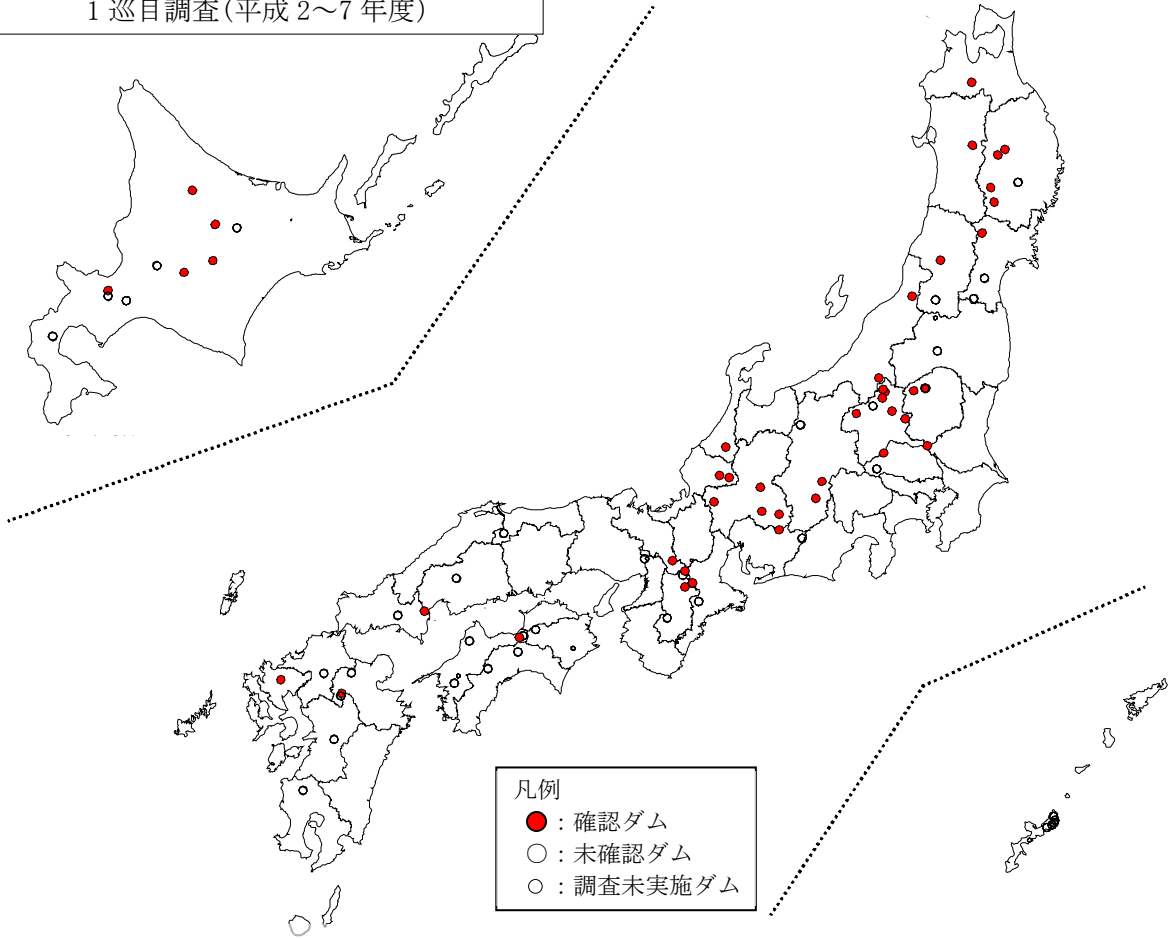


ハヤブサ (徳山ダム)

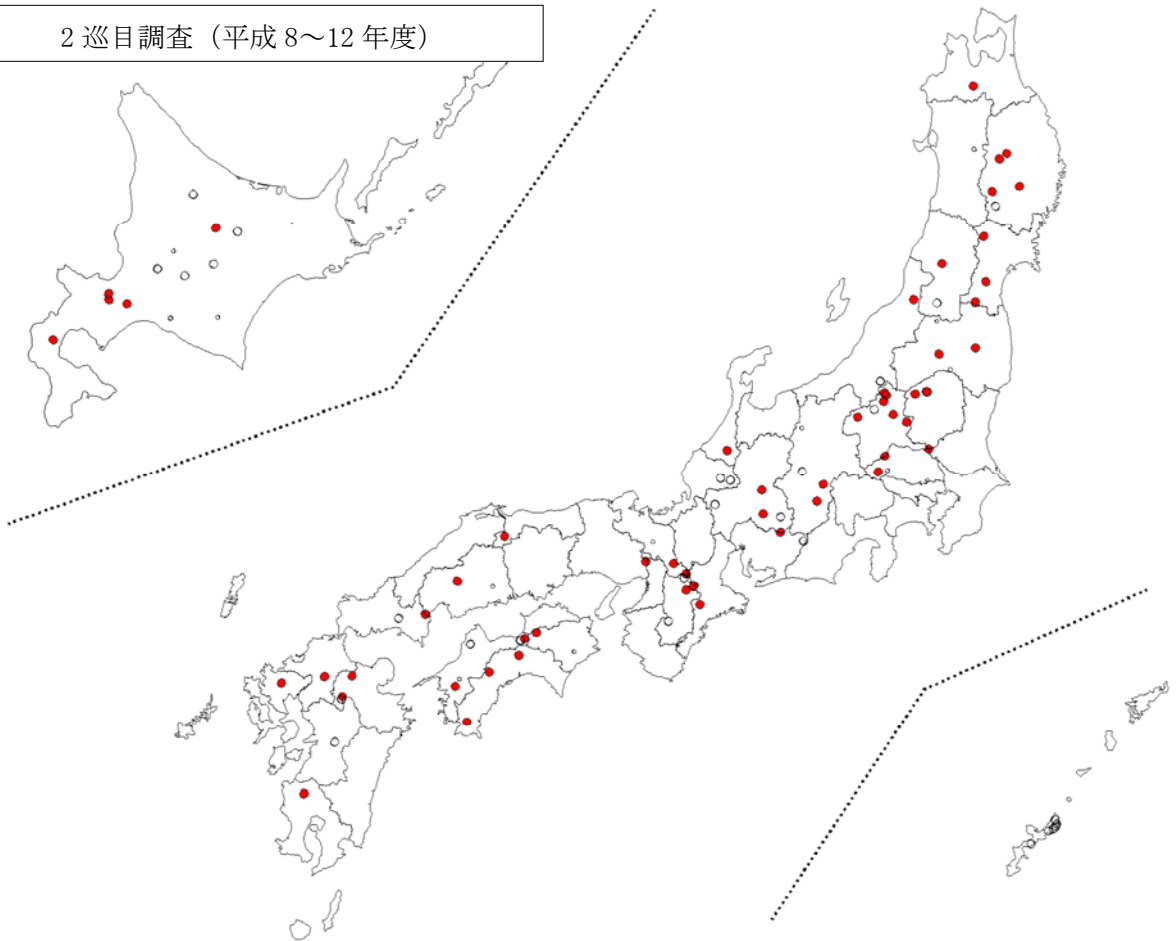


オジロワシ 営巣集 (岩尾内ダム)

1 巡目調査(平成 2～7 年度)

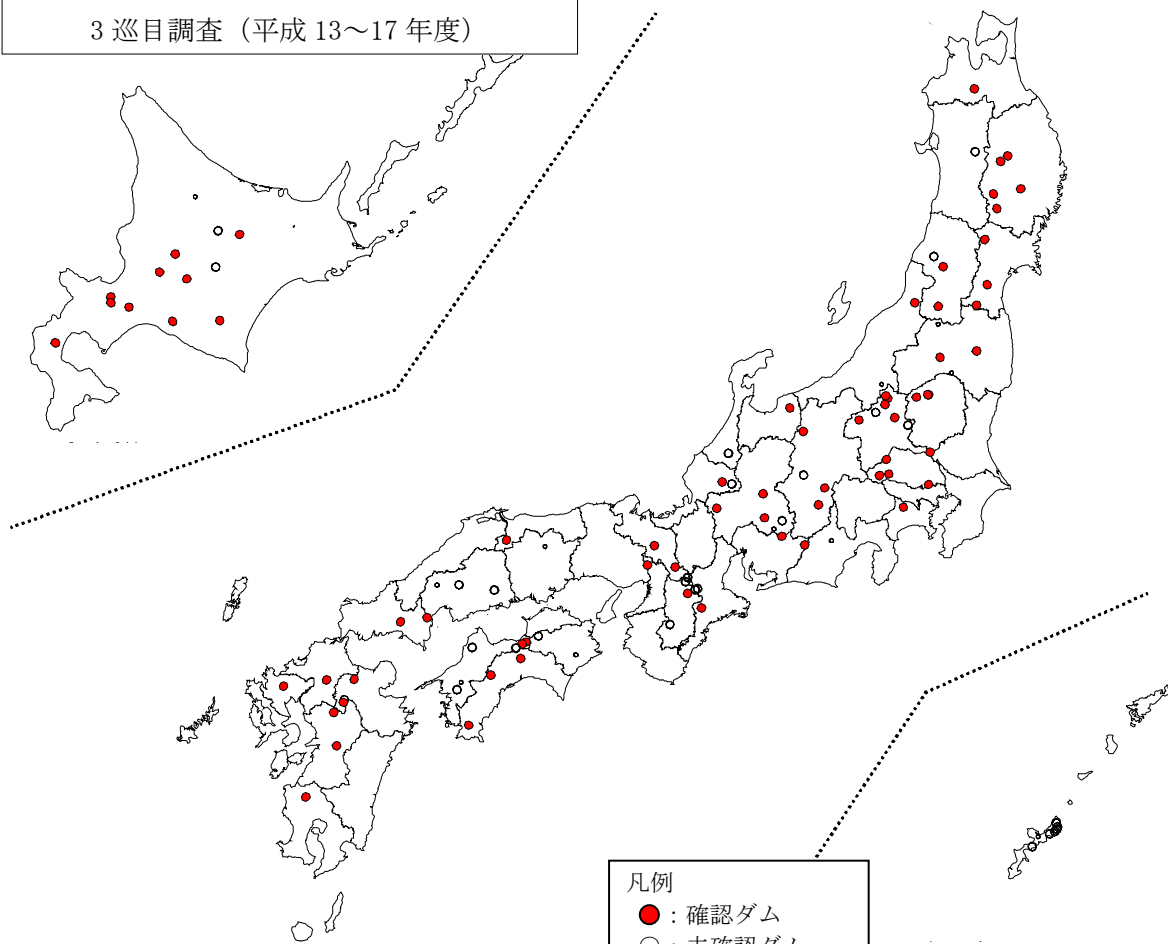


2 巡目調査 (平成 8～12 年度)

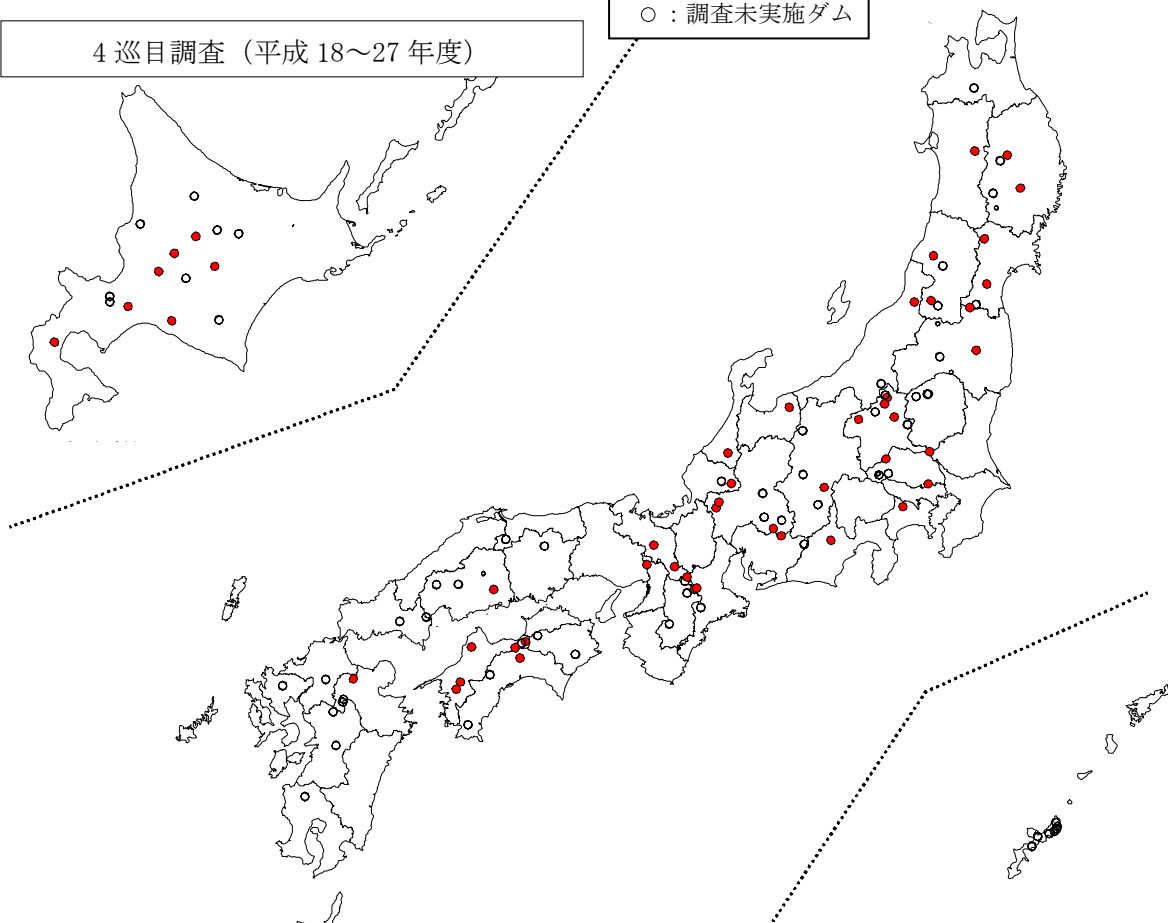


オオタカの確認状況 (1 巡目調査、2 巡目調査)

3 巡目調査 (平成 13～17 年度)

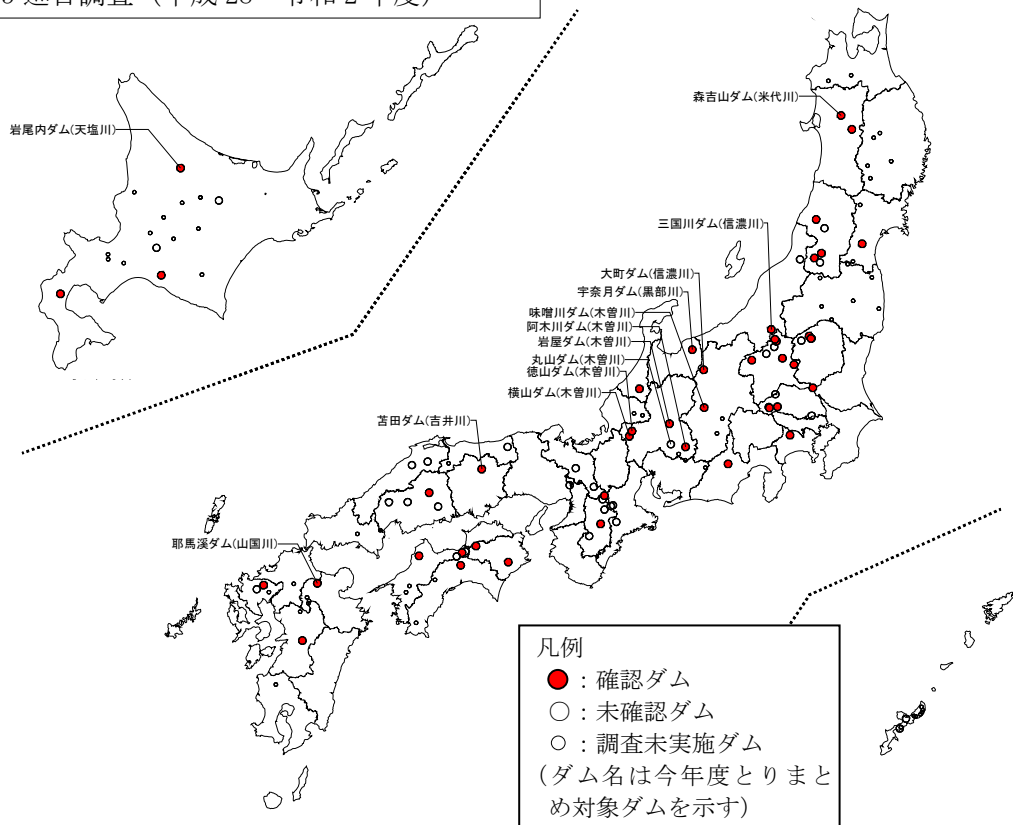


4 巡目調査 (平成 18～27 年度)



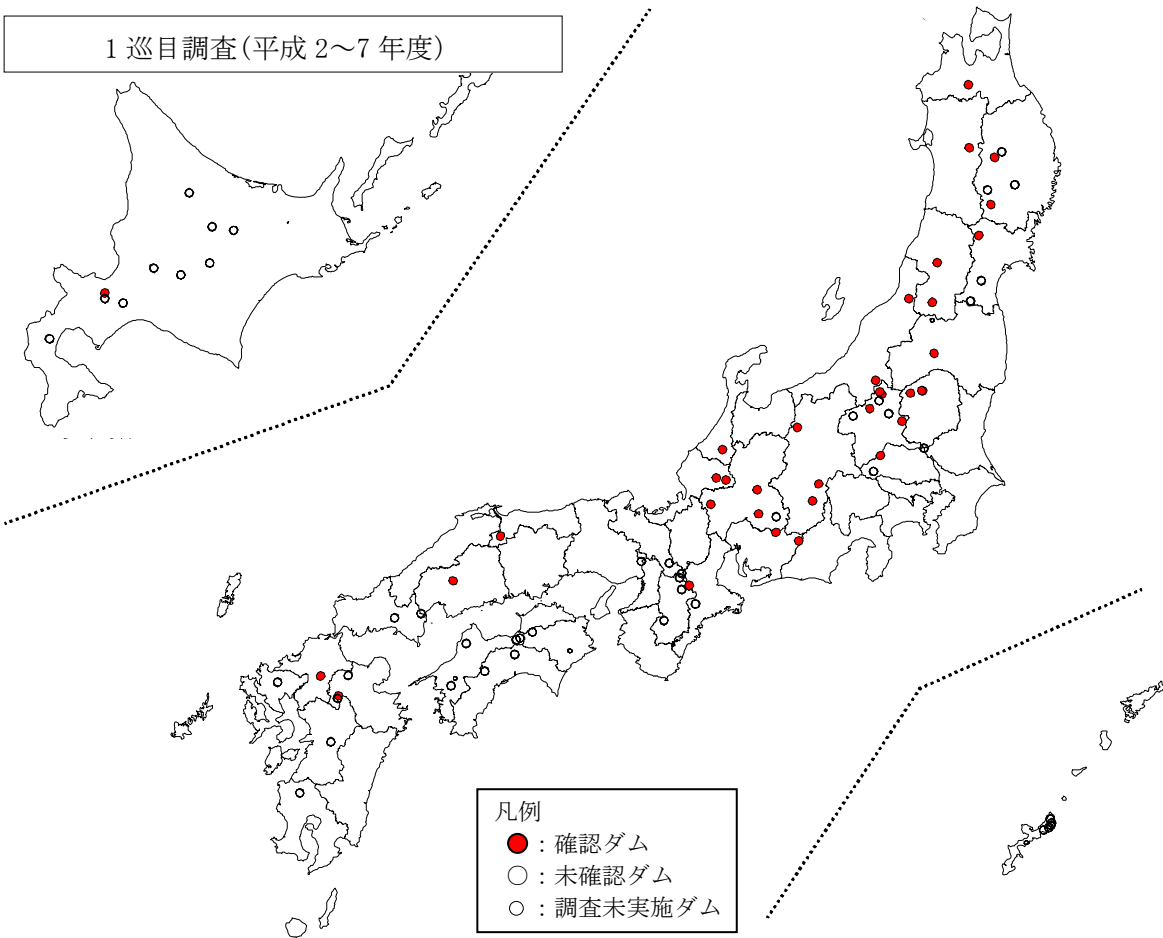
オオタカの確認状況 (3 巡目調査、4 巡目調査)

5 巡目調査（平成 28～令和 2 年度）

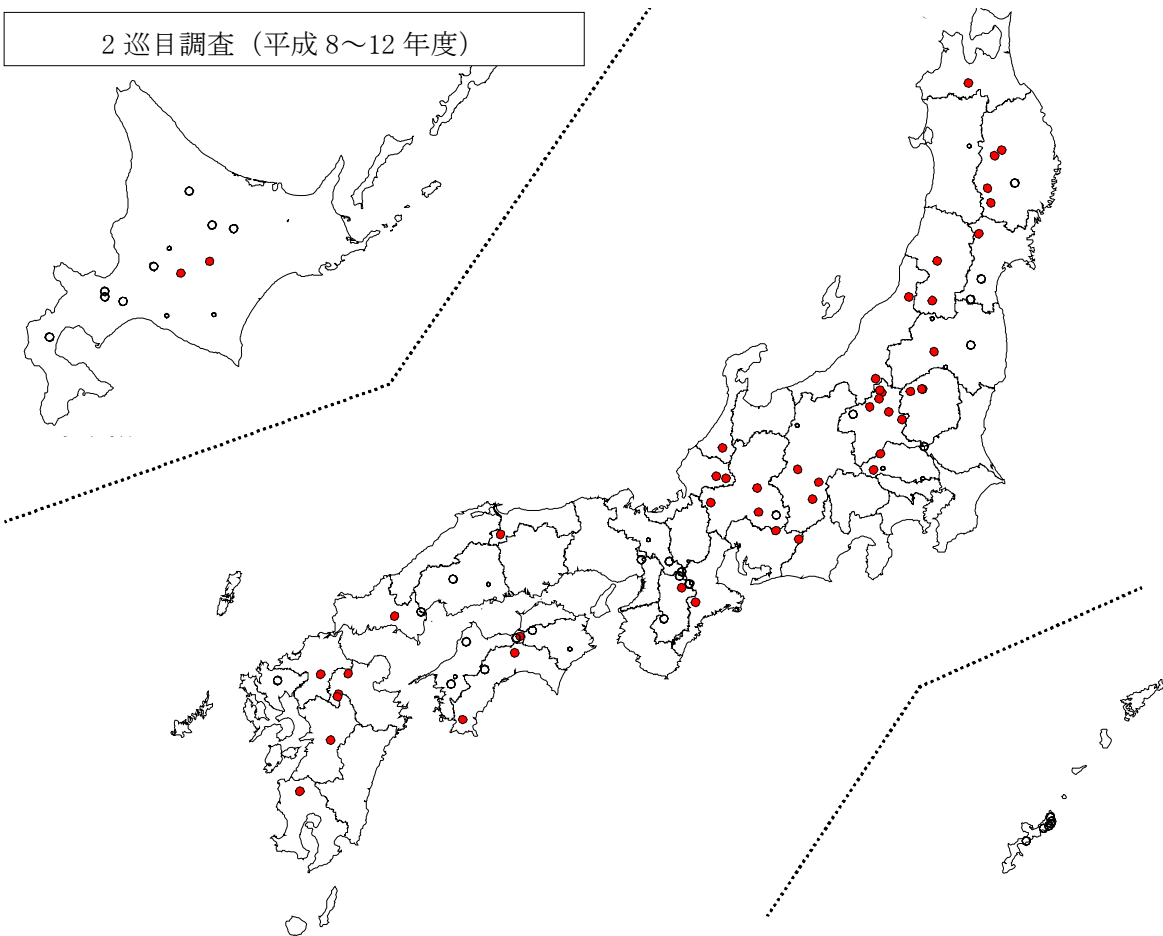


オオタカの確認状況（5 巡目調査）

1 巡目調査(平成 2～7 年度)

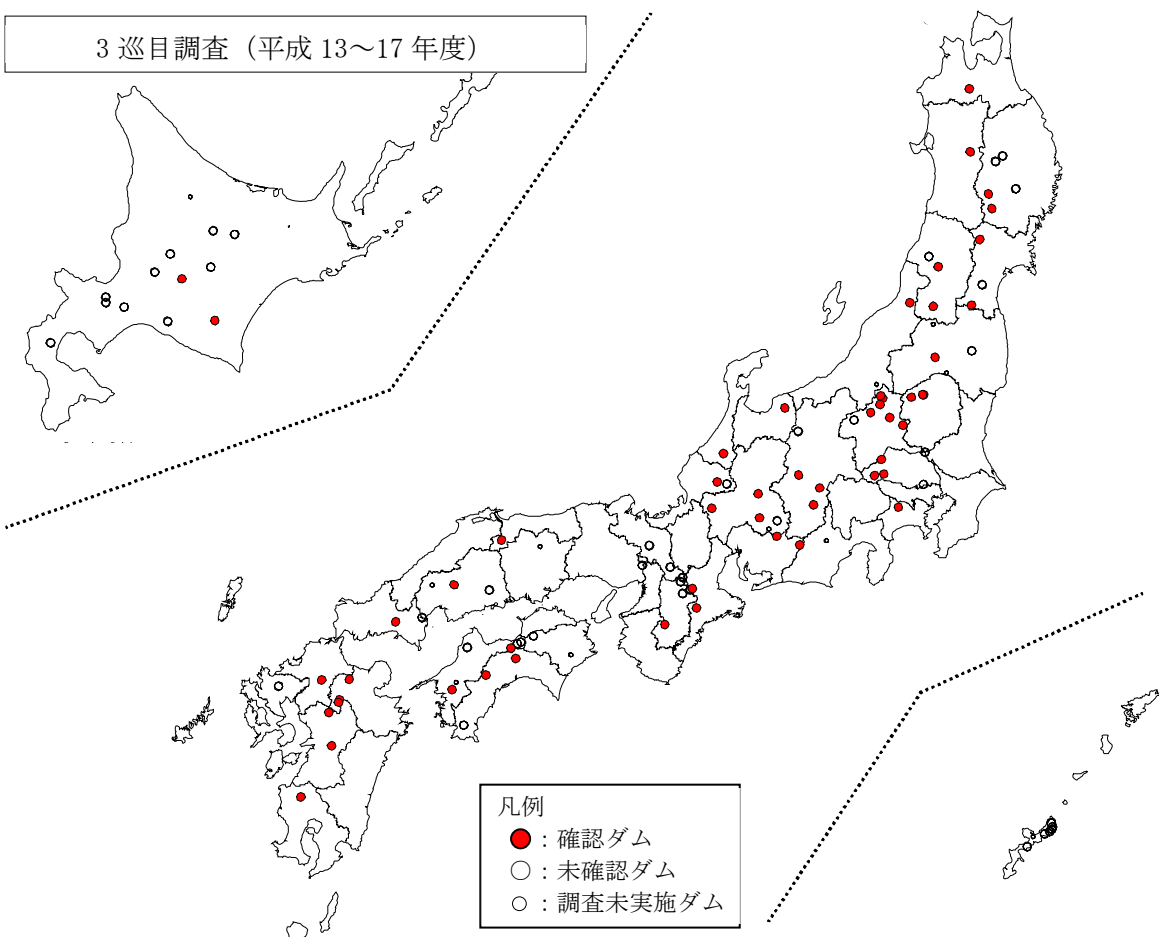


2 巡目調査 (平成 8～12 年度)

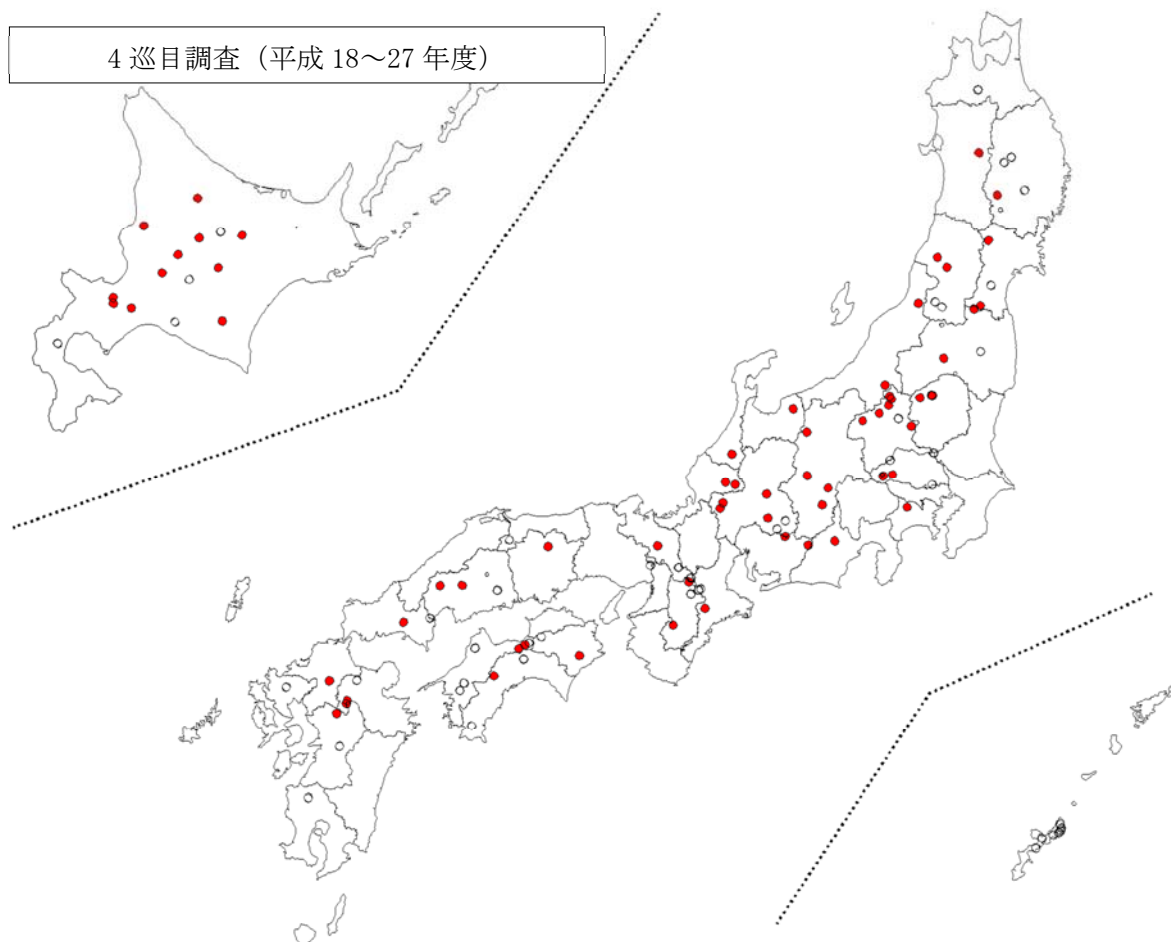


クマタカの確認状況 (1 巡目調査、2 巡目調査)

3 巡目調査 (平成 13～17 年度)

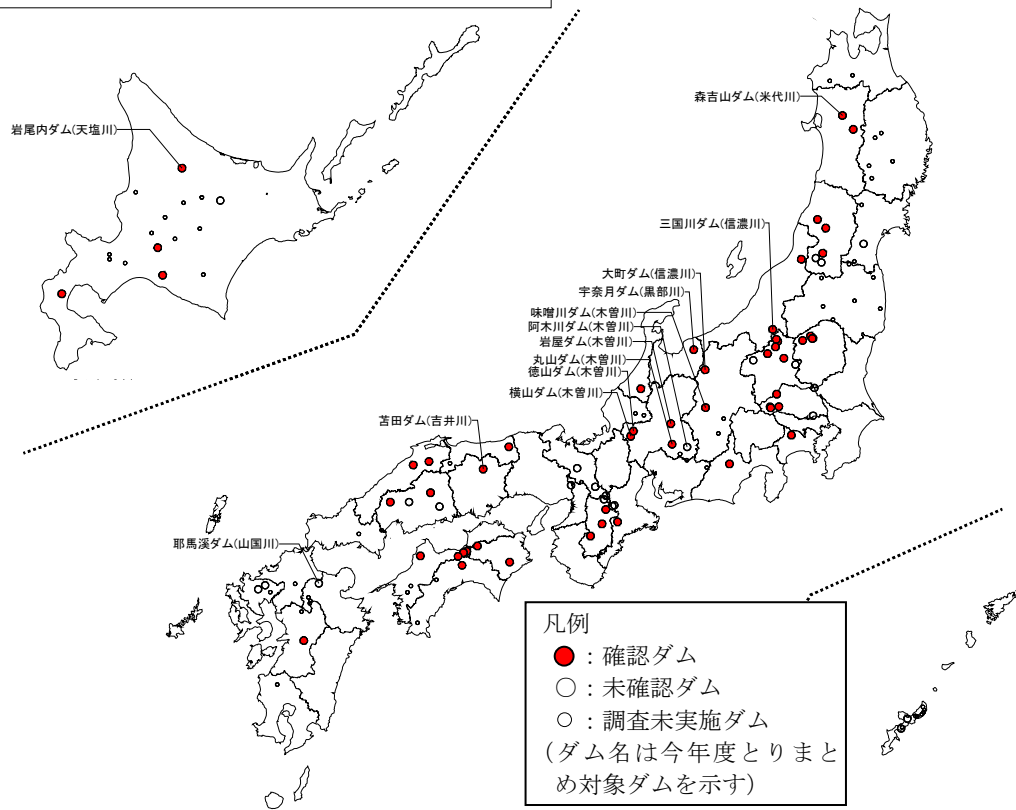


4 巡目調査 (平成 18～27 年度)



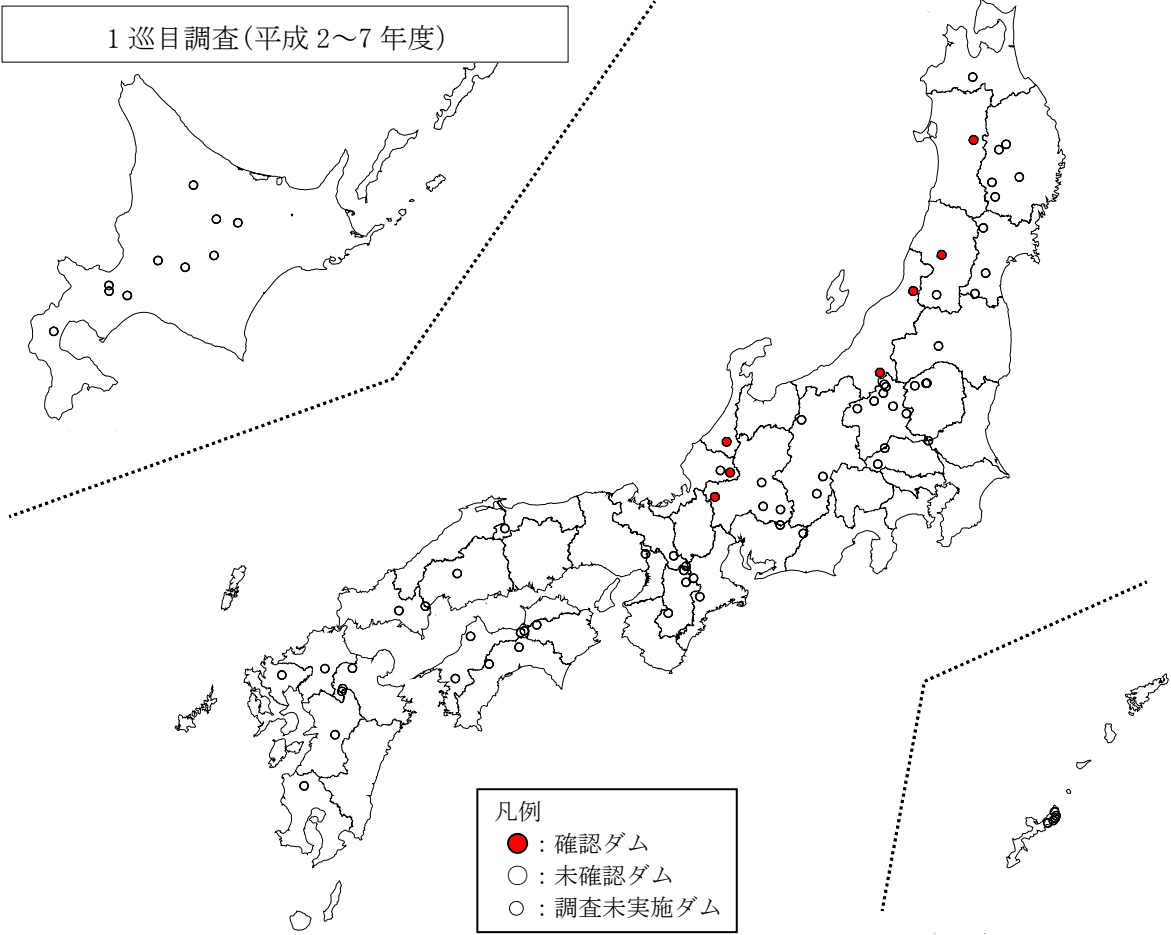
クマタカの確認状況 (3 巡目調査、4 巡目調査)

5 巡目調査（平成 28～令和 2 年度）

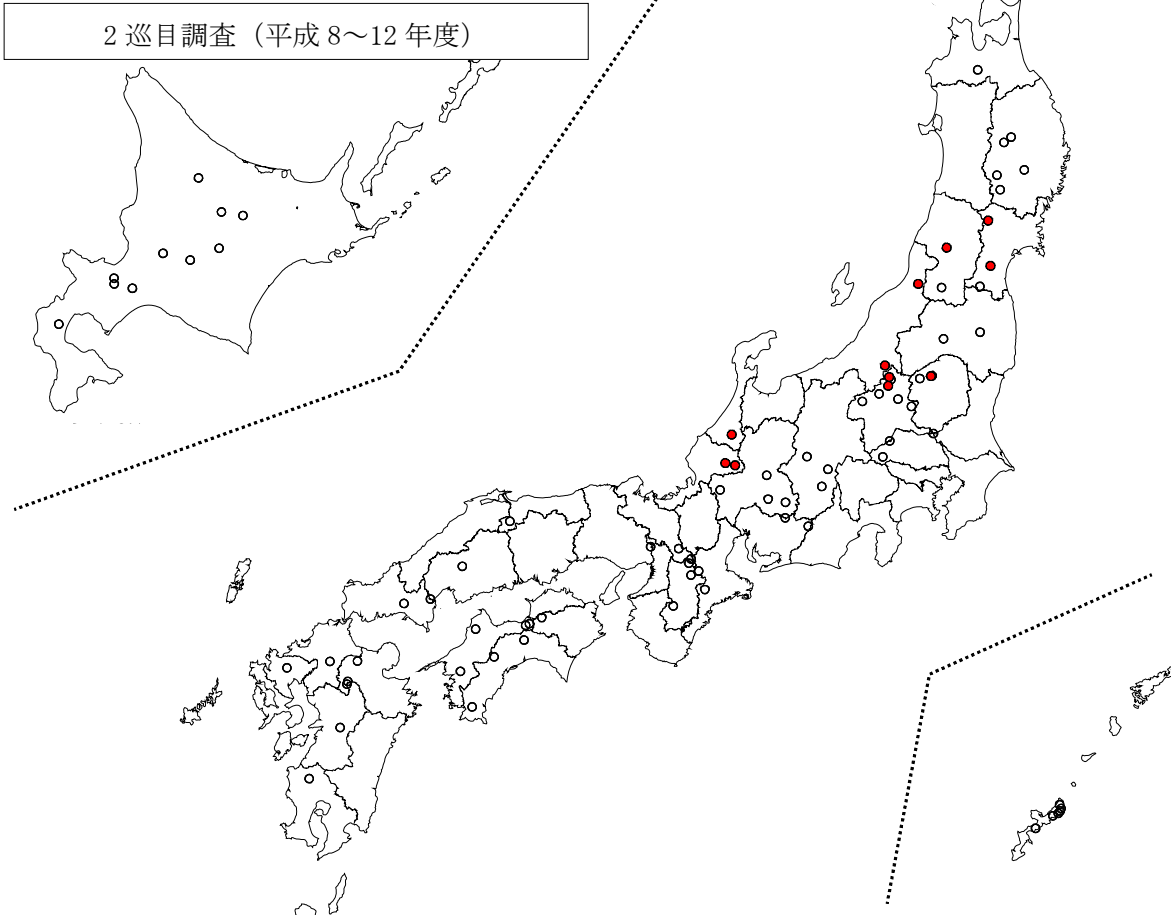


クマタカの確認状況（5 巡目調査）

1 巡目調査(平成 2~7 年度)

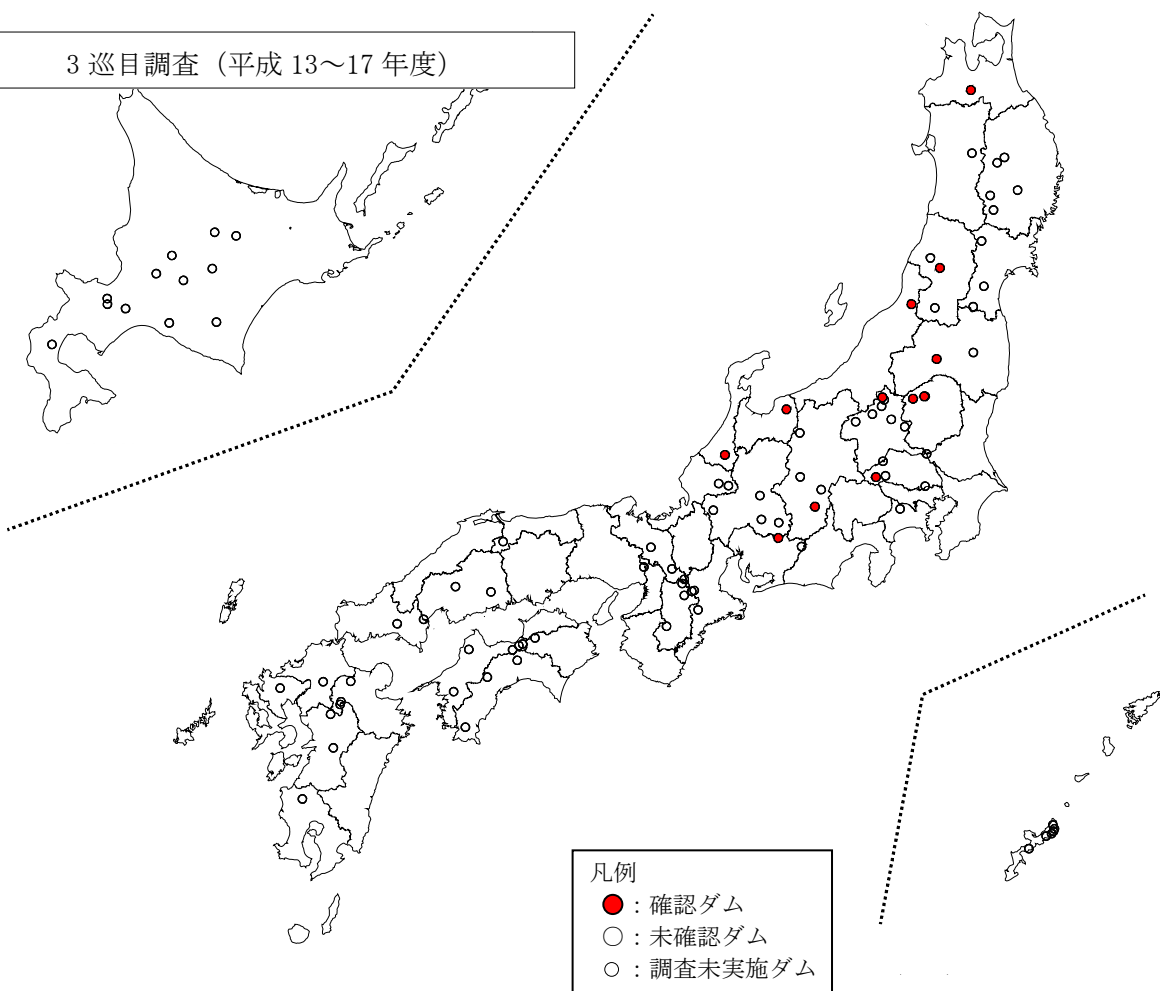


2 巡目調査 (平成 8~12 年度)

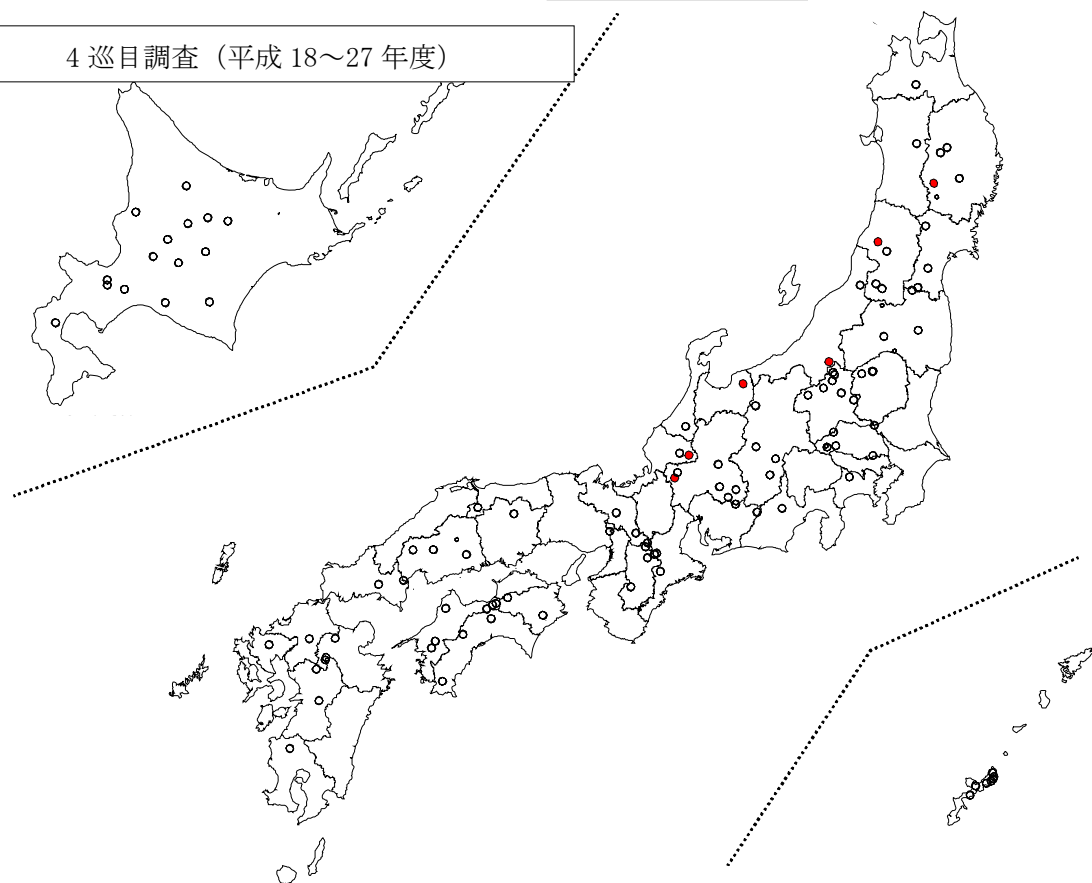


イヌワシの確認状況 (1 巡目調査、2 巡目調査)

3 巡目調査 (平成 13～17 年度)

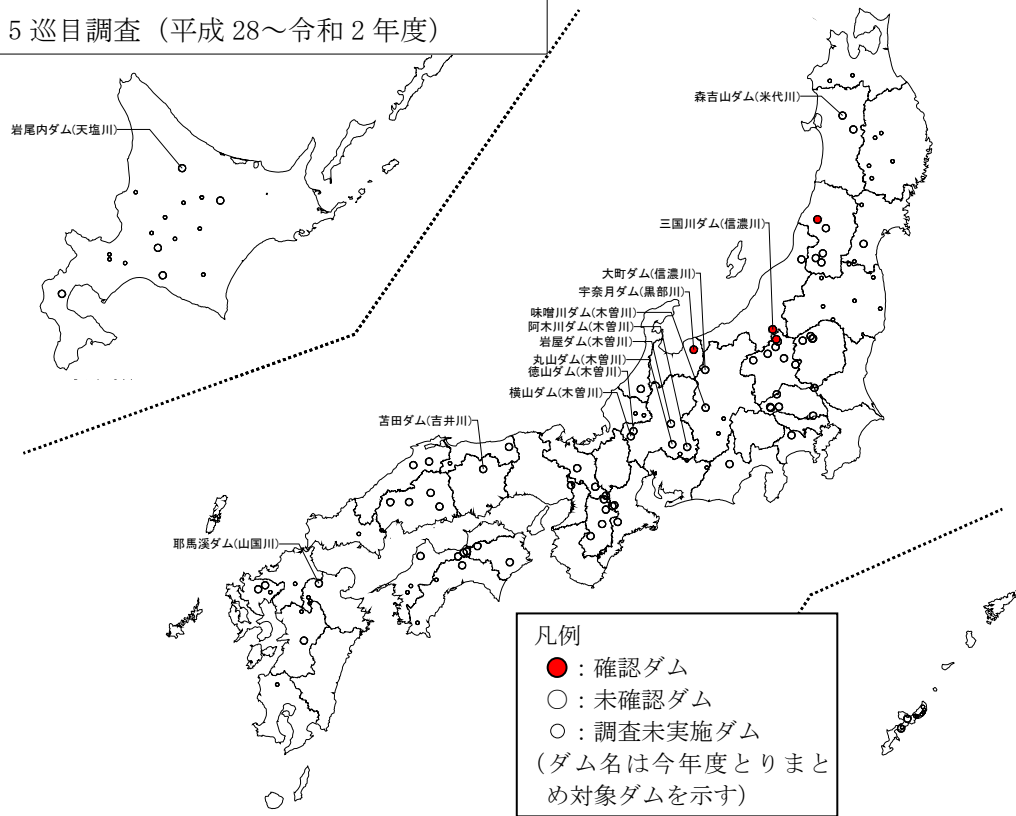


4 巡目調査 (平成 18～27 年度)



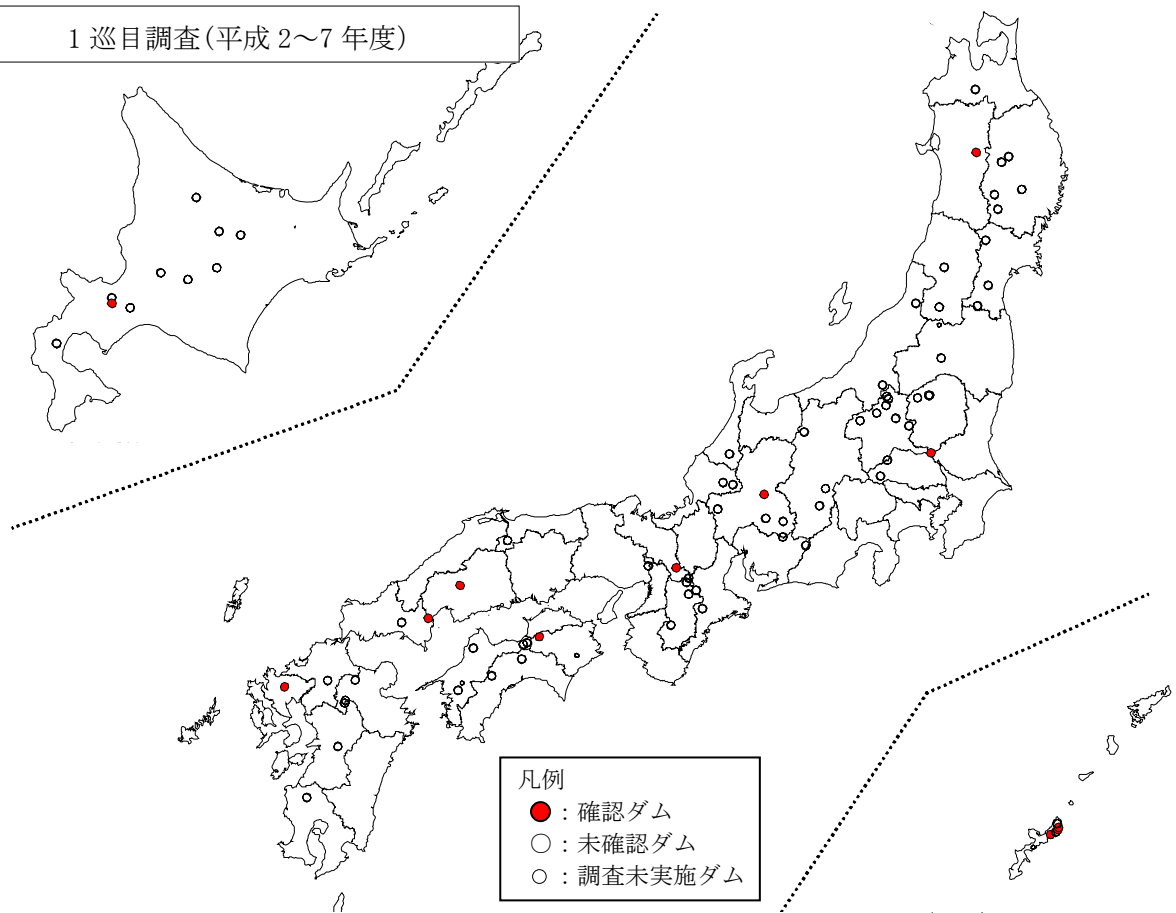
イヌワシの確認状況 (3 巡目調査、4 巡目調査)

5 巡目調査 (平成 28～令和 2 年度)

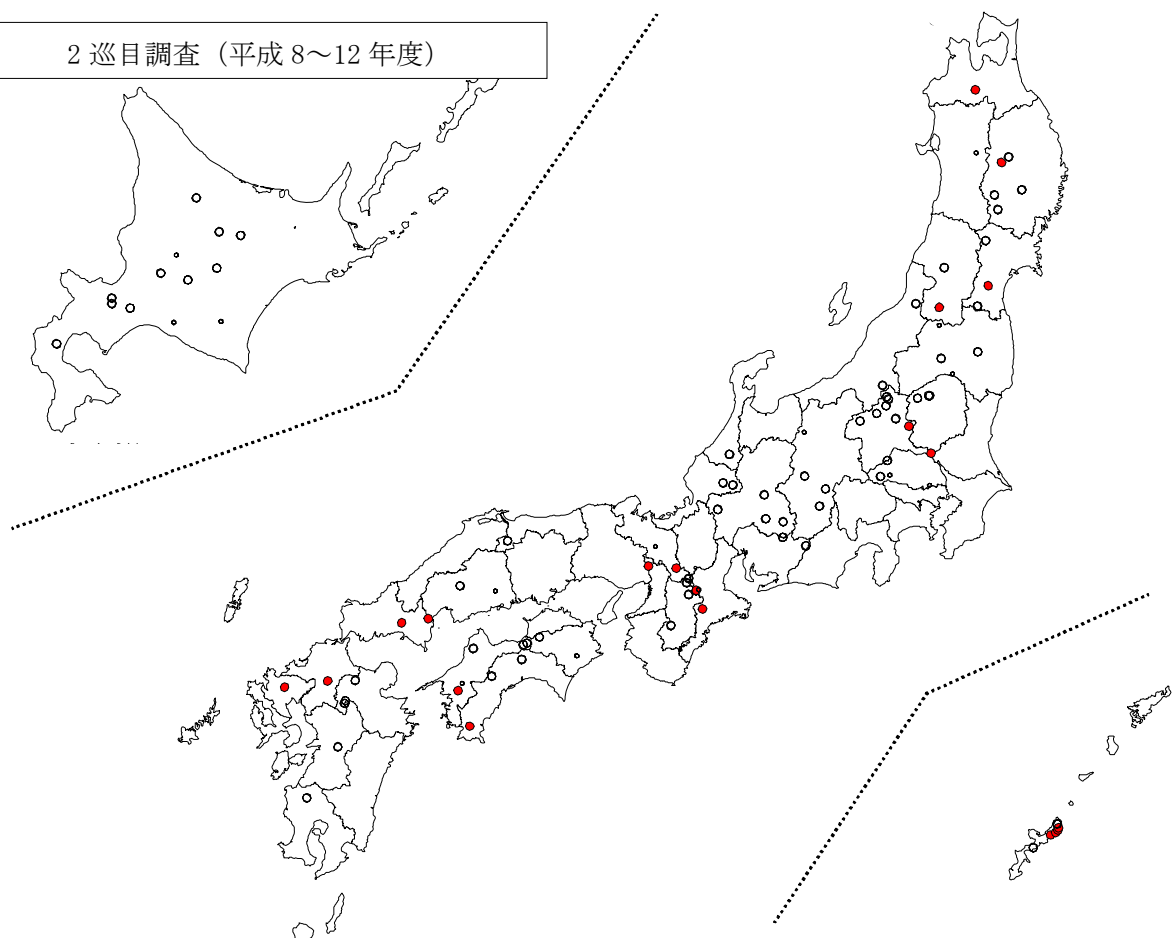


イヌワシの確認状況 (5 巡目調査)

1 巡目調査(平成 2～7 年度)

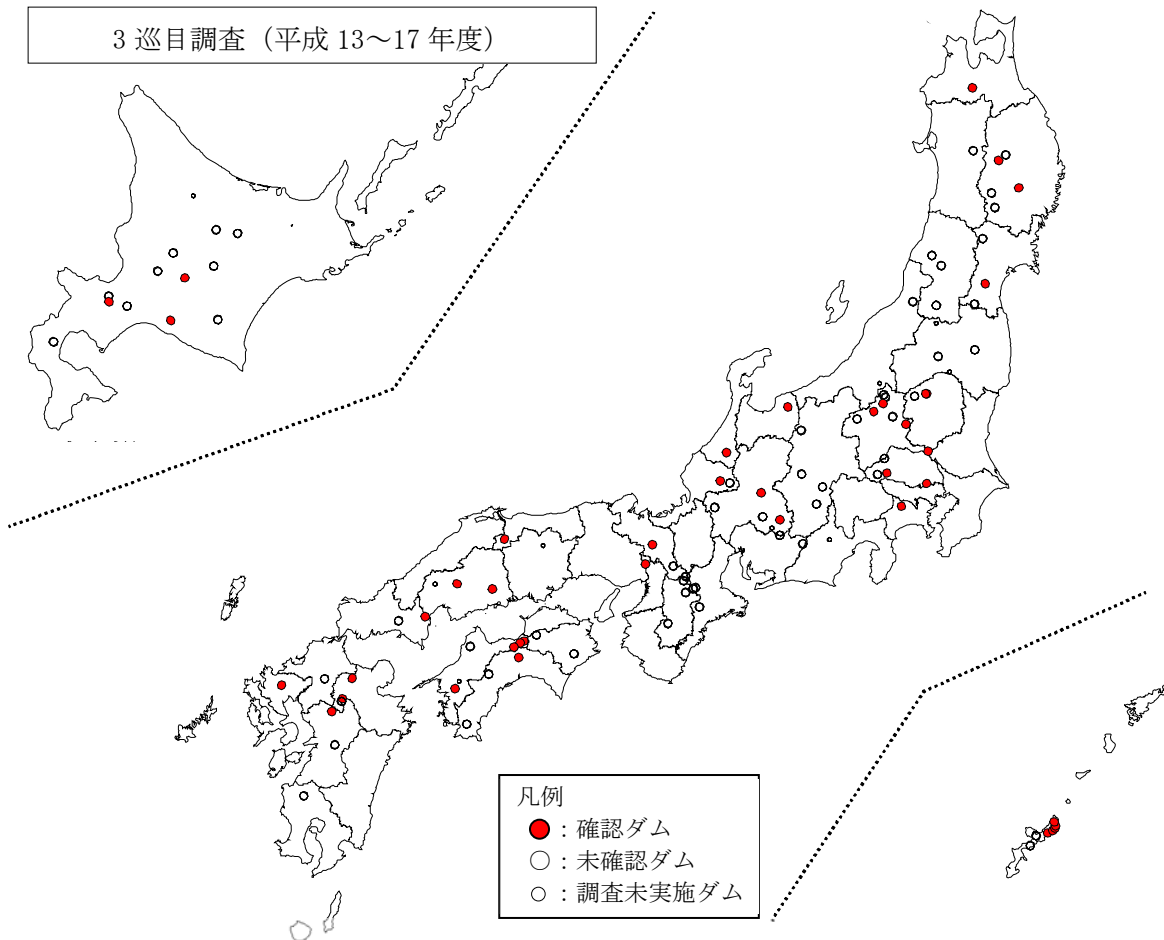


2 巡目調査 (平成 8～12 年度)

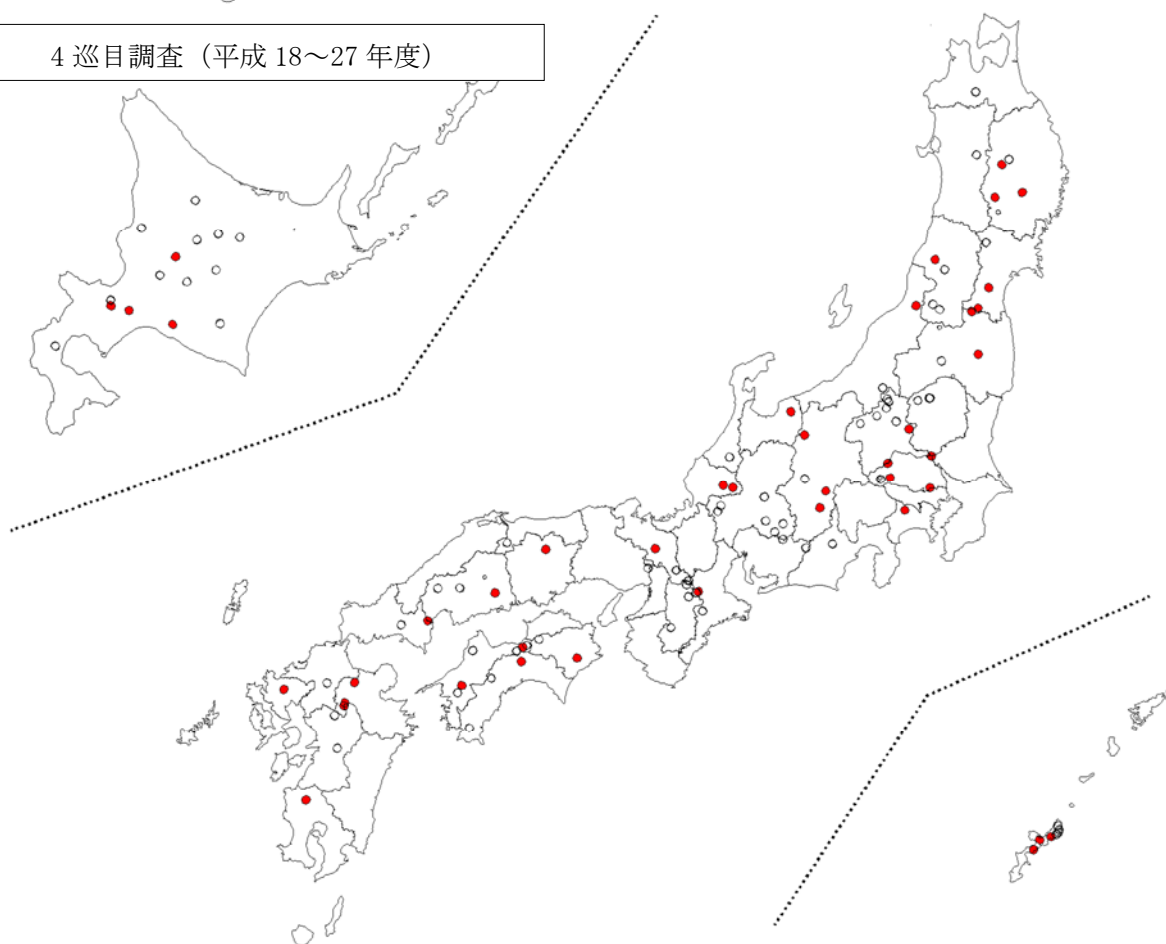


ハヤブサの確認状況 (1 巡目調査、2 巡目調査)

3 巡目調査 (平成 13～17 年度)

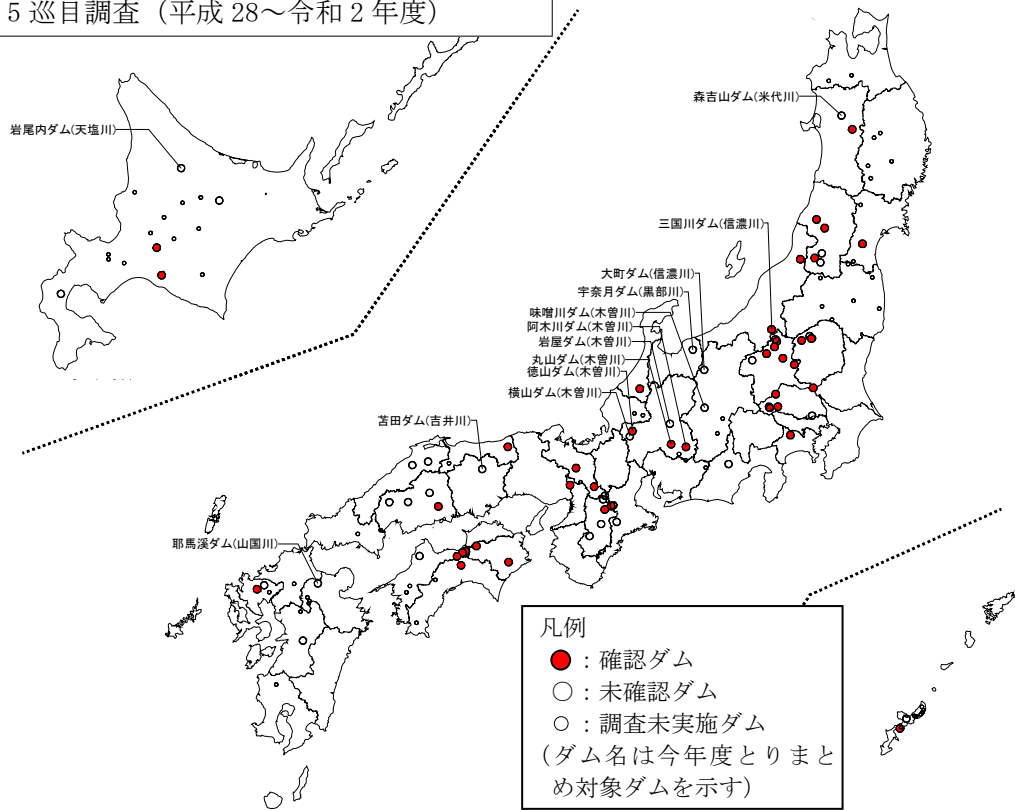


4 巡目調査 (平成 18～27 年度)

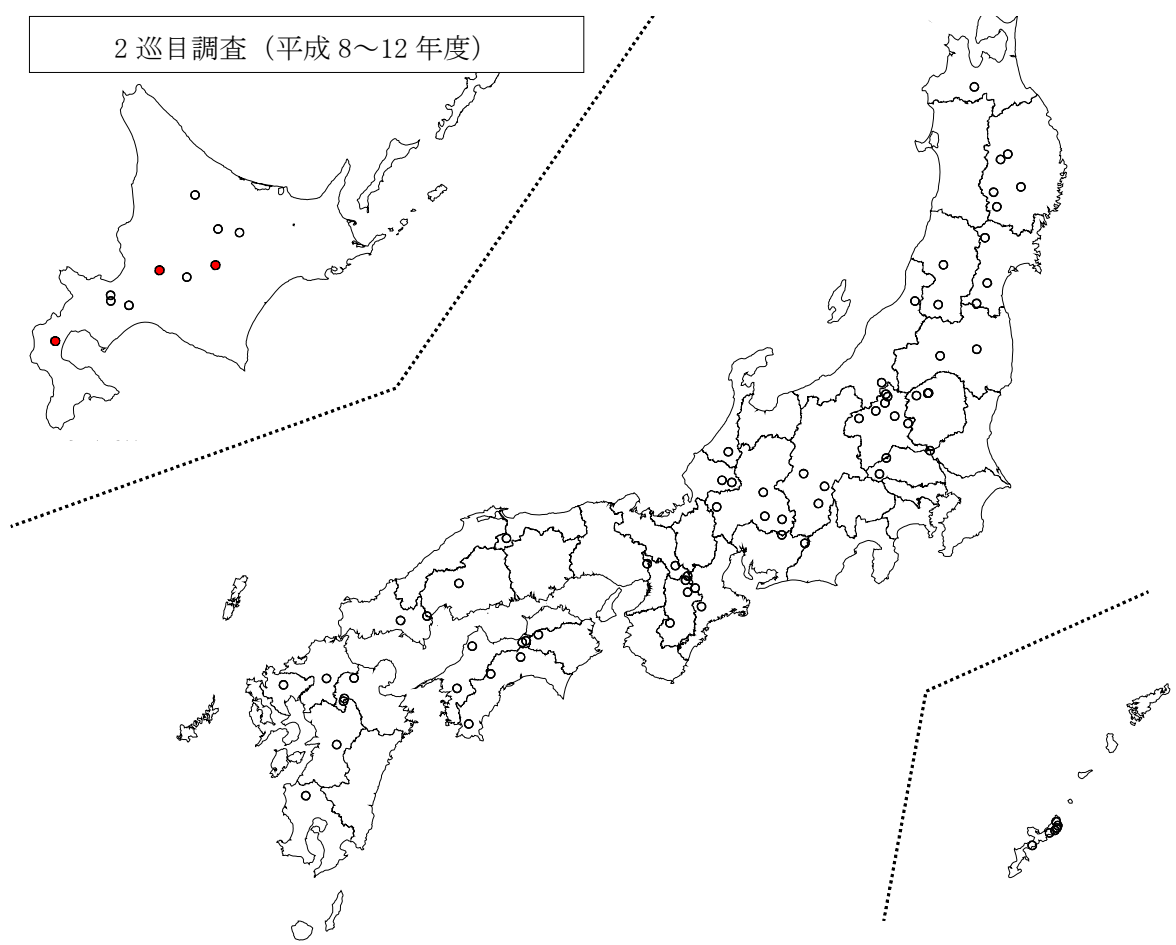
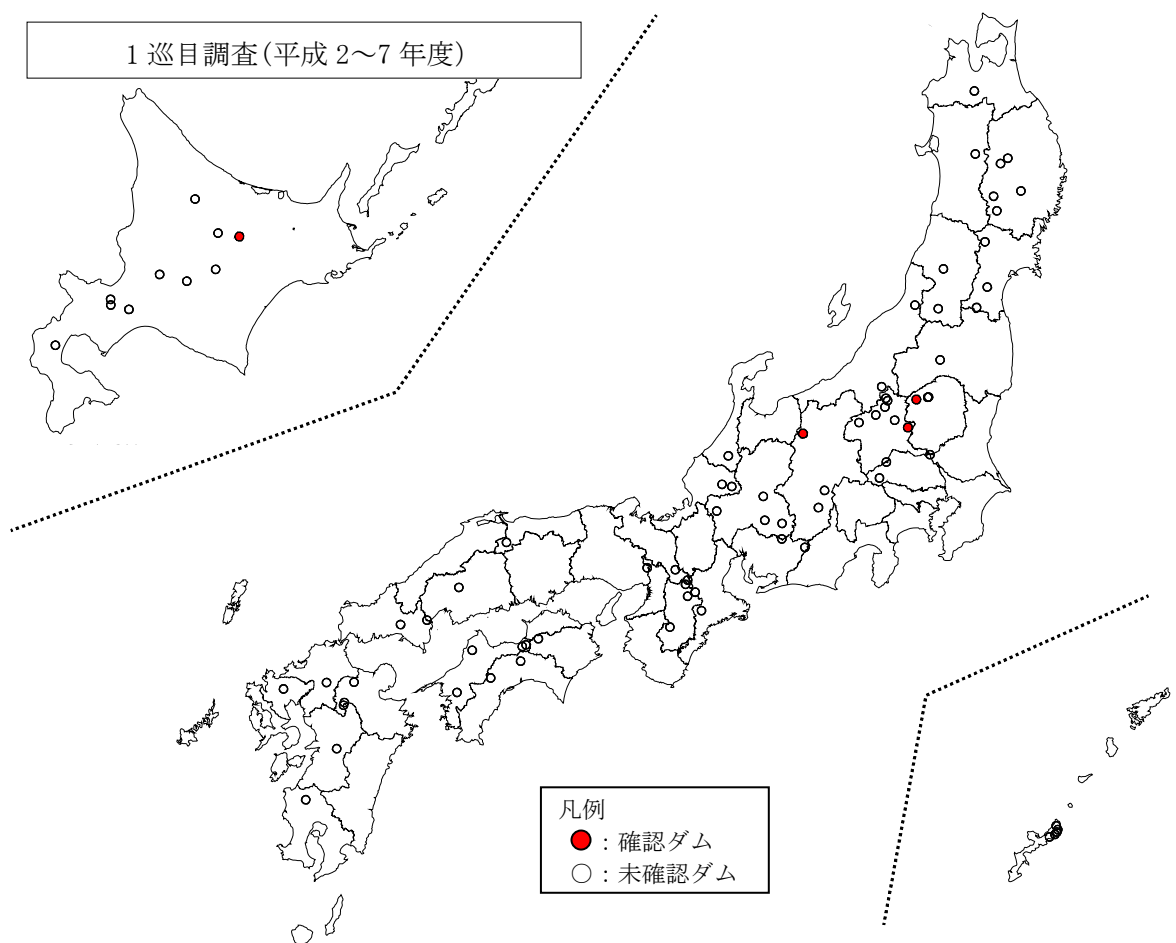


ハヤブサの確認状況 (3 巡目調査、4 巡目調査)

5 巡目調査 (平成 28～令和 2 年度)

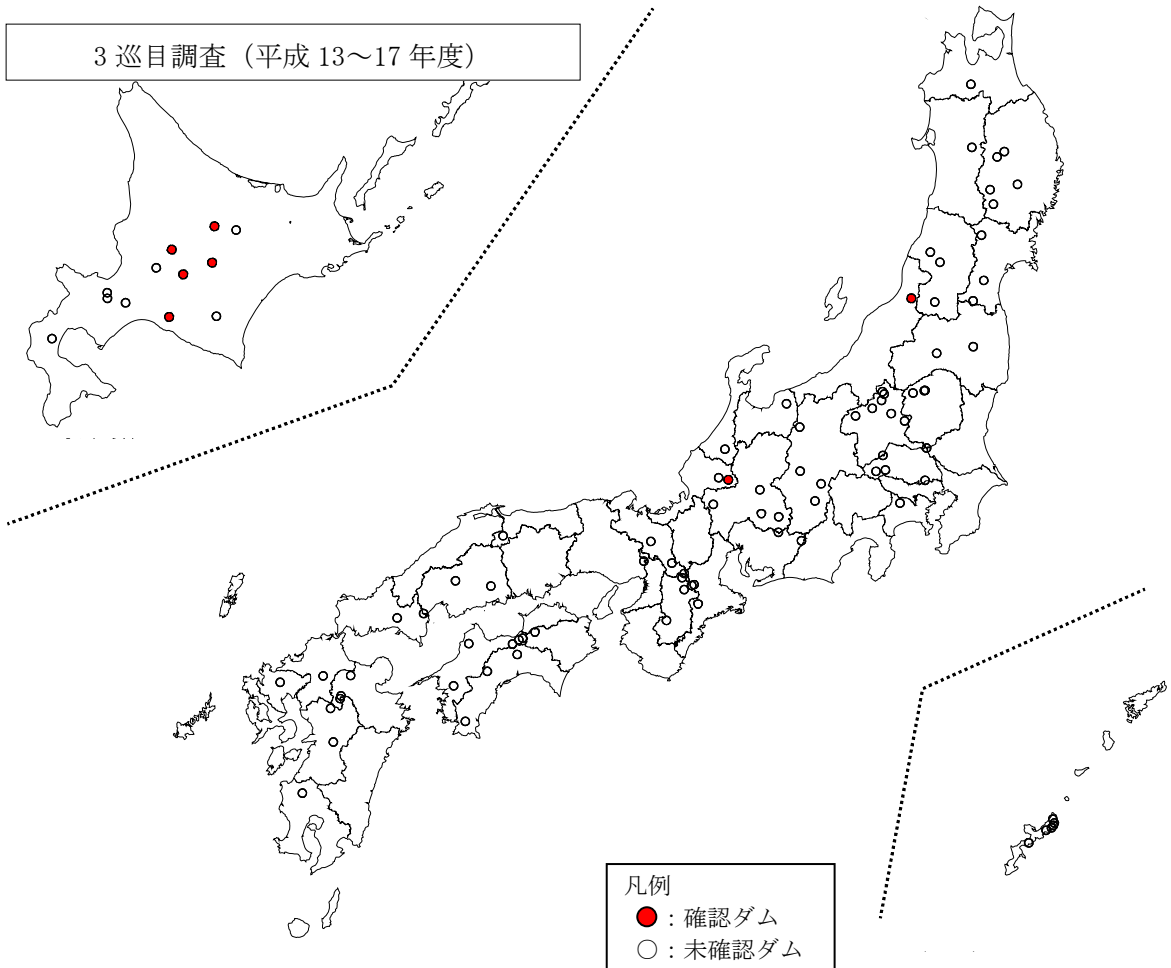


ハヤブサの確認状況 (5 巡目調査)

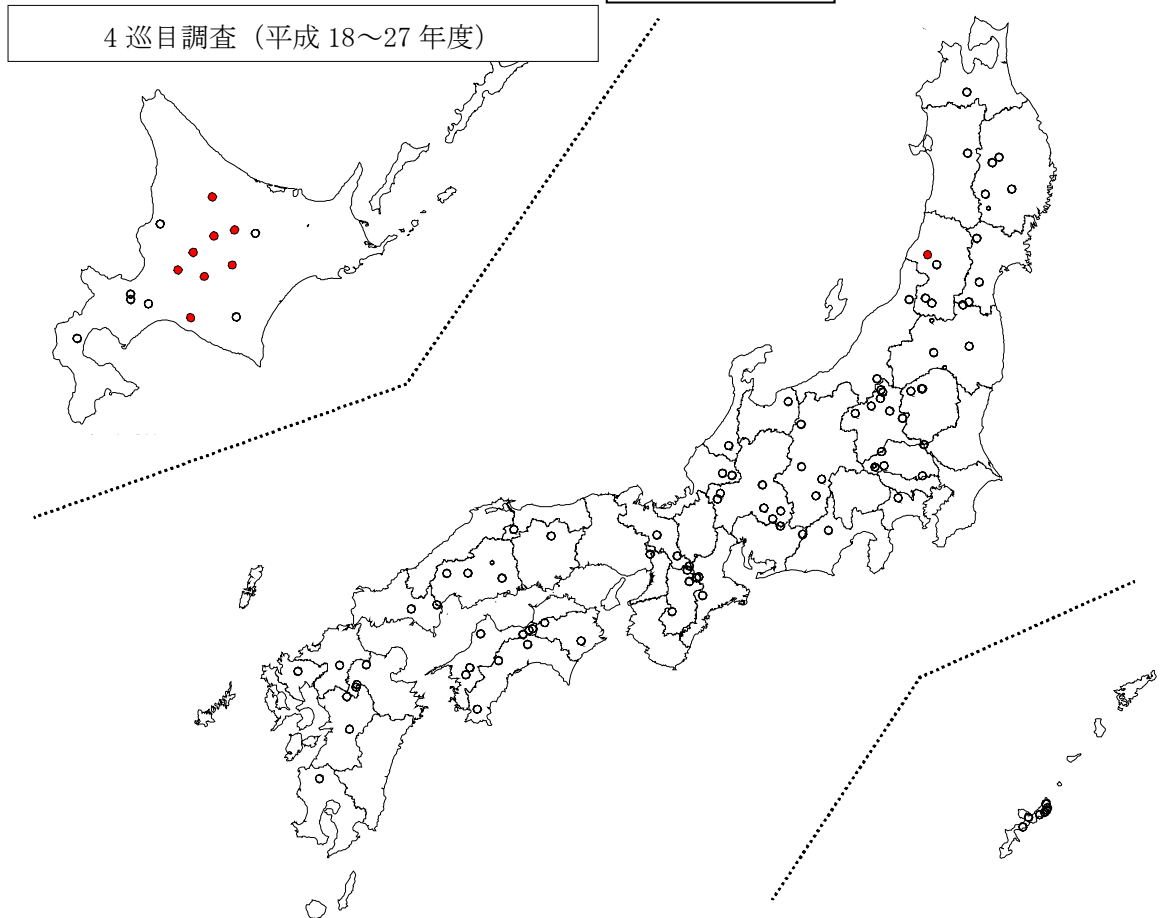


オオワシの確認状況 (1 巡目調査、2 巡目調査)

3 巡目調査 (平成 13～17 年度)

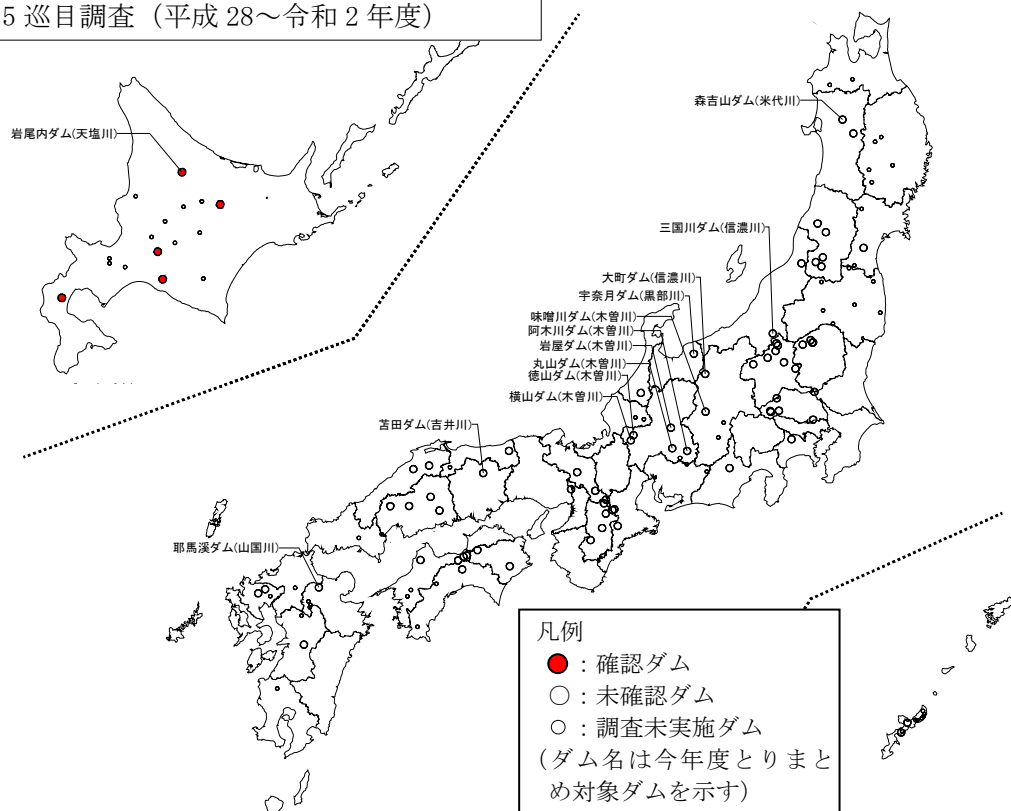


4 巡目調査 (平成 18～27 年度)



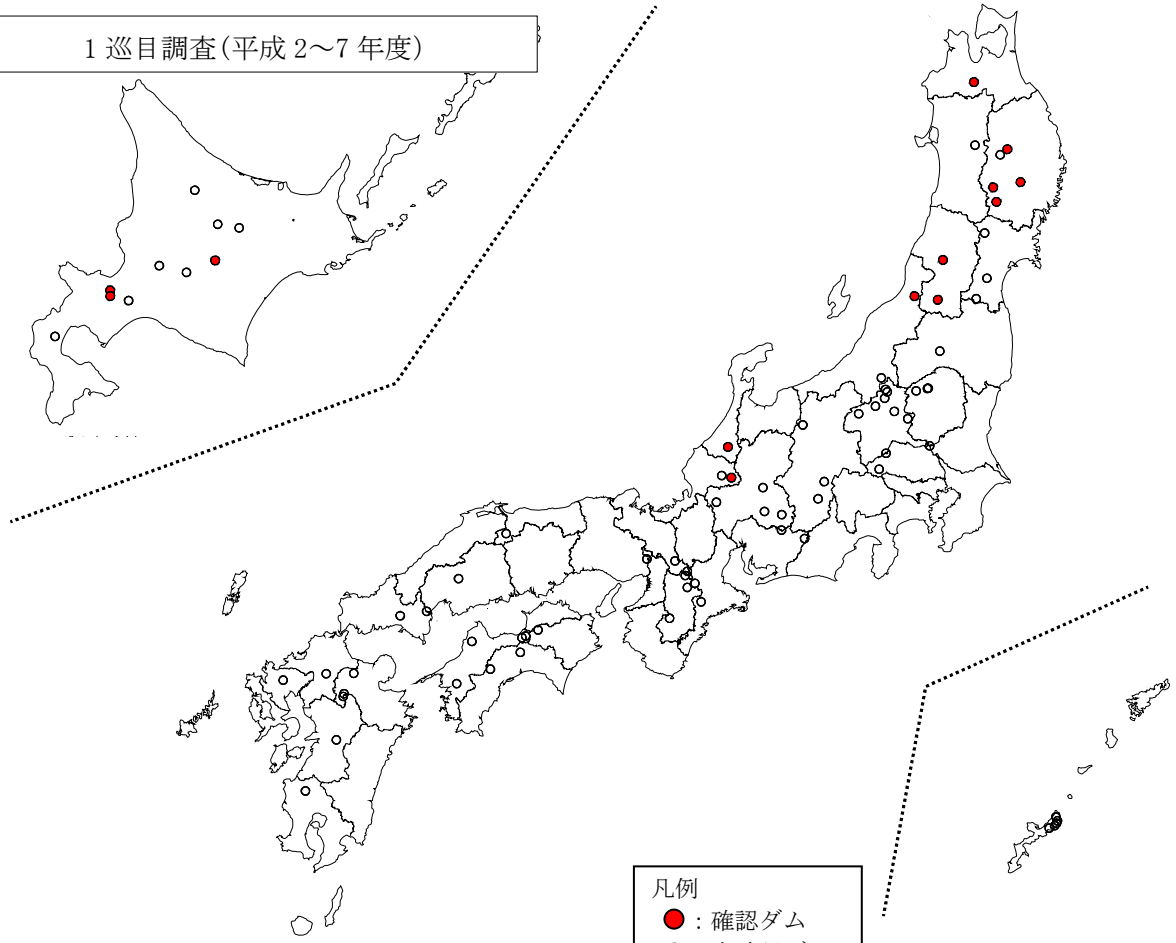
オオワシの確認状況 (3 巡目調査、4 巡目調査)

5 巡目調査（平成 28～令和 2 年度）

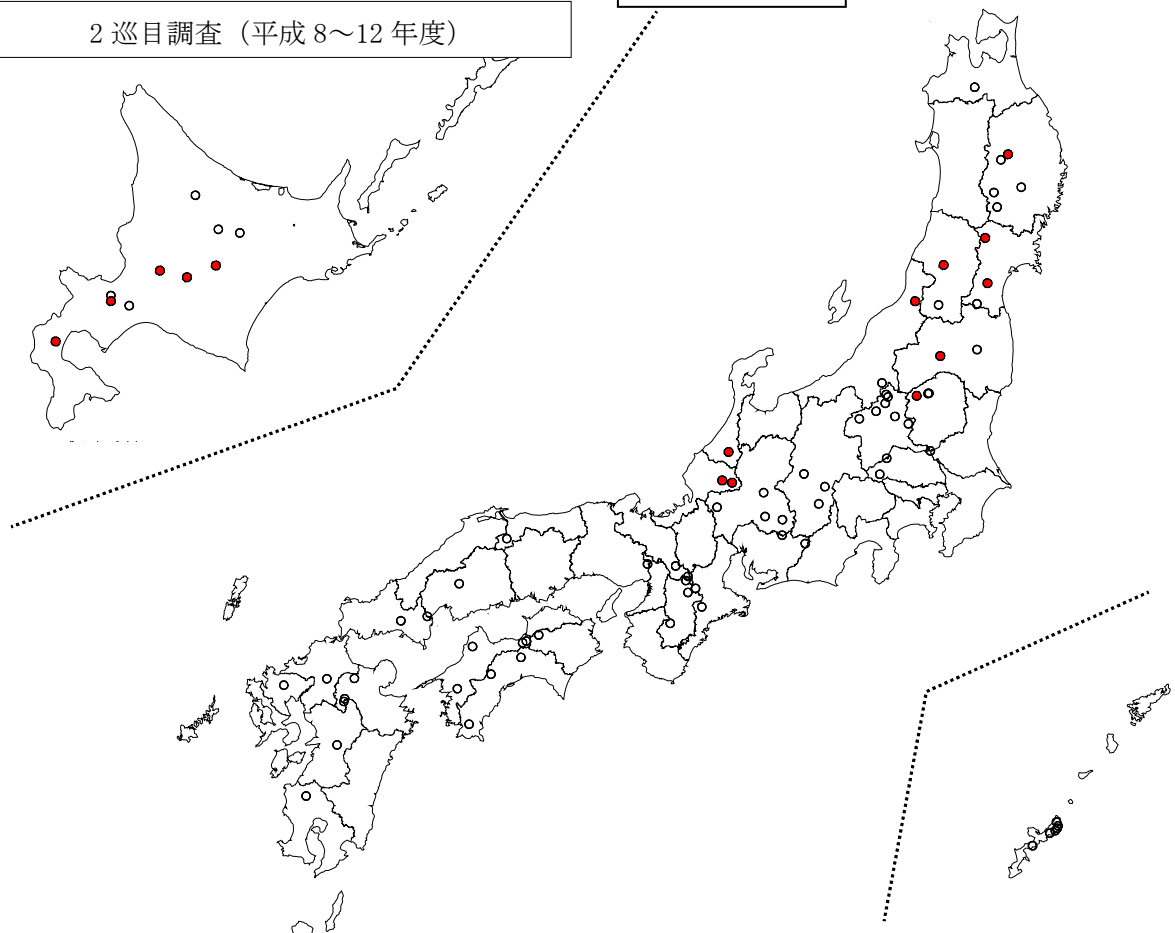


オオワシの確認状況（5 巡目調査）

1 巡目調査(平成 2～7 年度)

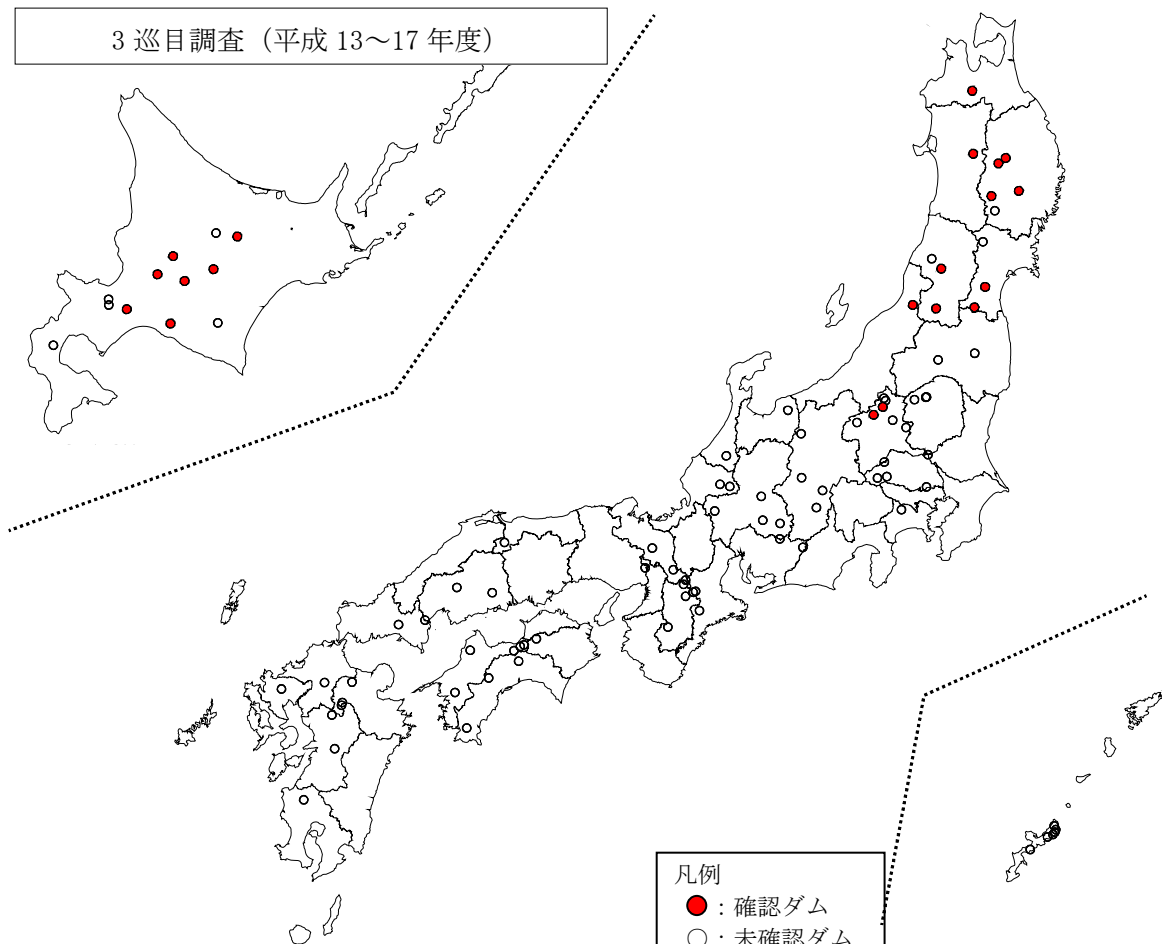


2 巡目調査 (平成 8～12 年度)



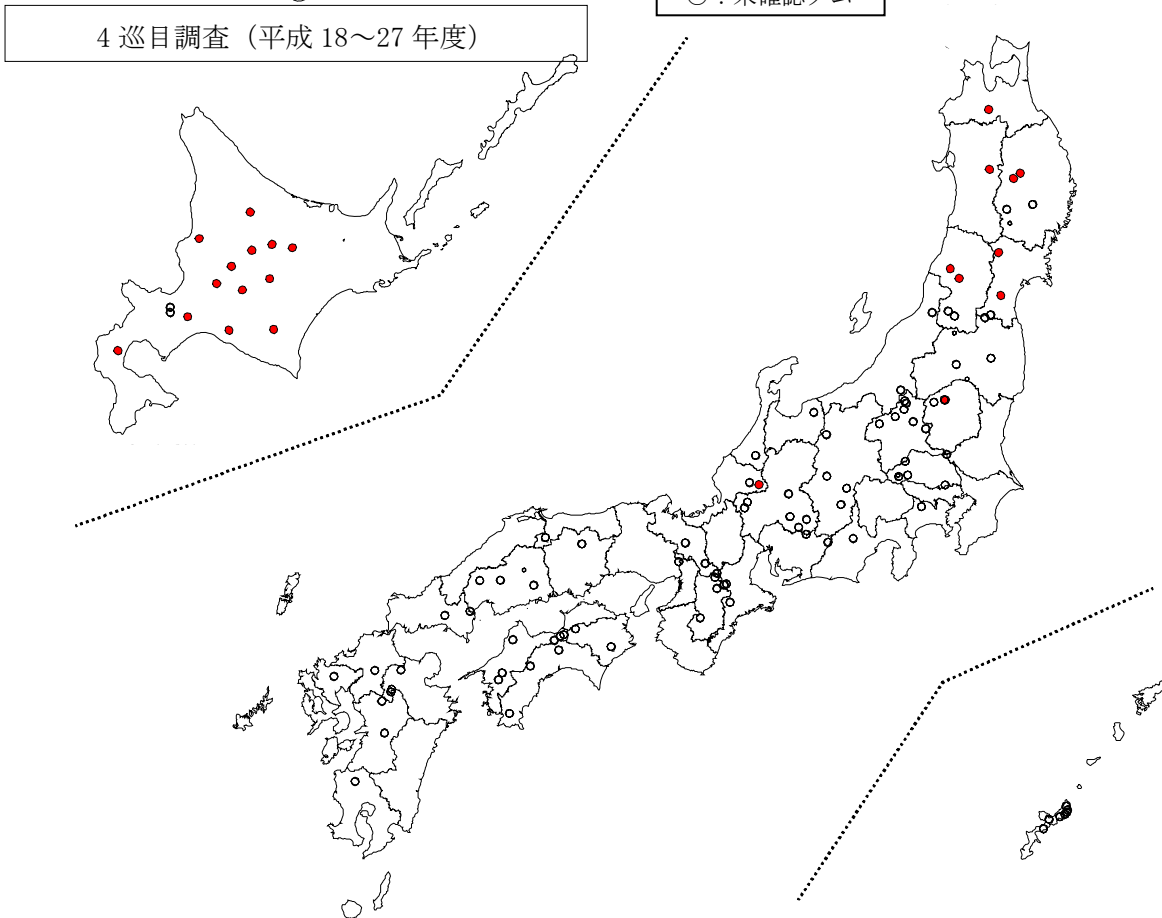
オジロワシの確認状況 (1 巡目調査、2 巡目調査)

3 巡目調査 (平成 13～17 年度)



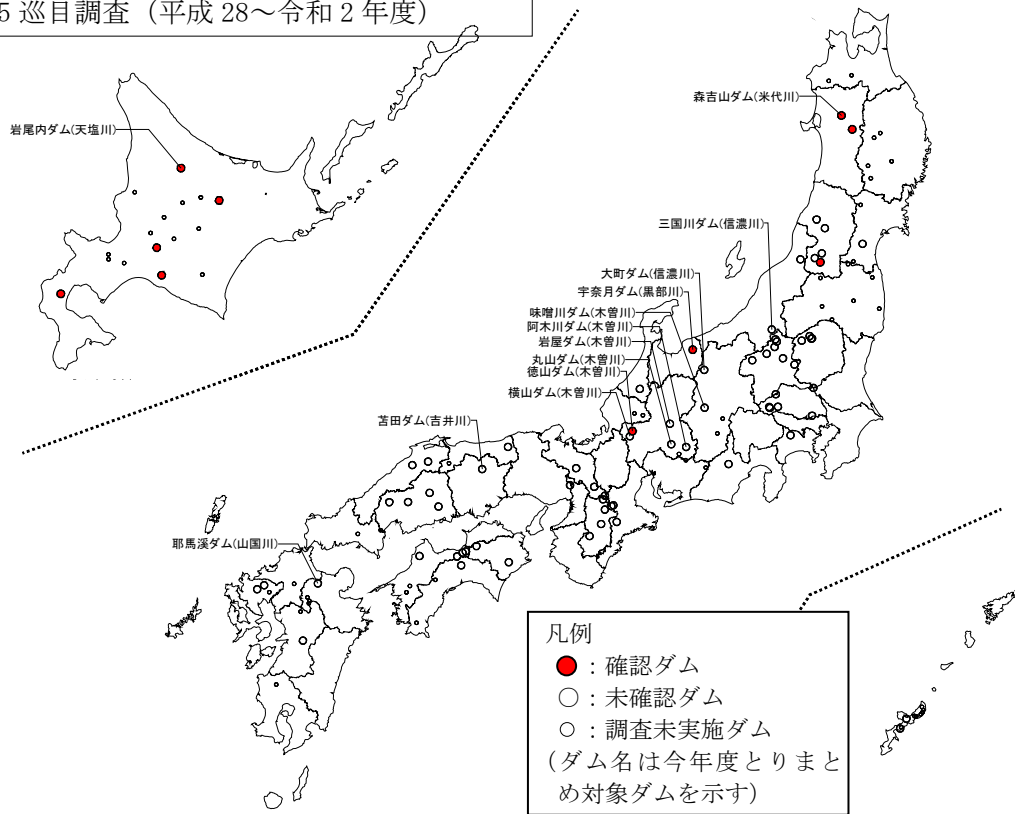
凡例
● : 確認ダム
○ : 未確認ダム

4 巡目調査 (平成 18～27 年度)



オジロワシの確認状況 (3 巡目調査、4 巡目調査)

5 巡目調査（平成 28～令和 2 年度）



オジロワシの確認状況（5 巡目調査）

(2) 国外外来種の分布状況（生物多様性への攪乱）

日本の生物多様性の危機の原因の一つとして、「外来種等人為的に持ち込まれたものによる生態系の攪乱」があげられています。鳥類では、アヒル等のように家禽として飼われていたものや、ガビチョウ等のようにペットとして飼われていたものが逃げ出し、野生化して自然界へ広がっている例がみられます。

このような国外外来種が生態的に優勢な場合、在来の生物種を圧迫したり、自然界では起こらない交雑によって、地域で保有されていた固有な遺伝子の喪失をもたらしたりすることで、生態系へ様々な影響を与えることが懸念されています。ここでは、人為的な生態系の攪乱を明らかにするために、国外外来種で、特定外来生物^{*}に指定されているガビチョウ、ヒゲガビチョウ、カオグログビチョウ、カオジログビチョウ、ソウシチョウの確認状況について整理しました。

・ 特定外来生物のガビチョウを1ダムで確認

・ 特定外来生物のソウシチョウを4ダムで確認。

今回とりまとめを行った13ダムでは、ガビチョウは1ダムで、ソウシチョウは4ダムで確認されました。

国外外来種の確認ダム数の巡目比較

種名	1巡目調査 (81ダム)	2巡目調査 (83ダム)	3巡目調査 (96ダム)	4巡目調査 (111ダム)	5巡目調査 (75ダム)	今回 確認
ガビチョウ	1ダム [1.2%]	5ダム [6.0%]	11ダム [11.5%]	15ダム [13.5%]	18ダム [24.0%]	○
ヒゲガビチョウ	0ダム [0.0%]	0ダム [0.0%]	1ダム [1.0%]	2ダム [1.8%]	4ダム [5.3%]	
カオグログビチョウ	0ダム [0.0%]	0ダム [0.0%]	1ダム [1.0%]	0ダム [0.0%]	1ダム [1.3%]	
カオジログビチョウ	0ダム [0.0%]	0ダム [0.0%]	0ダム [0.0%]	0ダム [0.0%]	2ダム [2.7%]	
ソウシチョウ	1ダム [1.2%]	8ダム [9.6%]	10ダム [10.4%]	16ダム [14.4%]	28ダム [37.3%]	○

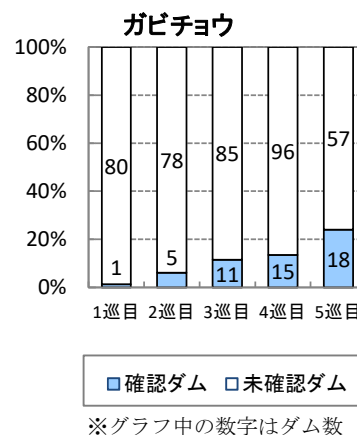
※ ()内は各巡目において調査を実施しているダムの数を示す。巡目の途中から調査を行っていたり、途中の年度を調査していないダムがあるため、巡目毎の調査ダム数は同じではない。

※ []内は確認ダム数の対象ダム数に対する%を示す。

今回とりまとめ対象とした13ダムでは、特定外来生物に指定されているガビチョウとソウシチョウが確認されました。

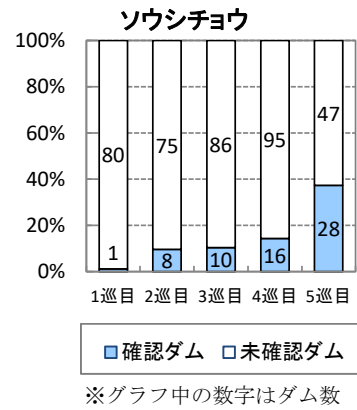
ガビチョウは、今回とりまとめ対象とした13ダムのうち九州の耶馬溪ダムで確認されました。耶馬溪ダムでは2巡目から連続して確認されています。これまでの調査結果では、関東地方、九州地方を中心に確認されており、特に関東では過去と比較して、大幅に分布が拡大していることがわかります。

ガビチョウは東アジア・東南アジア原産で、国内では江戸時代頃から輸入の記録があります。飼い鳥が逃げ出したものが、1980年代から福島県、長野県、関東地方、九州地方等で野生化し、主に丘陵地、平野部の樹林等を生息場所としています。



ソウシチョウは、中部の丸山ダム、徳山ダム、中国の苦田ダム、九州の耶馬溪ダムで確認されました。耶馬溪ダムではガビチョウと同様、2巡目から連続して確認されています。丸山ダム、徳山ダム、徳山ダムでは、それぞれ初めて確認されました。これまでの調査結果では、関東以西のダムで主に確認されており、特に四国地方では、近年、急激に分布を広げているようです。

ソウシチョウは本来、中国南部からヒマラヤにかけて分布する鳥であり、主に山地の樹林等で生息しています。日本ではガビチョウと同じく江戸時代から飼育されていましたが、飼い鳥が逃げ出したものが、1980年頃から茨城県、兵庫県、九州地方等を中心に急速に分布を広げています。

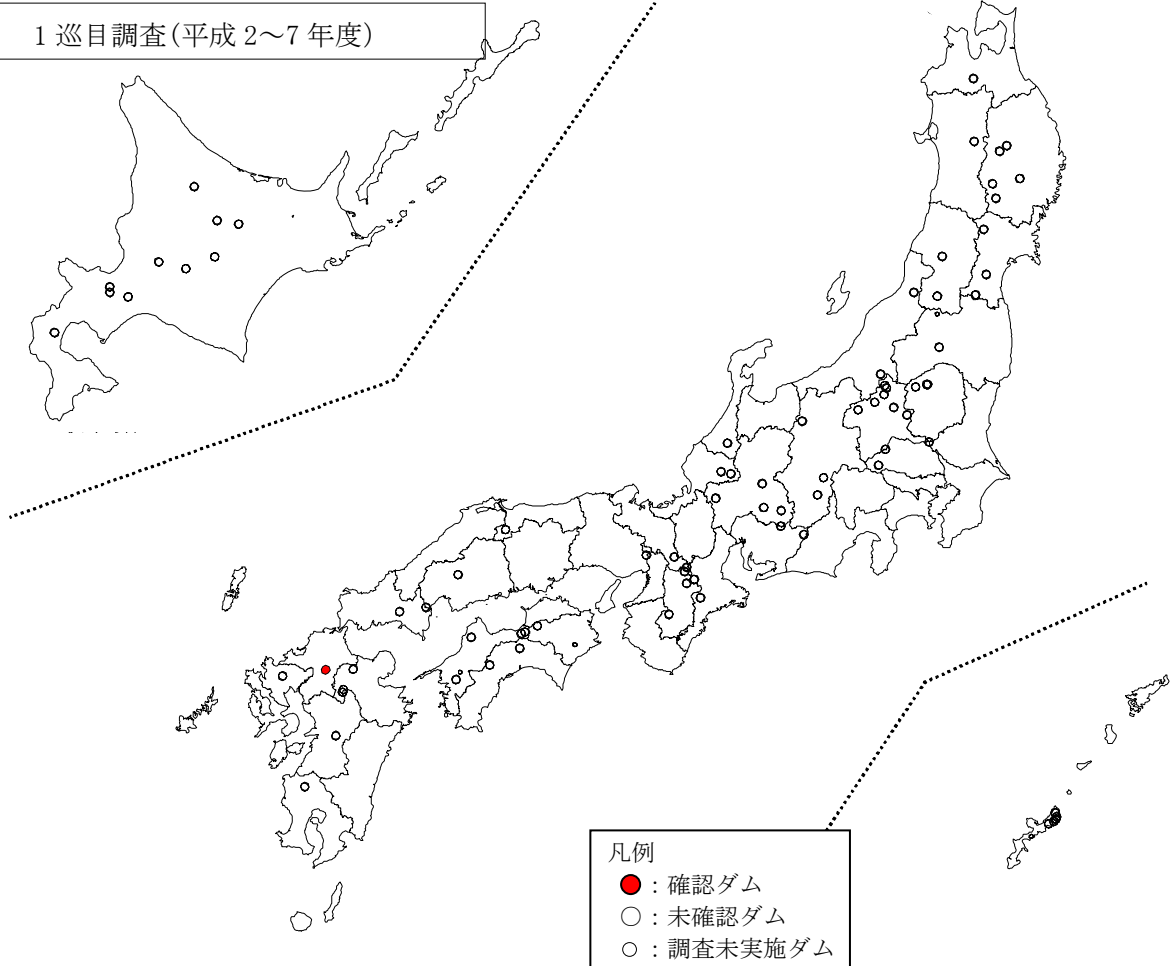


ソウシチョウ（苦田ダム）

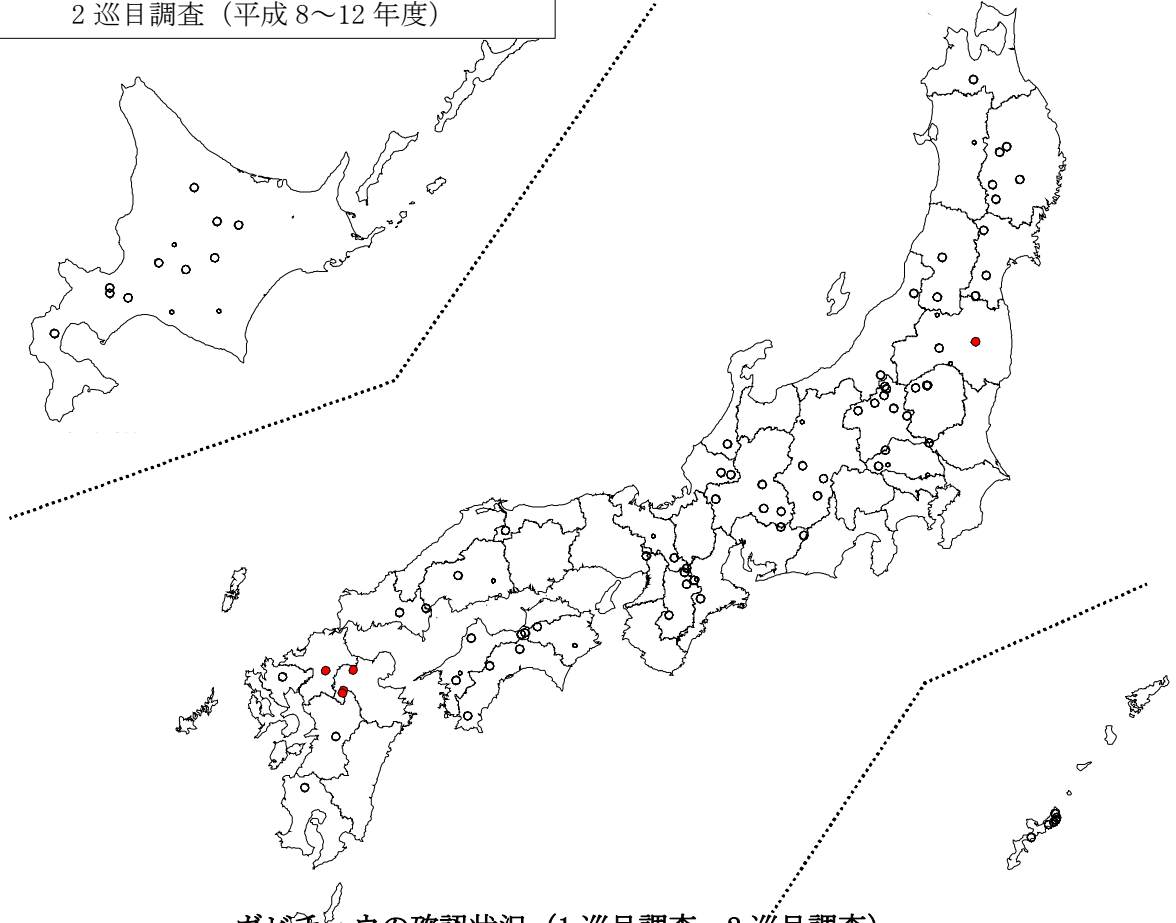
※特定外来生物とは、『特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（最終改正及び施行2017年3月）』により、輸入や飼養等が規制される生物(生きているものに限られ、個体だけではなく、卵、種子、器官等も含まれる)です。おおむね明治以降に国外から導入された国外外来種のうち、生態系、人の生命・身体及び農林水産業へ被害を及ぼすもの、または及ぼすおそれがある生物が指定（指定された外来生物と在来種が交雑した生物も含む）されています。

参考文献：1) 日本生態学会編（2002）外来種ハンドブック，地人書館
2) (独) 国立環境研究所，侵入生物データベース 等

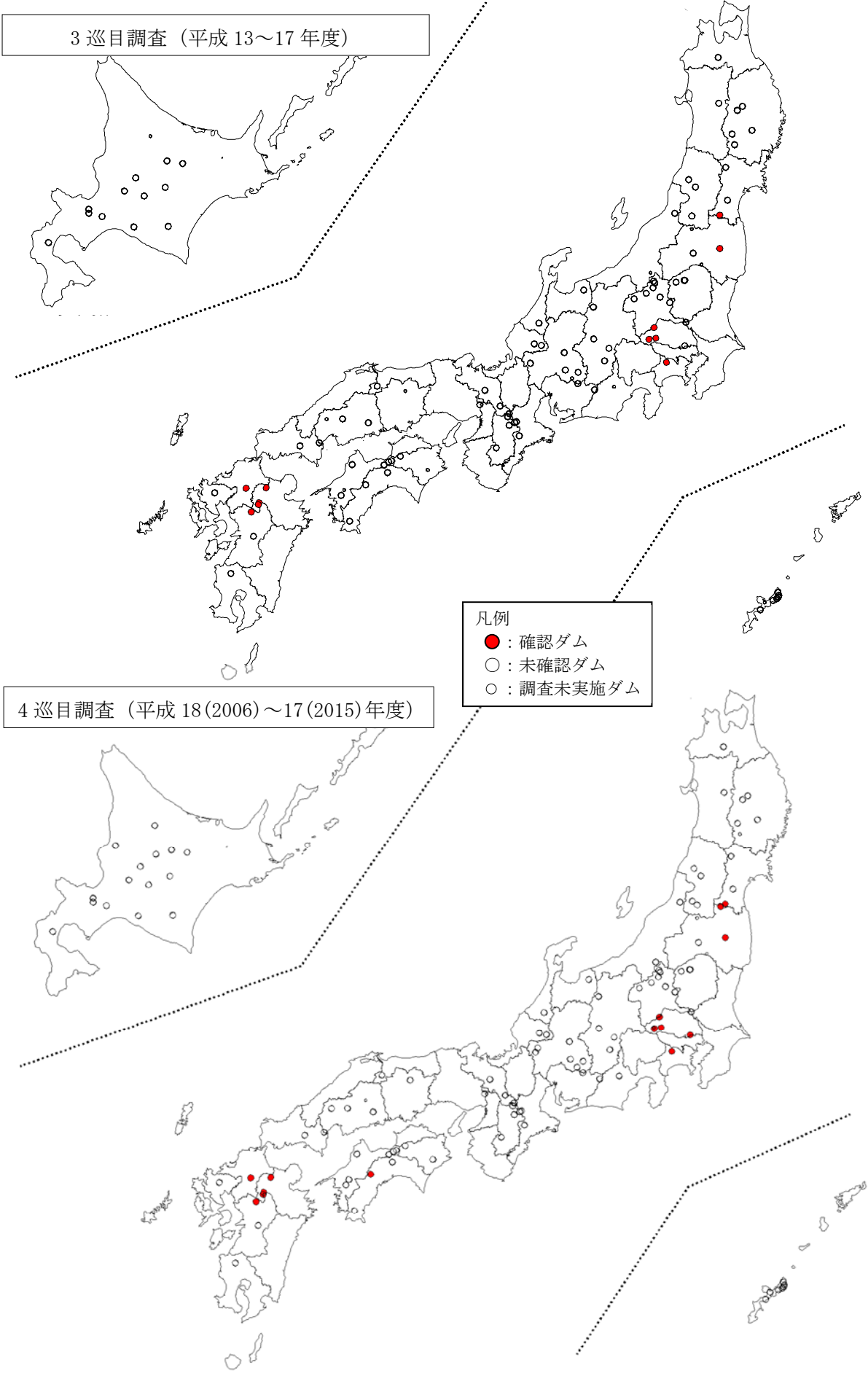
1 巡目調査(平成 2～7 年度)



2 巡目調査 (平成 8～12 年度)

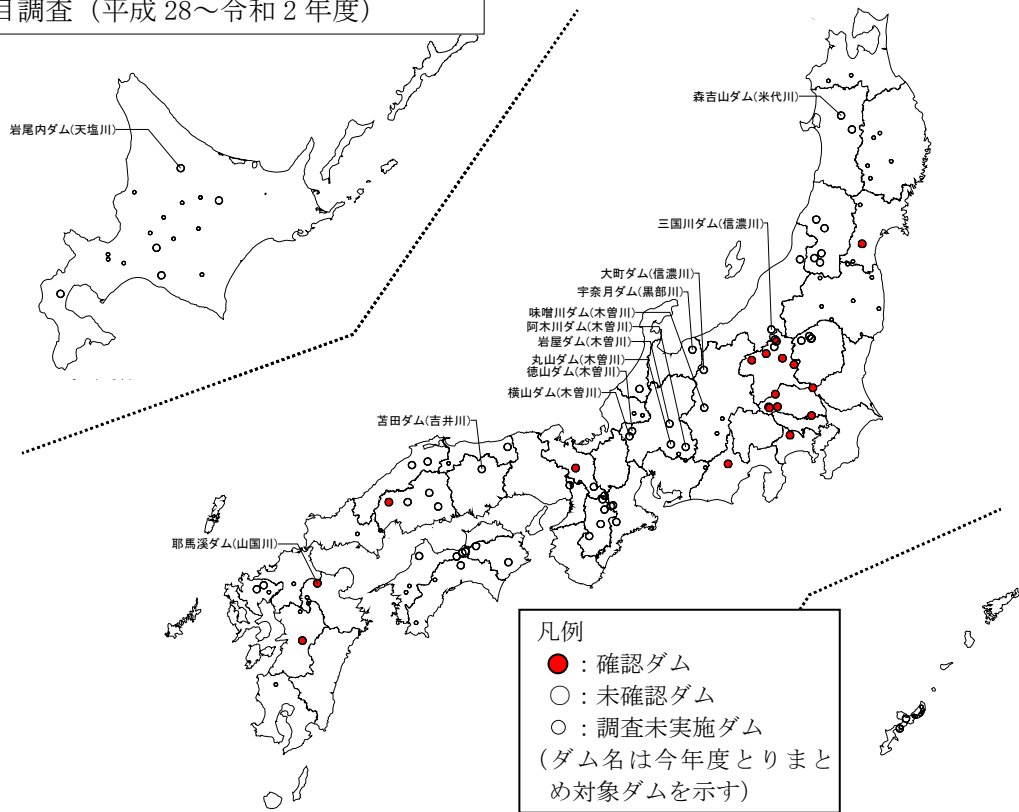


ガビチョウの確認状況 (1 巡目調査、2 巡目調査)



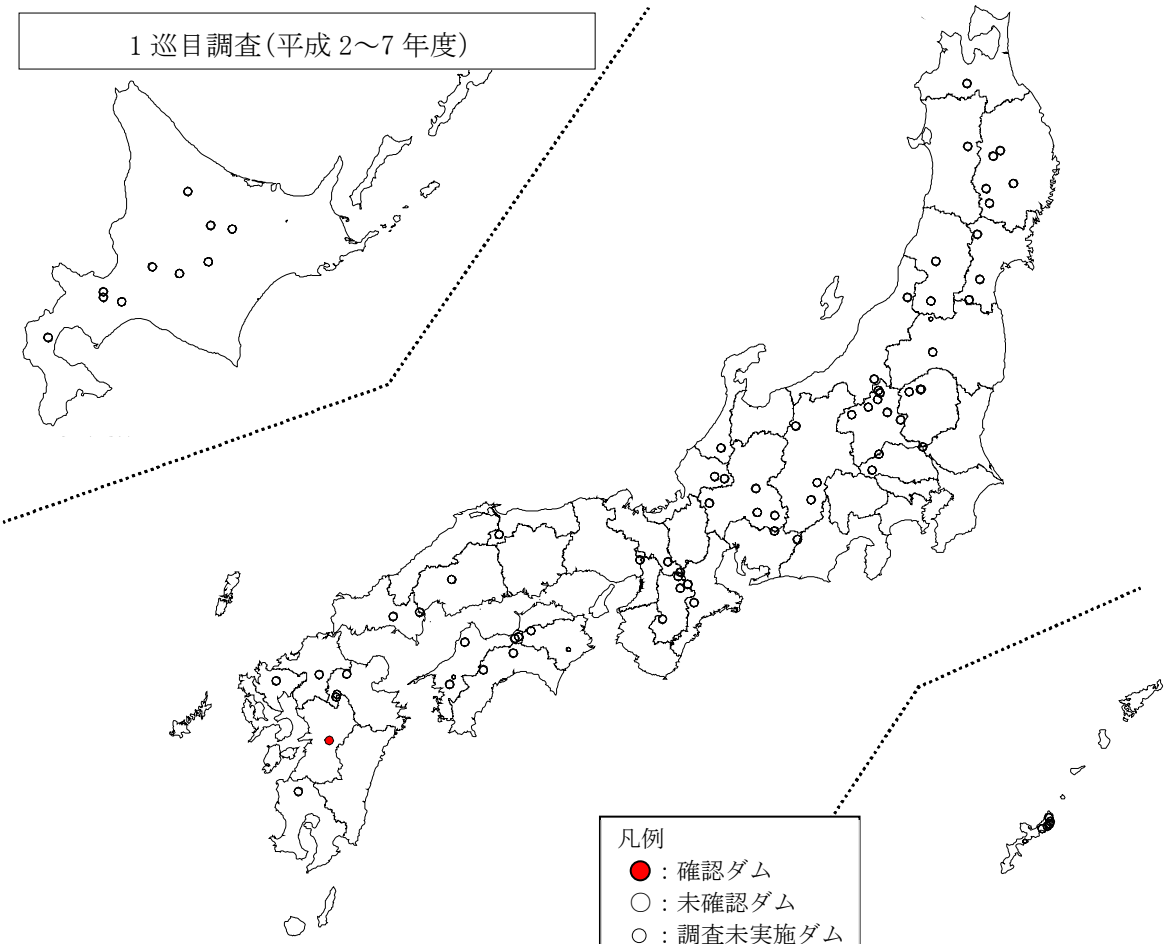
ガビチョウの確認状況 (3 巡目調査、4 巡目調査)

5 巡目調査（平成 28～令和 2 年度）



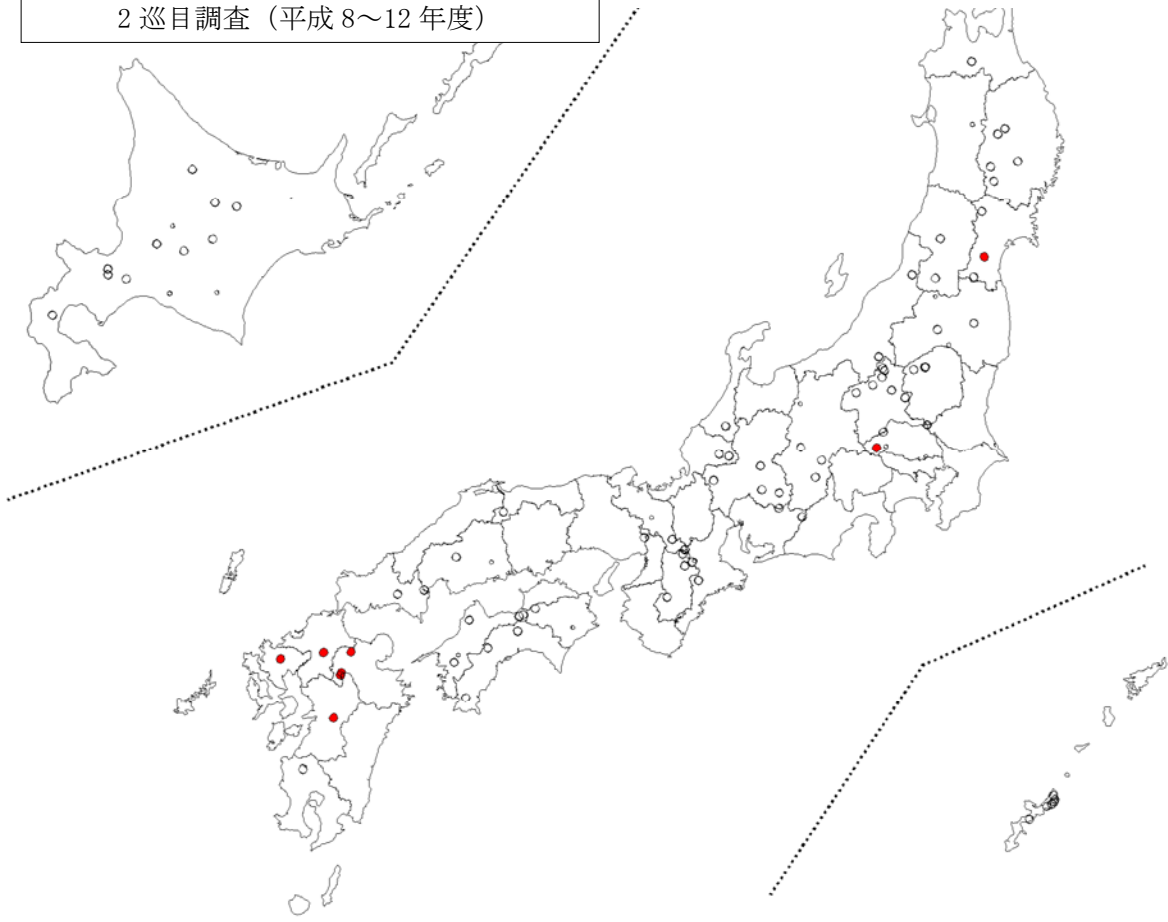
ガビチョウの確認状況（5 巡目調査）

1 巡目調査(平成 2～7 年度)



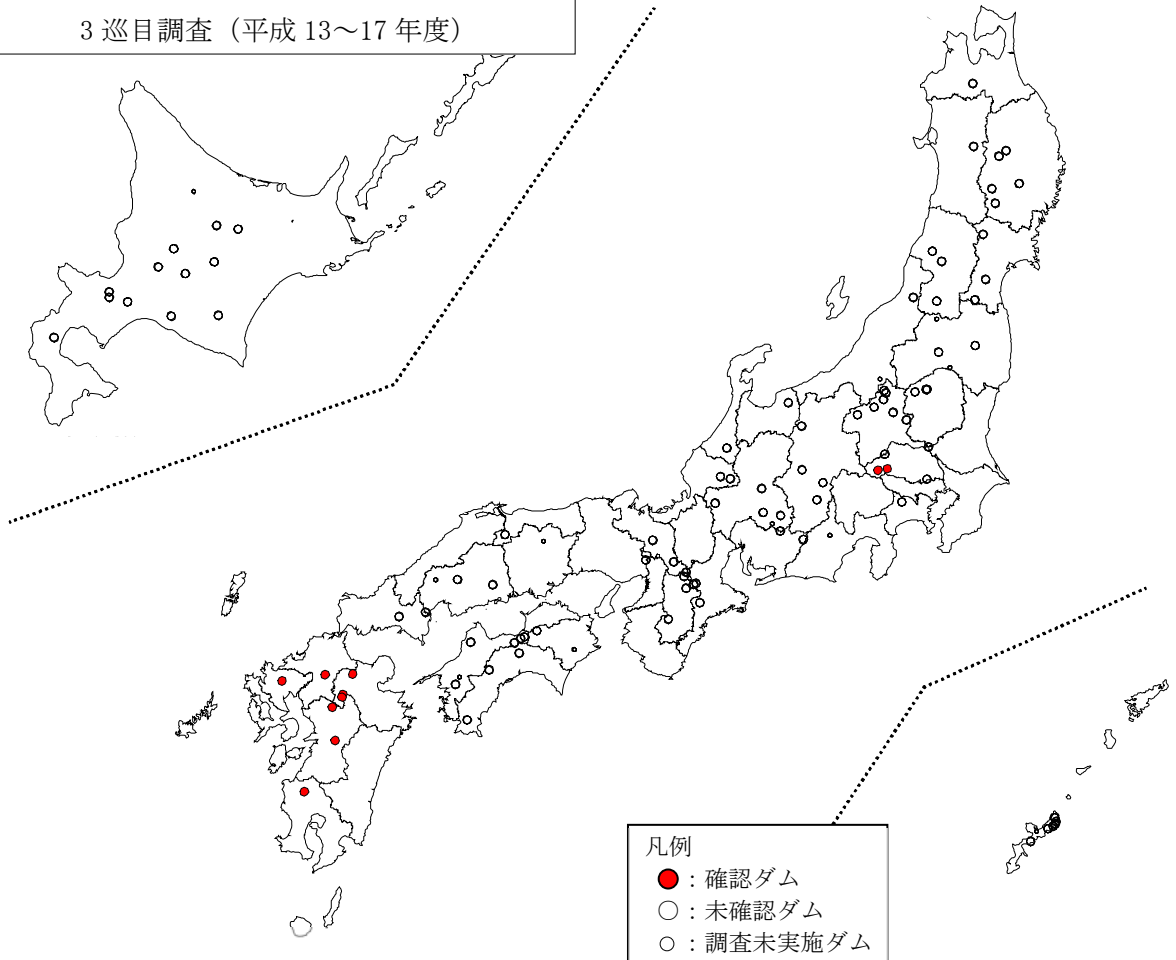
凡例
● : 確認ダム
○ : 未確認ダム
○ : 調査未実施ダム

2 巡目調査 (平成 8～12 年度)

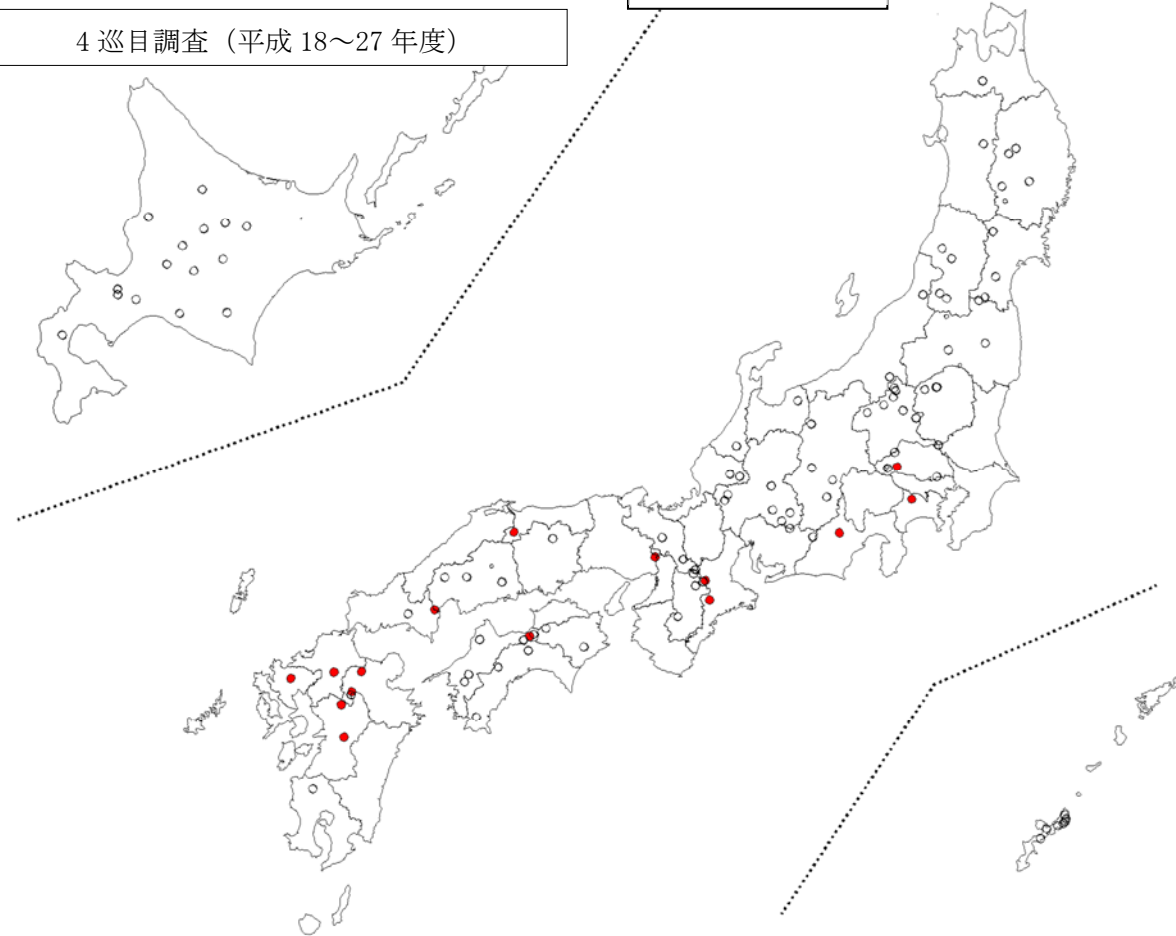


ソウシチョウの確認状況 (1 巡目調査、2 巡目調査)

3 巡目調査 (平成 13～17 年度)

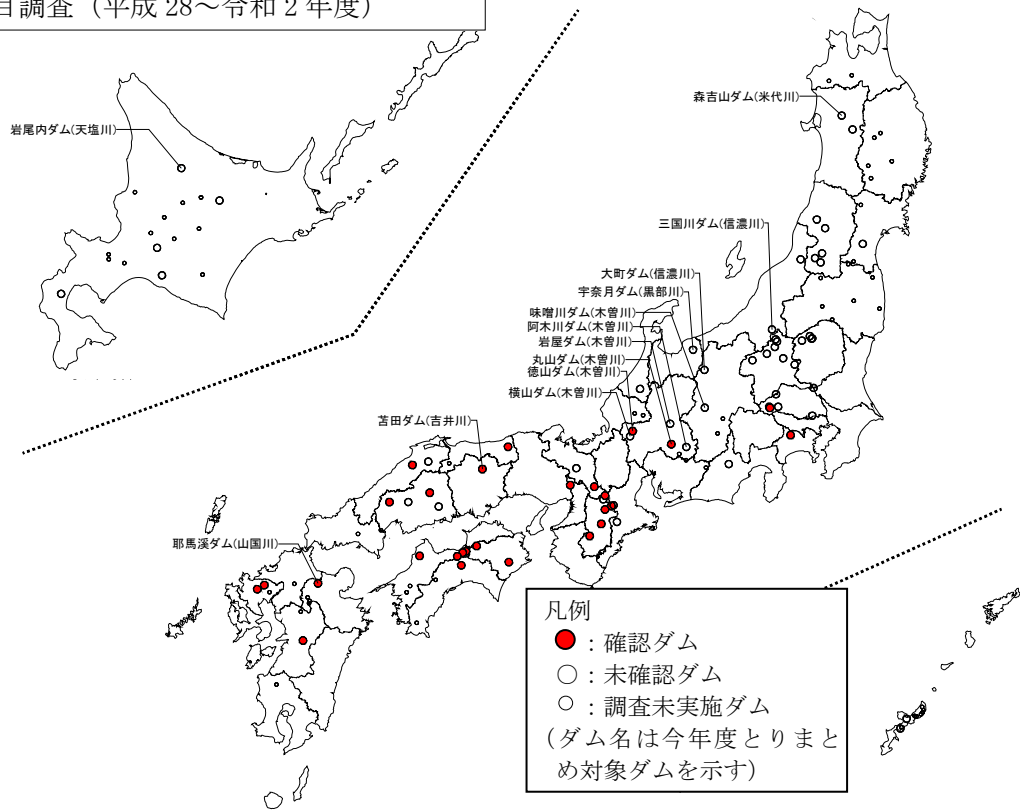


4 巡目調査 (平成 18～27 年度)



ソウシチョウの確認状況 (3 巡目調査、4 巡目調査)

5 巡目調査 (平成 28～令和 2 年度)



ソウシチョウの確認状況 (5 巡目調査)

5.3 注目すべき種の分布状況

(1) ダム湖を休息場・採餌場として利用する鳥類の把握

・越冬期にダム湖の調査を行った 12 ダム全てにおいて、湖面で水面採餌型のカモ類及び潜水採餌型のカイツブリ類等を確認、ダム湖が休息場として利用されていることを確認

越冬期にダム湖の調査を行ったダムのうち 12 ダムでカモ類及びカイツブリ類を確認し、ダム湖が休息場及び採餌場として利用されていることを確認しました。採食型別にみると、水面採食を行う種が大部分を占めていました。これらの種はダム湖面を越冬場所、あるいは渡りの休憩場所として利用していると考えられます。

水辺に生息する鳥類のうち、カモ類の多くは越冬期に日本各地に渡来し、湖や海を休息場・採餌場等として利用します。そのため、山間部に出現したダム湖はこれらカモ類にとって新たな越冬場所となっていることが考えられます。また、魚食性の鳥類であるカイツブリ類等は、ダム湖を採餌場所として利用していると考えられます。そこで、越冬期にダム湖面及び水位変動域周辺で確認されたカモ類及びカイツブリ類の個体数を採餌型別に整理しました。（下流河川等ダム貯水池以外で確認された鳥類及び集団分布地調査で確認された鳥類は対象外としました。）

北海道の岩尾内ダムは、冬季に貯水池が凍結するため調査を行っていませんが、越冬期のダム湖の調査を実施した 12 ダムで、ダム湖で休息するカモ類及びカイツブリ類が確認されました。

採食型別にみると、三国川ダム、大町ダム、宇奈月ダムでは、いずれのダムも水面採食型の種が大部分を占めており、マガモ、カルガモ、コガモが多く確認されました。丸山ダムでは、3 巡目では鳥は確認されませんでした。それ以降、徐々に水面採食型の種が増加する傾向が見られました。少ないながらも阿木川ダムでも同様に徐々に増加しています。それとは対比的に、横山ダム、徳山ダムでは水面採食型の種が減少し、潜水採食型の種が増加する傾向が確認されました。これらの種は、越冬期のダム湖面を越冬場所や渡りの休憩場所として利用していることが考えられます。

また、主に魚食性のカワアイサについては、9 ダムで確認され、カイツブリ類についても 9 ダムで確認されています。

なお、3 巡目、4 巡目調査と比較すると、個体数が大きく変化しているダムがあり、特に三国川ダムでは大幅に増加していました。これは周辺環境の変化や、調査日、調査時刻による違いが影響していると考えられます。



コガモ（三国川ダム）



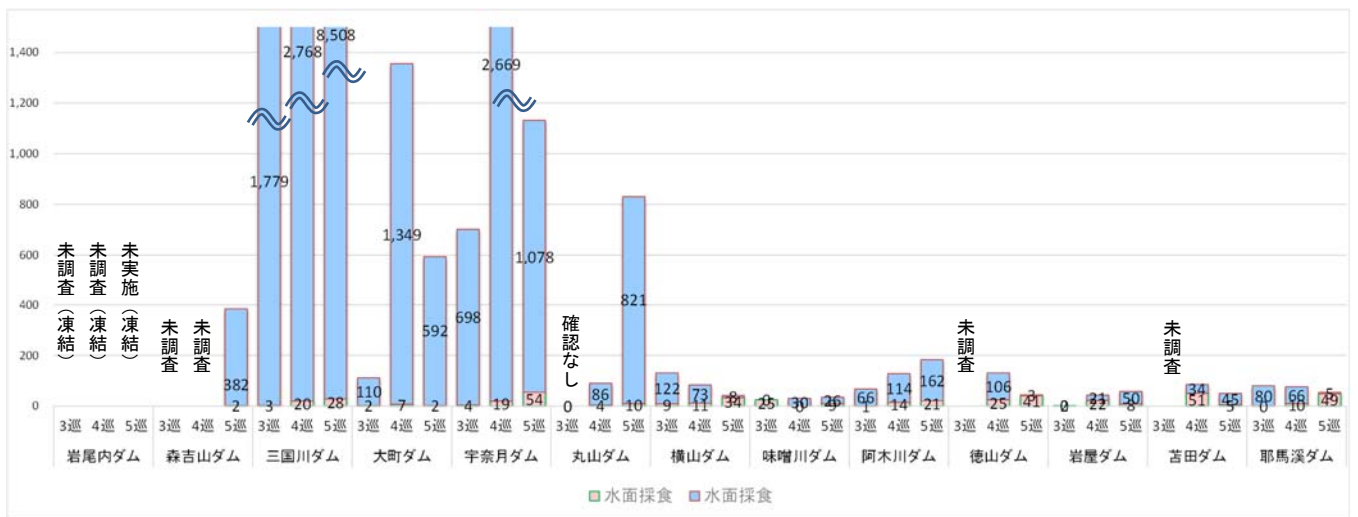
オシドリ（徳山ダム）

越冬期におけるダム湖での採食型別のカモ類の確認状況

採食型	種和名	北海道			東北			北陸						中部			中国			九州																
		岩尾内ダム	森吉山ダム	三国川ダム	大町ダム	宇奈月ダム	丸山ダム	横山ダム	味噌川ダム	阿木川ダム	徳山ダム	岩屋ダム	苦田ダム	耶馬溪ダム																						
		3巡	4巡	5巡	3巡	4巡	5巡	3巡	4巡	5巡	3巡	4巡	5巡	3巡	4巡	5巡	3巡	4巡	5巡	3巡	4巡	5巡	3巡	4巡	5巡											
水面採餌	マガモ																																			
	ヒシクイ																																			
	オシドリ						16			5	18												2	80	52	5										
	マガモ				186	1,181	1,684	2,091	90	783	306	508	2,340	563										25	41	14										
	カルガモ				136	124	352	452	20	301	59	146	140	128																						
	コガモ				53	474	732	5,937		262	227	44	151	369																						
	トモエガモ																																			
	ヨシガモ																																			
	オカヨシガモ																																			
	ヒドリガモ				5			12																5	4											
潜水採餌	オナガガモ				2				3		27													2												
	ハシビロガモ									6																										
	ホシハジロ							2	11		2	2		25												43										
	キンクロハジロ							1	10	2				12	29									2												
	スズガモ																																			
	ホオシロガモ																																			
	ミコアイサ																																			
	カワアイサ							20	6		5		4	7										37												
	カイツブリ				2			1																12	4	10	6									
	カムリカイツブリ																																			
ハジロカイツブリ																																				
ミミカイツブリ																																				
アカエリカイツブリ																																				
延べ確認 個体数	水面採食				382	1,779	2,768	8,508	110	1,349	592	698	2,669	1,078	0	86	821	122	73	8	0	30	26	66	114	162	106	3	0	21	50	34	45	80	66	5
	潜水採食				2	3	20	28	2	7	2	4	19	54	0	4	10	9	11	34	25	0	9	1	14	21	25	41	2	22	8	51	5	0	10	49
合計				384	1,782	2,788	8,536	112	1,356	594	702	2,688	1,132	0	90	831	131	84	42	25	30	35	67	128	183	131	44	2	43	58	85	50	80	76	54	

注 1) 「確認なし」：ダム湖面の確認記録がないため分析対象種の確認なし。「未調査」：ダム供用前で調査が実施されていない、又は湖面凍結等により冬季のダム湖面調査が実施されていない。

注 2) 三国ダム、阿木川ダム、耶馬溪ダムの3巡目データについては、地点別の結果となっていないため、参考としてガンカモ類、カイツブリ類の個体数を示した。



越冬期におけるダム湖での採食型別のカモ類の確認状況 (3巡目～5巡目比較)

注 1) 個体数は越冬期調査時にダム湖面で確認されたカモ類の個体数の合計である。集団分布地での個体数は含んでいない。

(2) ダム湖を利用する猛禽類の確認状況

・ダム湖を利用する猛禽類であるミサゴを13ダム中12ダムで確認
 ミサゴは魚食性の猛禽類で、海岸や川、湖等で魚類を捕らえ、ダム湖も狩り場として利用します。今回とりまとめを行った13ダム中12ダムで確認されました。

指標となる猛禽類のミサゴの確認河川・ダム数の巡目比較（1～5巡目調査）

種類	1巡目調査 (81河川) (81ダム)	2巡目調査 (118河川) (83ダム)	3巡目調査 (122河川) (96ダム)	4巡目調査 (123河川) (111ダム)	5巡目調査 (65河川) (75ダム)
ミサゴ	54河川 〔66.7%〕	94河川 〔79.7%〕	113河川 〔92.6%〕	115河川 〔93.5%〕	58河川 〔89.2%〕
	31ダム 〔38.3%〕	52ダム 〔62.7%〕	66ダム 〔68.8%〕	84ダム 〔75.7%〕	54ダム 〔72.0%〕

※（ ）内は調査実施河川数、ダム湖数を示す。

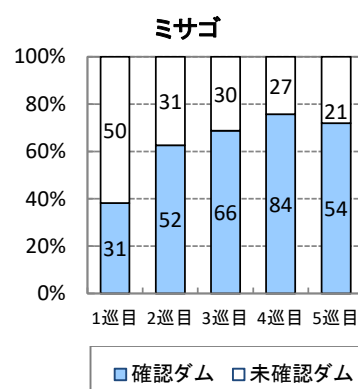
※〔 〕内は確認河川数、ダム湖数の調査実施河川数、ダム湖数に対する%を示す。

ミサゴは、環境省レッドリストで準絶滅危惧に指定されています。行動圏は広く、海や河川、湖等で中・小型魚を捕食し、人の近づけない海近くの岩棚や崖、水辺に近い大きな木で営巣します。狩場と休息場、営巣地等が近接するダム湖は、ミサゴにとって適した生息場所となる場合があります。近年、ミサゴは内陸での営巣の事例が報告されています。これは、内陸部にダム等による開水面の餌場ができたこと等が影響している可能性が考えられます。

ここでは、ダム湖を利用する猛禽類としてミサゴの確認数がどのように変化したのかを、河川・ダムを含め水系として1～5巡目で整理しました。ダムでは、令和2年度調査を実施した13ダムのうち12ダムで確認されました。このうち、東北の森吉山ダム、北陸の大町ダム、中部の徳山ダムでは河川水辺の国勢調査で初めての確認になります。

1～4巡目のミサゴが確認されたダム数の割合で比較すると、ミサゴが確認されるダム数の割合が増加する傾向がみられました。さらに、確認された地点をみると、1巡目では河口部付近の調査地区でのみ確認されている河川が多いですが、2巡目以降から特に内陸の河川調査地区でも多く確認されるようになり、河口から内陸方向へ分布が拡大している傾向がみられました。これは、ミサゴのダム湖周辺を含む内陸部での営巣が増えたこと、またその営巣場所から採餌場所へ飛ぶルートとして河川を利用していること等が理由と考えられます。

今回とりまとめを行った13ダムのうち、北海道の岩尾内ダム、東北の森吉山ダム、中部の岩屋ダム、阿木川ダムでミサゴの繁殖行動（餌運び、ペアでのとまり、他種の排斥行動等）が確認されました。ダム湖がミサゴの生息場として適切であり続けるかどうか、今後も継続して確認していく必要があります。





ミサゴ 営巣地 (岩屋ダム)
(送電線鉄塔上)



ミサゴ (森吉山ダム)

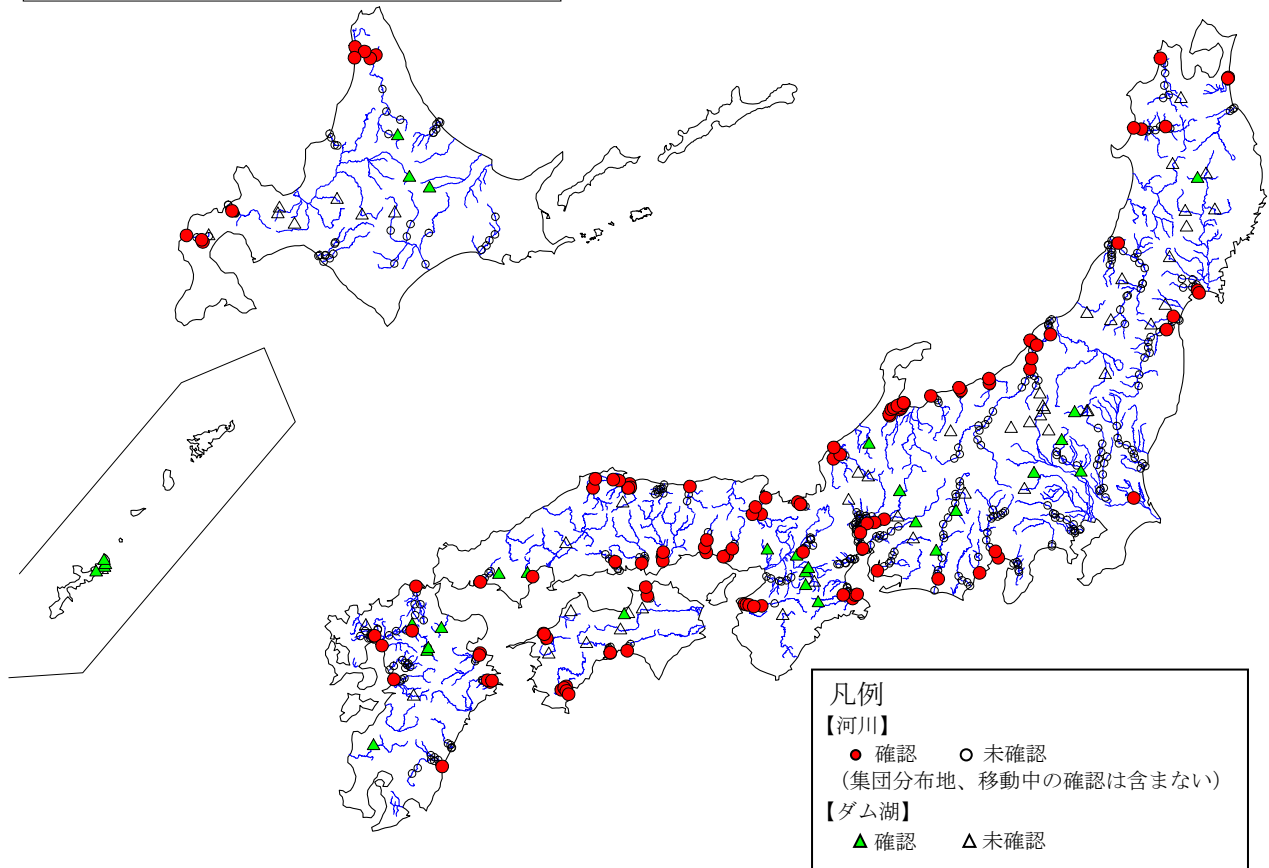


ミサゴ (耶馬溪ダム)

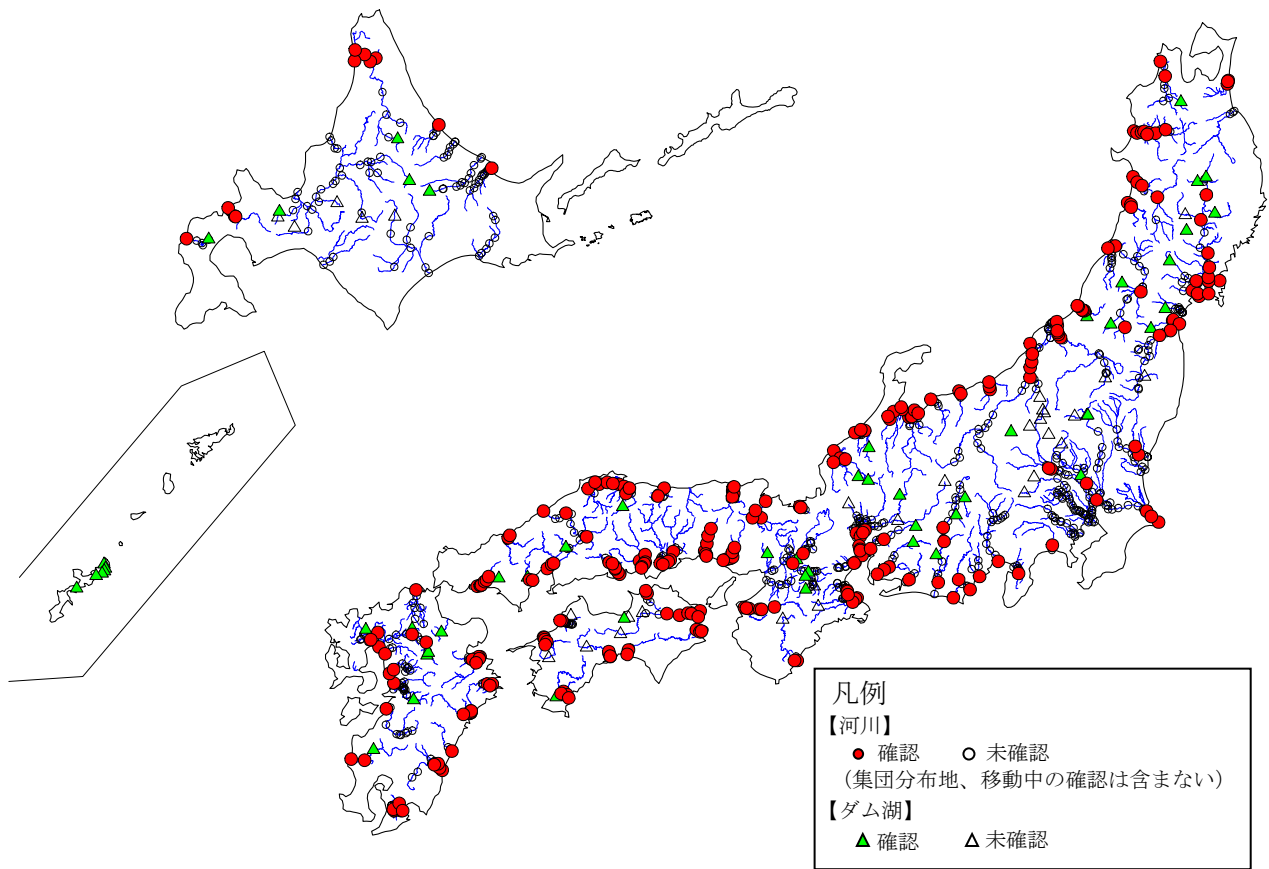


ミサゴ (徳山ダム)

1 巡目調査(平成 2～7 年度)

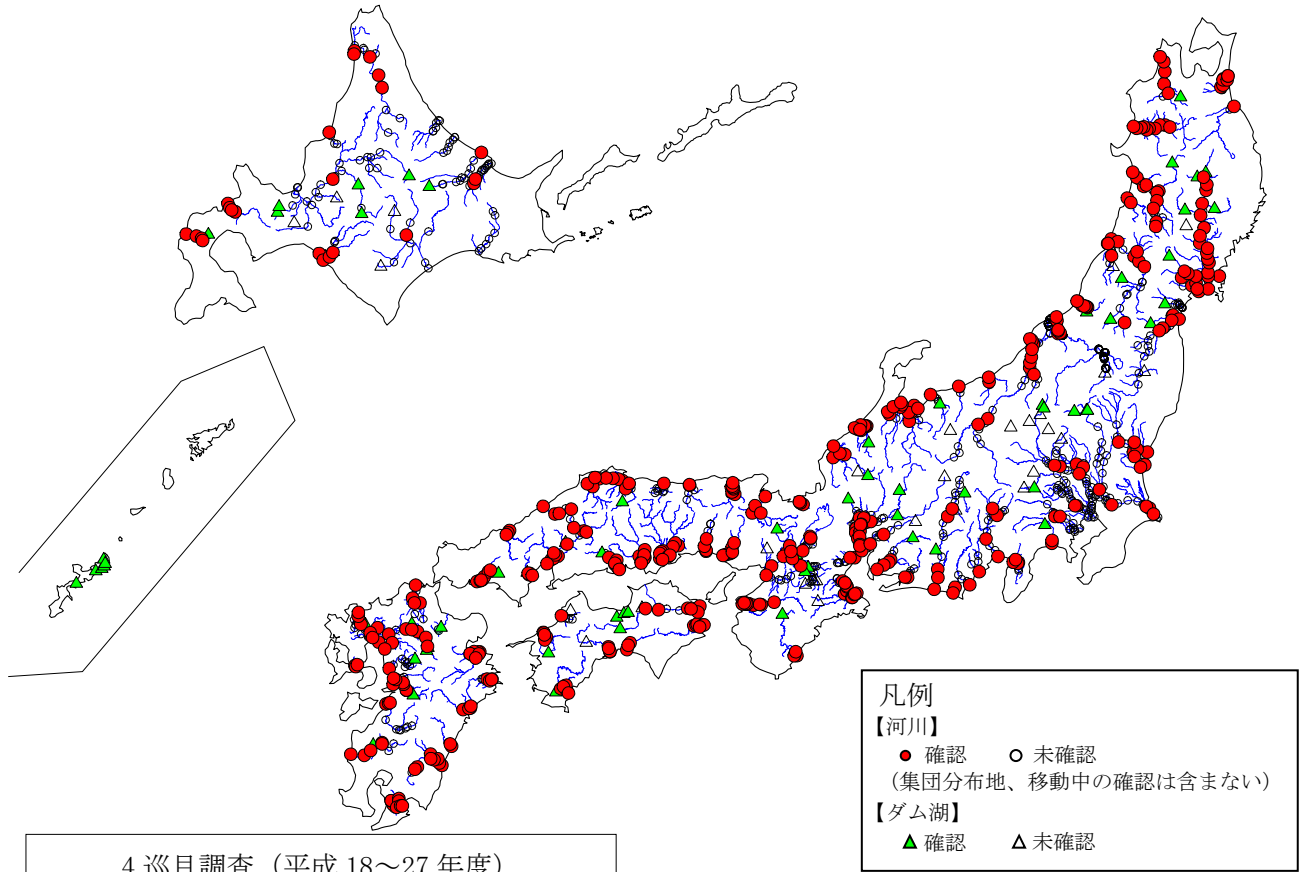


2 巡目調査 (平成 8～12 年度)

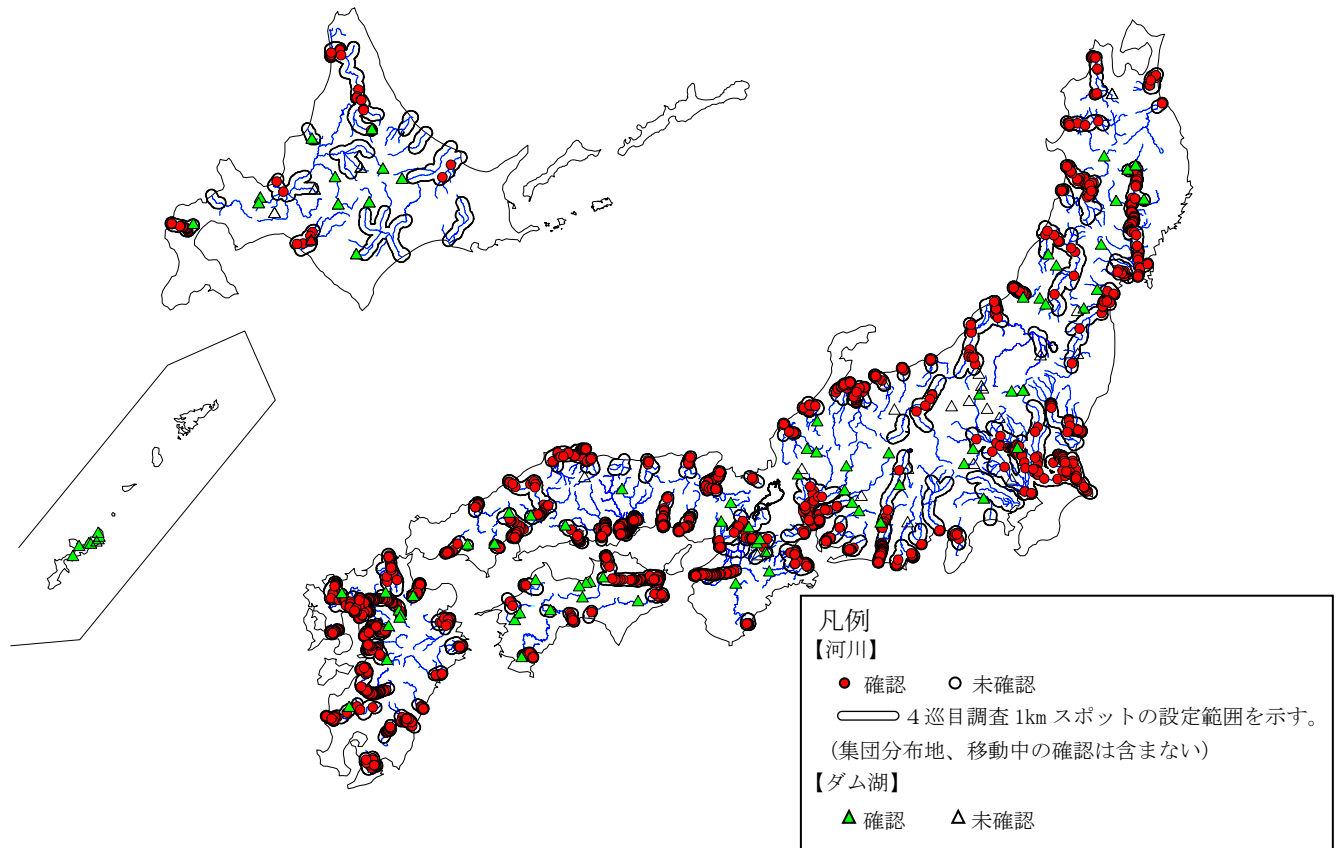


河川・ダムを含めたミサゴの確認状況 (1 巡目調査、2 巡目調査)

3 巡目調査 (平成 13~17 年度)

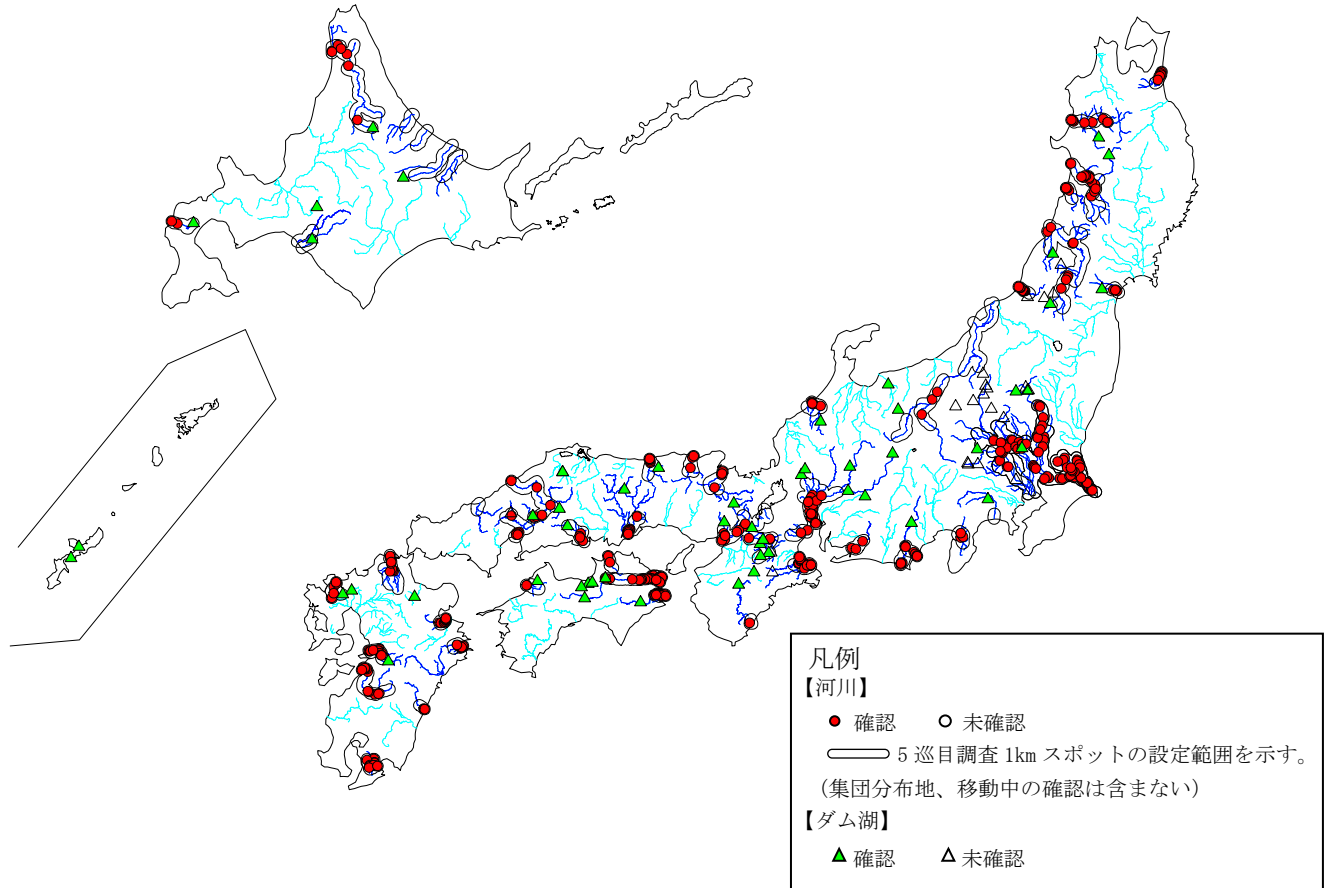


4 巡目調査 (平成 18~27 年度)



河川・ダムを含めたミサゴの確認状況 (3 巡目調査、4 巡目調査)

5 巡目調査（平成 28～令和 2 年度）



河川・ダムを含めたミサゴの確認状況（5 巡目調査）

また、ダム湖周辺での確認回数が増加していることから、ミサゴの確認時期を整理しました。ミサゴの繁殖時期は、文献により 2～8 月とされています。しかし、河川水辺の国勢調査では秋渡り調査が 8 月～9 月に実施されており、8 月～9 月の調査時期を切り分けることが難しいことから、本分析では 2～7 月の確認を繁殖時期の確認としました。なお、繁殖期であっても、繁殖に参加していない若い個体（1～2 才）がいるため、繁殖期に個体が観察されていても、必ずしもその場所で繁殖しているとは限らない点には留意する必要があります。

ミサゴの生活サイクル

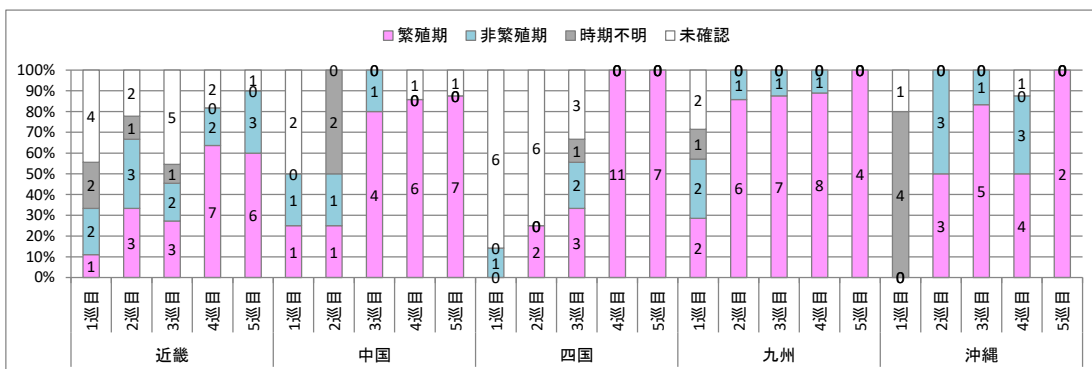
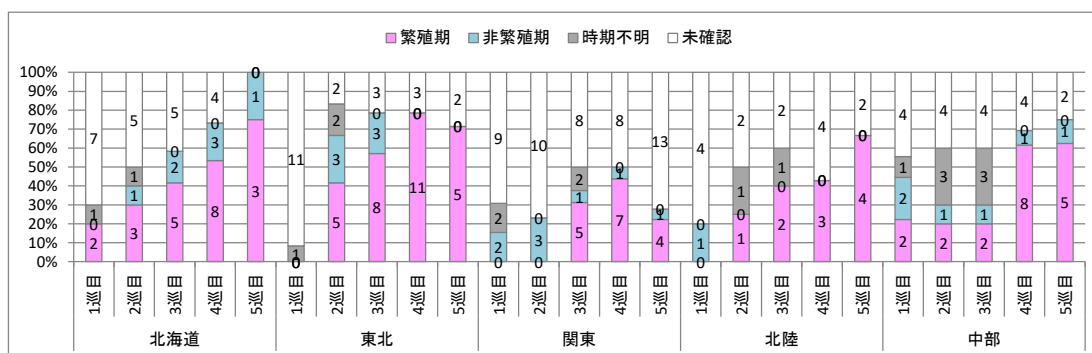
月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
繁殖サイクル	非繁殖期	求愛期	造巣期	抱卵期	巣内育雛期	巣外育雛期	巣外育雛期	非繁殖期	非繁殖期	非繁殖期	非繁殖期	非繁殖期

参考文献：

- *1：森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男. 1995. 図鑑日本のワシタカ類. 文一総合出版. 東京
- *2：白井伸和・高橋久・河原奈苗・永坂正夫・深沢愛・三浦淳男. 2006. 河北潟の周辺地域におけるミサゴの繁殖生態 第一報 営巣地の分布と最近 6 年間の繁殖状況について. Kahokugata Lake Science 9. 金沢
- *3：財団法人日本鳥類保護連盟石川県支部. 2001. 私たちの郷土 タカ・ハヤブサ類の営巣等調査報告書. 財団法人日本鳥類保護連盟石川県支部. 羽咋

地方別に整理した結果は下図のとおりです。1 巡目は確認ダム数も少なく、非繁殖期のみでの確認が多くなっていましたが、北海道、東北については 1～4 巡目にかけて、九州は 2 巡目以降、中国は 3 巡目以降、近畿、中部は 4 巡目以降に繁殖期の確認ダム数が増加していました。なお、5 巡目調査が全て終了した関東では、4 巡目まで繁殖期の確認ダム数が増加していましたが、5 巡目では確認ダム数が減少していました。

5 巡目の調査は 75 ダムのみであるため全体的な傾向は不明ですが、ミサゴが確認された 54 ダムのうち、繁殖期に確認されたダム数は 48 ダムとなっていました。その中の複数のダムにおいて、餌運びや巣材運び、抱卵又は抱雛等の繁殖行動が確認されています。利用されるようになった時期は地方毎に異なりますが、ダム湖周辺はミサゴに繁殖場として利用されている可能性が高いといえます。



ミサゴの地方別確認時期の割合 (ダムのみ)

(3) 内水面漁業と関わりのある鳥（カワウ）の確認状況

・カワウを 13 ダム全てで確認

今回分とりまとめ対象とした 13 ダムの全てでカワウが確認されました。また、このうち北陸の宇奈月ダムでは、初めて確認されました。

カワウの確認ダム数の巡目比較

種類	1 巡目調査 (81 河川) (81 ダム)	2 巡目調査 (118 河川) (83 ダム)	3 巡目調査 (122 河川) (96 ダム)	4 巡目調査 (123 河川) (111 ダム)	5 巡目調査 (65 河川) (75 ダム)
カワウ	53 河川 〔72.8%〕 19 ダム 〔23.5%〕	98 河川 〔83.1%〕 36 ダム 〔43.4%〕	109 河川 〔89.3%〕 66 ダム 〔68.8%〕	119 河川 〔96.7%〕 89 ダム 〔80.2%〕	65 河川 〔100.0%〕 73 ダム 〔97.3%〕

※ () 内は調査実施河川数、ダム湖数を示す。

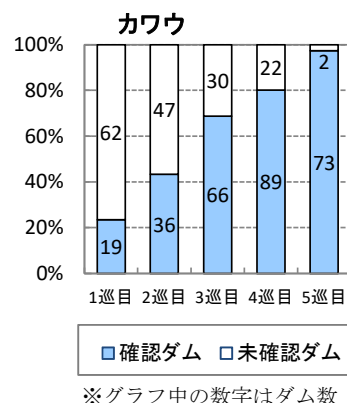
※ [] 内は確認河川数、ダム湖数の調査実施河川数、ダム湖数に対する%を示す。

カワウは、内湾部や内陸の河川、湖沼等に生息し、その近くの林等で集団繁殖します。主に魚類や甲殻類を潜水して捕らえます。1960年代から1970年代後半にかけて、河川環境の悪化により数千個体にまで減少し、絶滅が危惧されました。しかし、水質改善等による河川環境の改善により、近年では個体数が増加し、一部の地域では放流されたアユ、アマゴ、ニジマス等を食害し、内水面漁業に被害を与えている例も知られています。

カワウは今回分析対象とした 13 ダムすべてで確認されました。なお、北陸の宇奈月ダムでは河川水辺の国勢調査で初めての確認となります。過年度の 1～4 巡目の調査結果では、確認ダム数が増加しています。特に、1 巡目以前にはほとんど確認されていなかった東北地方や北陸地方、北海道等の地域における分布拡大傾向について、留意していく必要があると考えられます。

カワウは各河川（水系）の下流から上流に向かって分布を広げ、最終的に最も上流に位置するダム湖周辺にまで到達するものと考えられます。河川におけるカワウの確認状況とダム湖の確認状況を重ね合わせを行ったところ、河川の海沿いから内陸にかけて、分布を広げている傾向が見られました。特に 5 巡目に調査が実施されている利根川水系や荒川水系では、河口部から上流のダム湖にかけて、ほぼ連続的にカワウが分布していることが確認されました。

ダム湖周辺でもカワウのねぐらや繁殖コロニーが確認されていますが、今回カワウが確認された 13 ダムのうち、中部の徳山ダムでは営巣地、中部の阿木川ダムでは集団繁殖地（ブイの上等）、九州の耶馬溪ダムで巣の出入り等、繁殖に関連した行動や集団繁殖地が確認されました。



※グラフ中の数字はダム数



カワウ 繁殖巣 (徳山ダム)



カワウ (岩屋ダム)

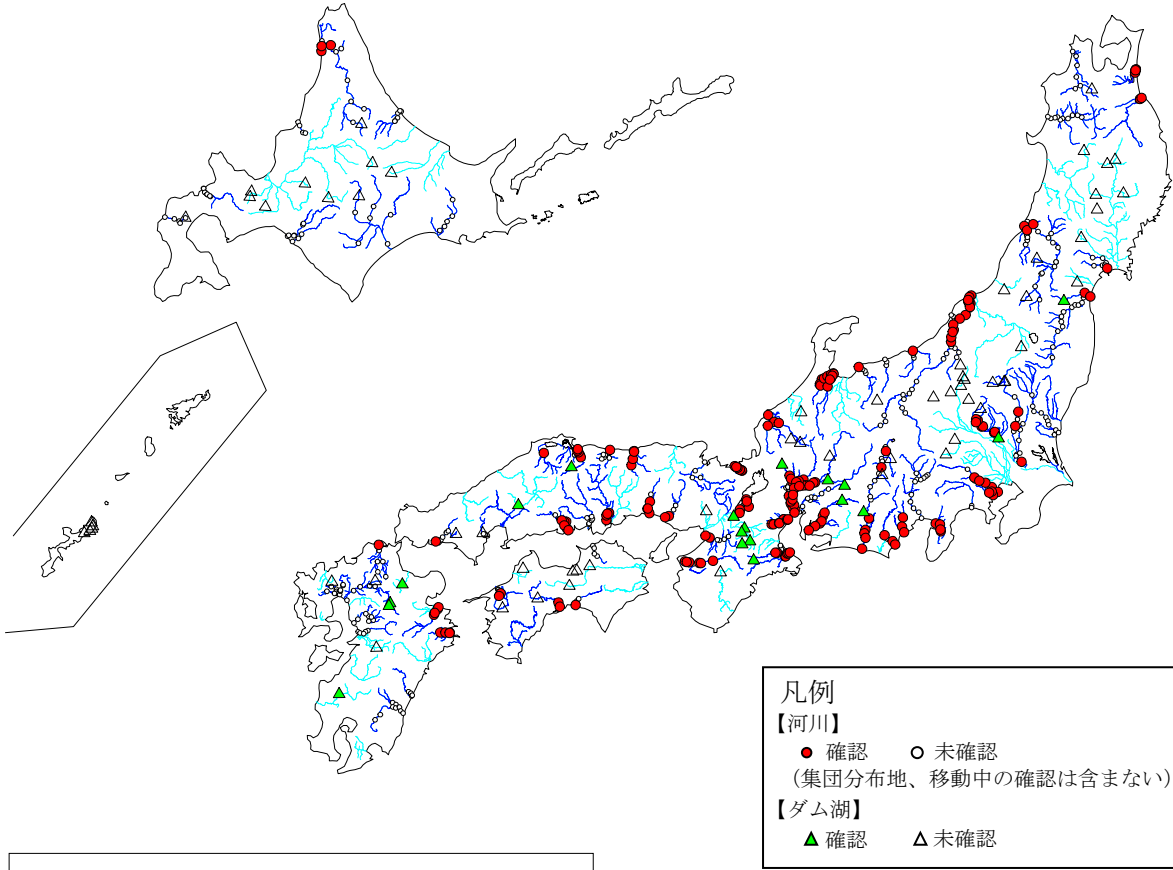


カワウ (阿木川ダム)

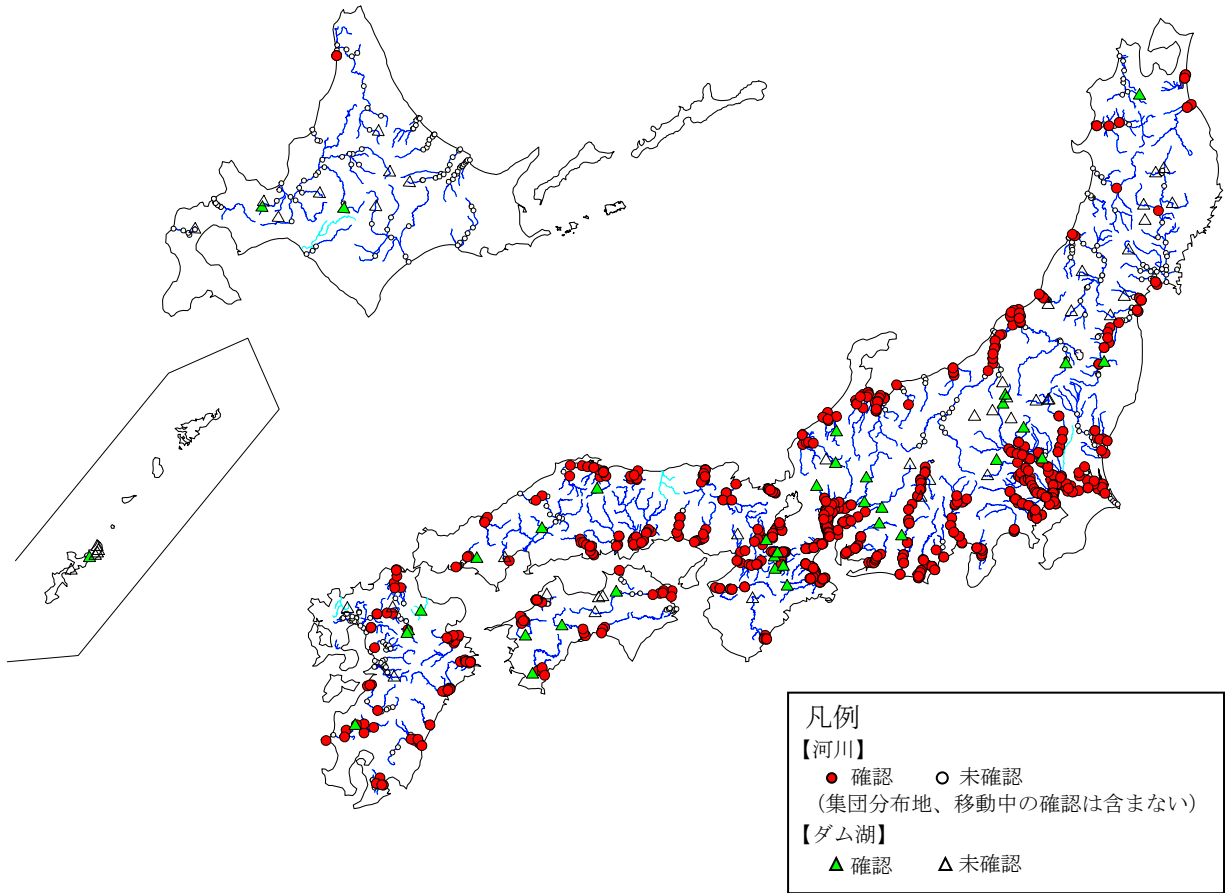


カワウ 集団繁殖地 (阿木川ダム)

1 巡目調査(平成 2~7 年度)

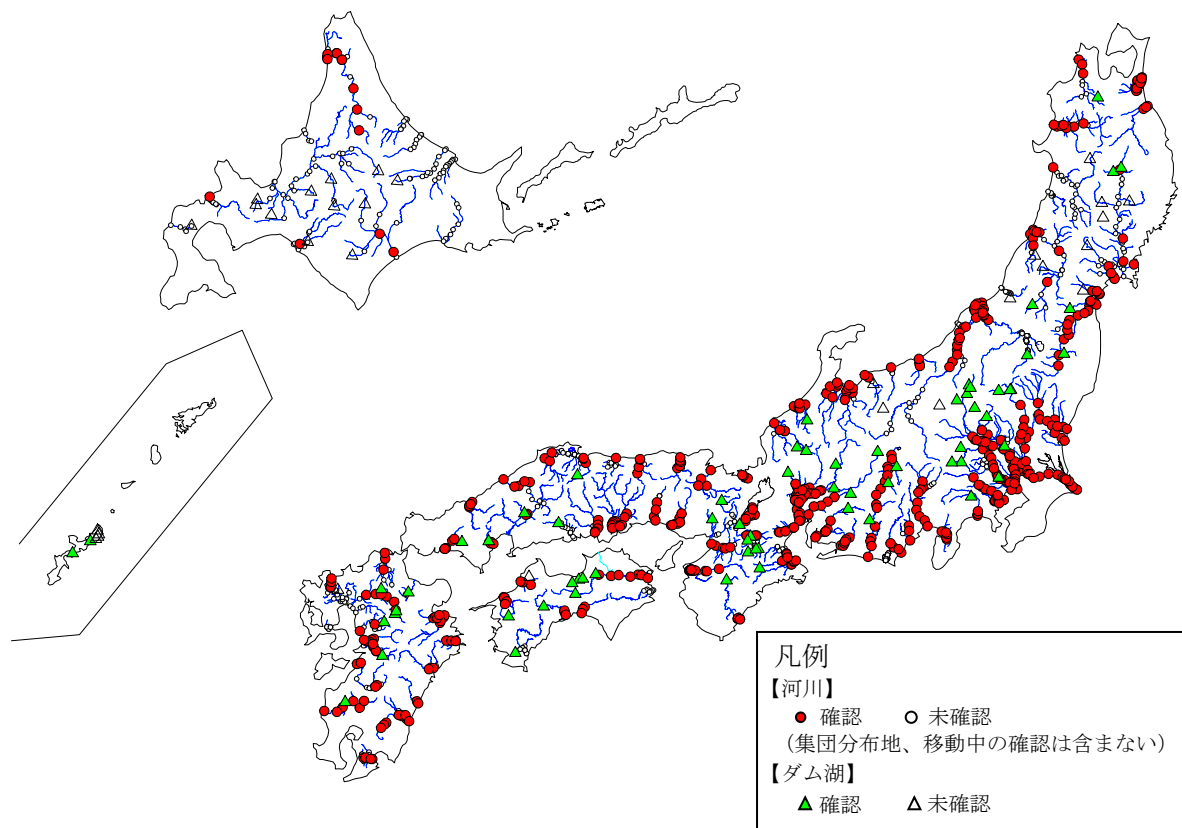


2 巡目調査 (平成 8~12 年度)

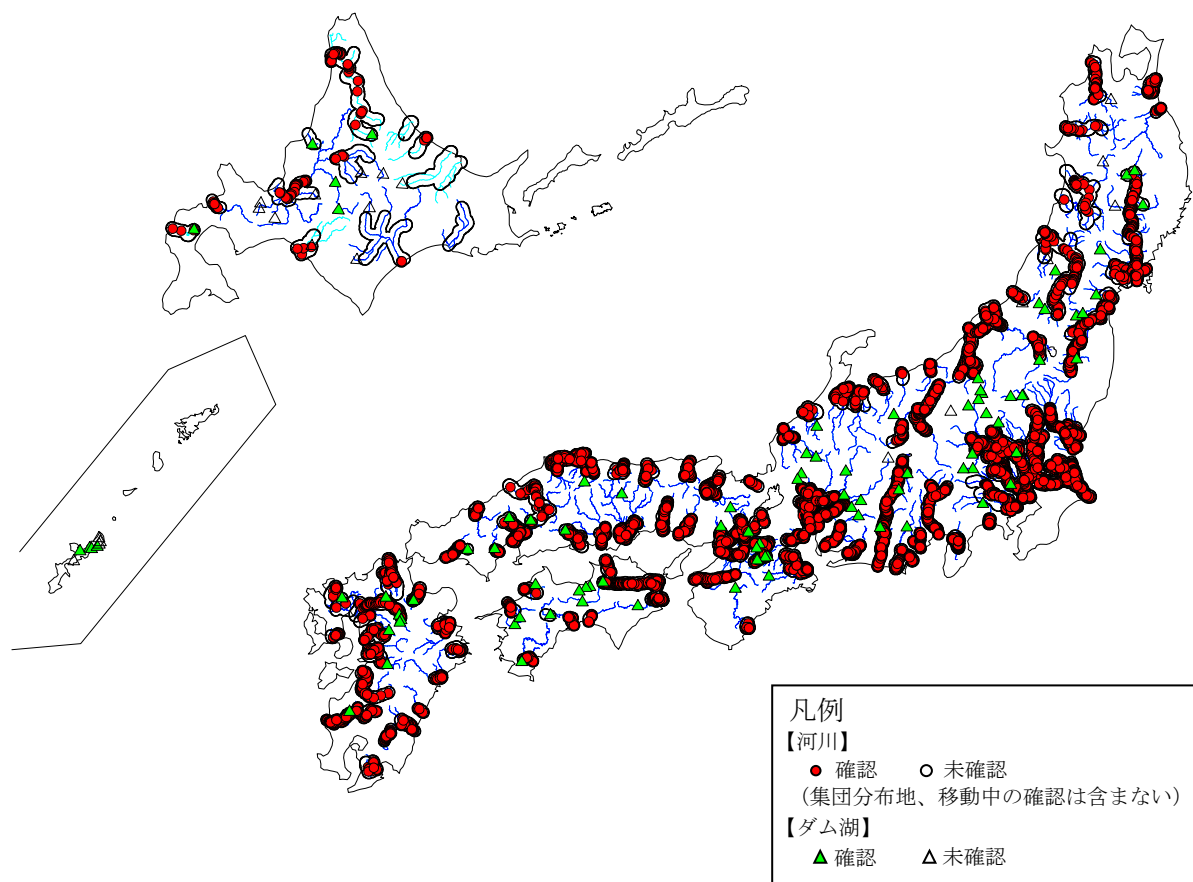


カワウの確認状況 (1 巡目調査、2 巡目調査)

3 巡目調査 (平成 13~17 年度)

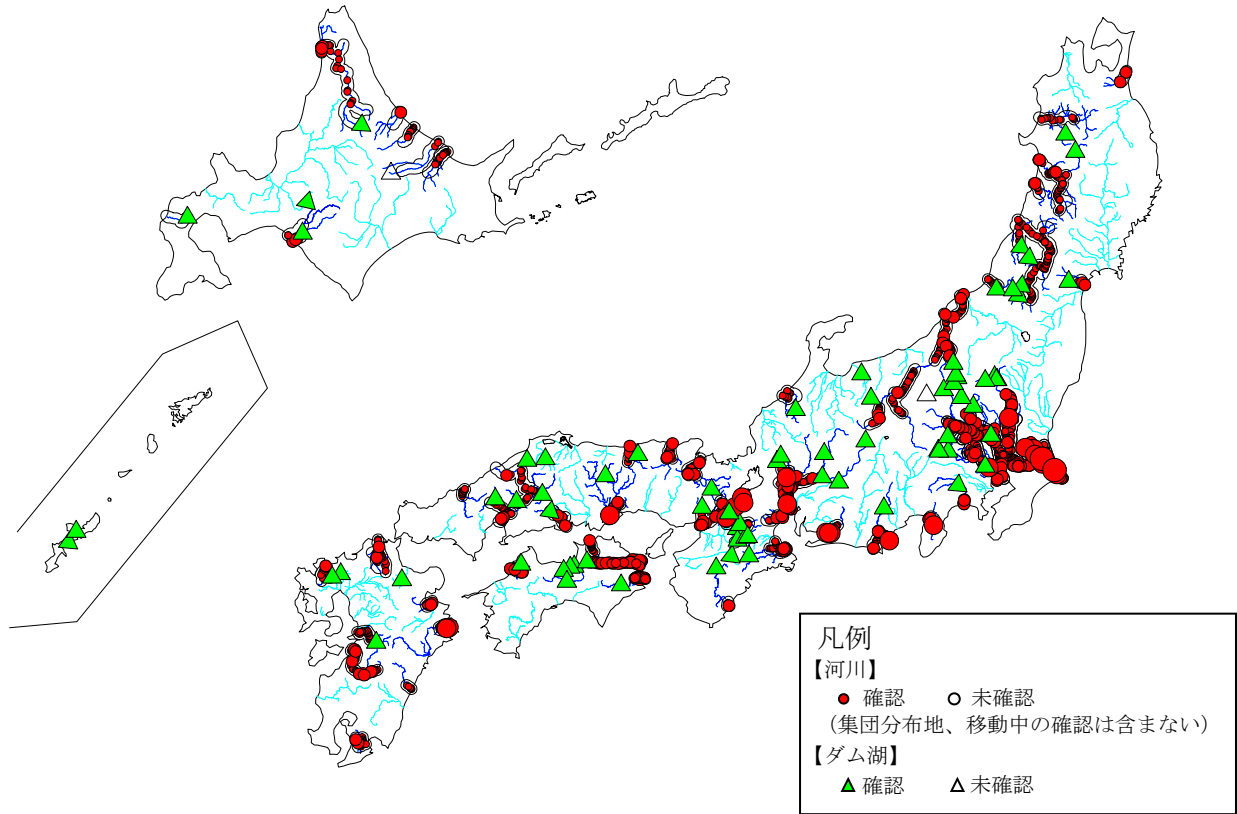


4 巡目調査 (平成 18~27 年度)



カワウの確認状況 (3 巡目調査、4 巡目調査)

5 巡目調査 (平成 28～令和 2 年度)



カワウの確認状況 (5 巡目調査)

5.4 ダム管理との関わり（ダム湖周辺の生物相）

(1) ダム湖周辺を利用して繁殖する鳥類

・イワツバメの繁殖を4ダムで確認

今回とりまとめを行ったダムで最も多く繁殖が確認されたのはイワツバメで、13 ダムのうち3ダムで繁殖が確認されました。水辺に巣を作る鳥としては、カワガラスが阿木川ダムで確認されました。他にカワウの集団繁殖地が中部の徳山ダム、九州の耶馬溪ダムではサギ類とカワウの集団繁殖地が確認されました。

鳥類が繁殖の際にダム湖周辺の環境をどの程度利用しているのか把握するために、ダム湖周辺における鳥類の繁殖状況を整理しました。繁殖が確認された、もしくは繁殖の可能性ありとされた種は、アオサギ、ミサゴ、オジロワシ、イワツバメ等の27種でした。

繁殖が確認された種数が多かったダムは、耶馬溪ダムが最も多く5種、次いで中部の徳山ダムで3種、北海道の岩尾内ダムで2種でした。

多くのダムで繁殖が確認された種はイワツバメで13ダム中3ダム、そのほかにカワウが13ダム中2ダムで繁殖が確認されました。

このほか水辺を利用して繁殖する鳥類としては、中部の阿木川ダムでカワガラスが確認されました。

重要な種では、環境省レッドリストで絶滅危惧Ⅱ類（VU）に指定されているオジロワシ及び準絶滅危惧（NT）に指定されているミサゴが北海道の岩尾内ダムで、絶滅危惧Ⅰ類（EN）に指定されているクマタカの繁殖が確認されました。

集団繁殖地としては、ダム湖周辺でダム堤体や橋梁、建物等を営巣場所として利用するイワツバメが3ダムで、カワウが2ダムで、サギ類（アオサギ、ダイサギ）が1ダムで確認されました。

集団繁殖地一覧（令和2年度）

地方	ダム名	種名	集団分布地の状況
北陸	大町ダム	イワツバメ	イワツバメ:ダム堤体付近(巣は目視できず)。イワツバメ約40羽の生息を確認。
	三国川ダム	イワツバメ	イワツバメ:みょうぜんトンネル内等のトンネル街燈部。56巣の内、32巣では出入りを確認。残り24巣は利用巣か古巣か不明。
中部	味噌川ダム	イワツバメ	イワツバメ:ダム湖左岸側の取水塔で確認した。取水塔の周辺には50個体ほどの成鳥が飛翔し、取水塔壁面の軒下や、外部歩道の下側に、全体で31巣を確認した。また、巣内には雛10個体を確認した。
		イワツバメ	イワツバメ:トンネル内の照明上に営巣。28巣、39巣をそれぞれのトンネルで確認。
	徳山ダム	カワウ	カワウ:計4か所で集団繁殖地を確認(85巣、23巣、44巣、28巣。合計180巣)。
九州	耶馬溪ダム	サギ類	サギ類:アオサギ26個体、ダイサギ27個体、巣20個以上
		カワウ	カワウ:41個体。巣10個以上。



イワツバメ 集団営巣地 (大町ダム)



イワツバメ 集団営巣地 (三国川ダム)



カワウ 集団営巣地 (徳山ダム)



イワツバメ 集団営巣地 (徳山ダム)



サギ類 集団営巣地 (耶馬溪ダム)



カワウ 集団営巣地 (耶馬溪ダム)

鳥類繁殖状況一覧（令和2年度）

No	目名	科名	種名	北海道	東北	北陸			中部					中国	九州	繁殖の状況				
				岩尾内ダム	森吉山ダム	三國川ダム	大町ダム	宇奈月ダム	丸山ダム	横山ダム	味噌川ダム	阿木川ダム	徳山ダム	岩屋ダム	苦田ダム	耶馬溪ダム	●確認された	▲可能性あり		
1	キジ目	キジ科	キジ														0	1		
2	カイツブリ目	カイツブリ科	カイツブリ														0	1		
3	カツオドリ目	ウ科	カワウ										●			●	2	0		
4	ペリカン目	サギ科	アオサギ													●	1	0		
5			ダイサギ													●	1	0		
6	チドリ目	チドリ科	イカルチドリ										▲	●			1	1		
7		シギ科	オオジシギ														0	1		
8	タカ目	ミサゴ科	ミサゴ	▲	●	▲							▲		▲		1	3		
9		タカ科	オジロワシ	●													1	0		
10			オオワシ														0	0		
11			サシバ			▲								▲			0	2		
12			クマタカ							▲				●			1	1		
13	ブッポウソウ目	カワセミ科	カワセミ											▲			0	1		
14			ヤマセミ											▲			0	1		
15	キツツキ目	キツツキ科	コゲラ							▲							0	1		
16	スズメ目	モズ科	モズ										▲				0	1		
17		シジュウカラ科	ヤマガラ											▲			0	1		
18			シジュウカラ										▲		▲	▲	0	3		
19		ツバメ科	コシアカツバメ													●	1	0		
20			イワツバメ			●							●		●		3	0		
21		ヒヨドリ科	ヒヨドリ								▲						0	1		
22		エナガ科	エナガ											▲			0	1		
23		カワガラス科	カワガラス			▲								●			1	1		
24		スズメ科	スズメ													●	1	0		
25		セキレイ科	キセキレイ										▲	▲			0	2		
26			ハクセキレイ										▲				0	1		
27			セグロセキレイ			▲								▲			0	2		
合計				9目	18科	27種	3	4	1	0	0	1	2	5	8	8	3	0	5	
				●	繁殖が確認された。			2	0	1	0	0	0	0	1	1	3	1	0	5
				▲	繁殖の可能性がある。			1	4	0	0	0	1	2	4	7	5	2	0	0

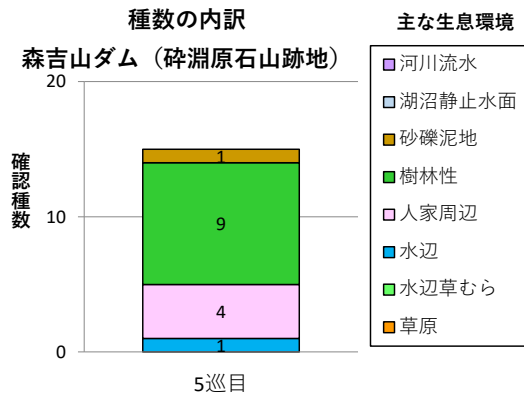
繁殖の確認基準

●:繁殖を確認した

成鳥 … 巣への出入り、抱卵・抱雛、雛の糞の運搬、偽傷行動等
 巣 … 巣立ち後の巣、卵のある巣等の確認
 雛 … 姿・声の確認
 巣立ち雛 … 巣からほとんど移動していないと思われる巣立ち雛の確認

▲:繁殖の可能性がある

成鳥 … 求愛・交尾行動、威嚇・警戒行動、造巣行動、巣材の運搬、餌の運搬等
 巣立ち雛 … 移動可能な巣立ち雛、家族群確認
 巣 … 巣のみの確認、卵かくのみの確認



ヤマセミ（森吉山ダム）



アカゲラ（森吉山ダム）



碎淵原石山跡地(令和2年)

写真出典：令和2年度森吉山ダム水辺現地調査（鳥類、動植物プランクトン等）業務報告書（令和3年2月）

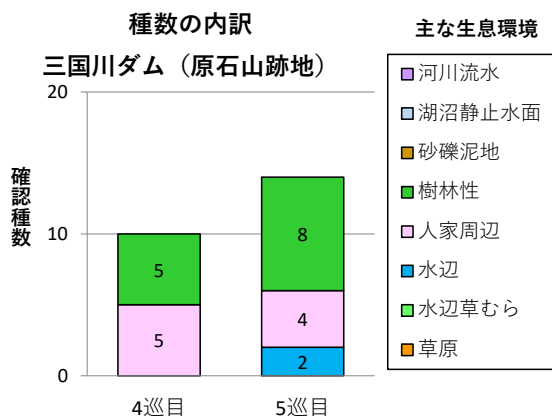
② 三国川ダムの地形改変箇所（原石山跡地） [ダム管理開始：平成4年度]

三国川ダムの地形改変箇所は、ダム湖左岸の原石山跡地で、ダム建設時には1:0.7の急勾配の法枠工に、種子吹きつけによる法面保護工が施工されています。平成22年時にはイタチハギ、ススキ、植栽樹等が見られました。現在もヤマハギ、ススキ、クロバナエンジュ、イタチハギ等が繁茂しています。

4巡目の調査では、8科10種の鳥類が確認されました。繁殖期には、ホオジロが盛んに囀っていました。越冬期には、カワラヒワ、ベニマシコといった小鳥類がススキ群落の中を歩き来していたことから、餌場として利用しているものと考えられます。

5巡目の調査では、12科14種の鳥類が確認されました。繁殖期はホオジロが優占し、上空を通過するキジバト、トビ、カケス、キセキレイ等の普通種が確認されました。越冬期はモズ、ジョウビタキ、ベニマシコ、ホオジロ等が確認され、開けた草地環境を好む種の生息場として利用されている状況が確認されました。

ダムの管理開始から29年程度経過しており、調査地区内には緑化による草地や低木林が広がっていますが、樹林への遷移はしておらず、灌木及び草地環境のまま安定的に維持されています。そのため、全体の種数や個体数は大きく変化はしていないと考えられます。



モズ（三国川ダム）



ベニマシコ（三国川ダム）



原石山跡地（平成 22 年）



原石山跡地（令和 2 年）

写真出典：平成 22 年度三国川ダム河川水辺の国勢調査業務報告書（平成 23 年 2 月）

令和 2 年度三国川ダム水辺現地調査（鳥類）及び下流河川環境調査業務報告書（令和 3 年 6 月）

③ 味噌川ダムの地形改変箇所（矢詰原石山跡地、笹尾沢土捨場跡地）

[ダム管理開始：平成 8 年度]

味噌川ダムの地形改変箇所は、矢詰原石山跡地及び笹尾沢土捨場跡地で、原石山の掘削部は勾配がきつく、そのほとんどがコンクリート枠で補強されており、ススキ、ヨモギ、シナダレスズメガヤ、ハルザキマガラシ等が生育しています。また、斜面上部には樹林が分布しています。笹尾沢土捨場跡地はヤマハンノキ、ヒノキ等が植栽され、植生回復が行われています。

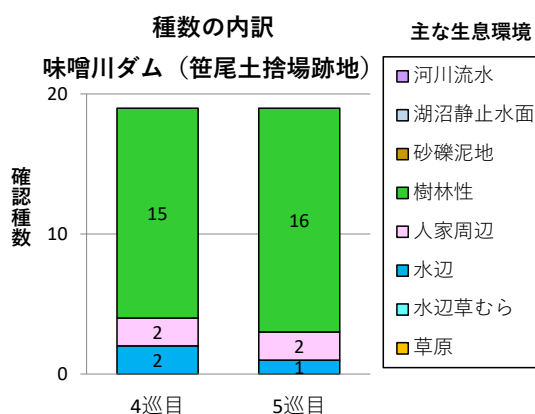
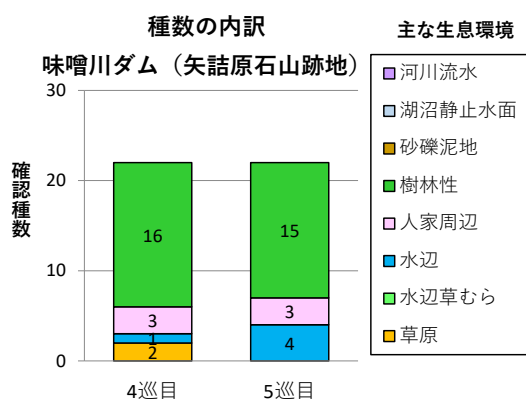
4 巡目の調査では、8 科 10 種の鳥類が確認されました。矢詰原石山跡地の掘削部の法面には草本が生育しています。冬季には草本の実を採食にくるハギマシコ等が確認され、冬季には採餌場所として機能していると考えられました。笹尾沢土捨場跡地は、全体的に開けた明るい環境となっており、明るい樹林を好むカッコウ等のほか、藪の多い樹林を好むセンダイムシク

イ、溪流沿いの茂った樹林を好むオオルリ等、樹林環境を利用する種が多く確が確認されました。

5巡目の調査では、矢詰原石山跡地では22種、笹尾沢土捨場跡地では19種の鳥類が確認されました。矢詰原石山跡地は種数、個体数とも繁殖期に多く、ダム湖沿いの地区のため、ダム湖上空で採餌しているミサゴ等が確認されました。笹尾沢土捨場跡地も同様に繁殖期に種数、個体数とも多くなっていましたが、全体的に個体数は少ない傾向が見られました。笹尾沢土捨場に植栽されたヤマハンノキは良好に生育していましたが、ヒノキについては全体に背の低い細い気が密生しており、間伐等の管理が必要と考えられました。

全体としては、ツツドリ、キツツキ類、カケス、カラ類等の樹林性鳥類が多く確認され、ホオジロや冬季にはベニマシコ等の草地を利用する鳥類も継続的に確認されています。

ダムの管理開始から25年程度経過しており、多少の種の入替わりはあるものの、調査地の環境は、樹林性の種を中心として大きな変化なく維持されていると考えられます。笹尾沢土捨場跡地については、ヒノキの間伐等、適切な管理を行うことで、現在よりも多くの鳥類が生息するようになる可能性が考えられます。



ホオジロ (味噌川ダム)



ウソ (味噌川ダム)



矢詰原石山跡地(平成 22 年)



矢詰原石山跡地(令和 2 年)



笹尾沢土捨場跡地(平成 22 年)



笹尾沢土捨場跡地(令和 2 年)

写真出典：味噌川ダム河川水辺の国勢調査業務報告書（平成 23 年 3 月）

令和 2 年度味噌川ダム河川水辺の国勢調査業務報告書（令和 3 年 3 月）

④ 苫田ダムの地形改変箇所（土捨場跡地）

[ダム管理開始：平成 17 年度]

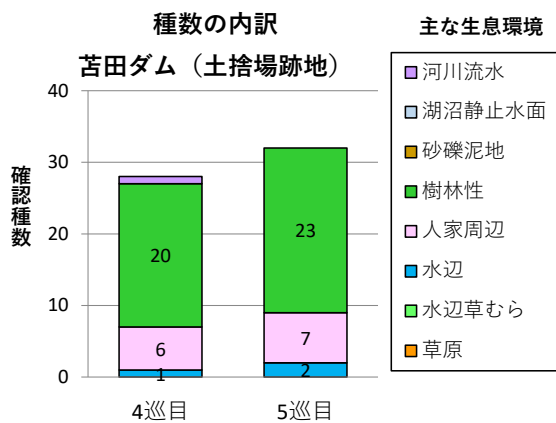
苫田ダムの地形改変箇所は、土捨場跡地で、低木等の植栽が行われており、樹林に囲まれた谷地で、谷底は断続的に盛土され、盛土からの経過年数に応じ裸地、草地、低木林が立地しています。

4 巡目の調査では、16 科 28 種の鳥類が確認されました。個体数は少ないですが、ヒヨドリ、シジュウカラ類、メジロ、キツツキ類やイカル等、樹林に依存する種が多く確認され、山間に位置する調査地区の特性を反映していると考えられます。

5 巡目の調査では、14 科 32 種の鳥類が確認されました。4 巡目と比較すると、樹林性の種を主体とすることは変わりませんが、草地性等の開けた環境に生息する種が少数加わっていました。

繁殖期には、カワラヒワやホオジロ等、土捨場跡地の草地や低木林等をよく利用する種が継続して確認されています。越冬期には、ベニマシコ等、草地性の種が多く確認され、草地を餌場として利用していると考えられます。土捨場跡地は断続的に改変されており、樹林化が著しく進行する状況も見られず、草地性の種も継続して確認されているため、鳥類の利用状況に大きな経年変化は見られませんでした。

ダムの管理開始から 16 年程度経過していますが、断続的な改変が行われていることもあり、低木と草地環境が、ダム管理開始当初から長期間維持された状態となっています。



コゲラ（苦田ダム）



ウグイス（苦田ダム）



土捨場跡地（平成23年）



土捨場跡地（令和2年）

写真出典：苦田ダム水辺現地調査（魚類・動植物プランクトン・鳥類）業務報告書（平成24年3月）

令和2年度吉井川水辺現地調査（鳥類）業務報告書（令和3年3月）

2) 環境創出箇所における確認状況

・環境創出した樹林・草地環境、湿地環境を利用する鳥類を確認

ダム建設に伴い整備された、ビオトープ等の環境創出箇所における鳥類の確認状況を整理しました。今回とりまとめを行ったダムのうち、環境創出箇所における調査が行われたのは2ダムでした。

大町ダムでは、ビオトープがとしてダム堤体直下に中洲が整備されています。

苫田ダムでは、湿地環境が整備され、周辺には樹林地も整備されています。水鳥のほか樹林性の鳥類も確認されています。

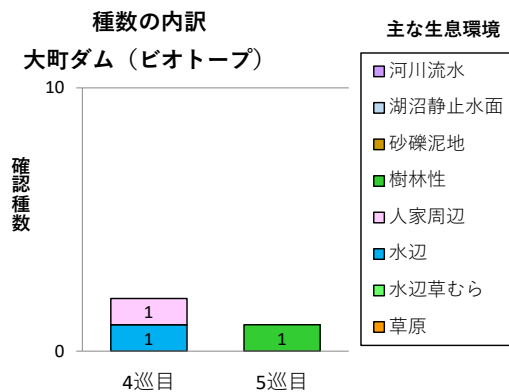
① 大町ダムの環境創出箇所（ビオトープ） [ダム管理開始：平成14年度]

大町ダムの環境創出箇所は、平成11年にダム直下に設けられた人工的に造成された中洲で、魚類の産卵場として独自に設定している地区です。両岸が岩石と砂礫による盛り土で形成された人口の緩流・静水域で、流水は右岸側の沢水を利用しています。

4巡目の調査では、2科2種の鳥類が確認されました。中洲の樹林内でホオジロが、水際でセグロセキレイが確認されました。越冬期には出水により、中洲の樹林環境が一時的に消失しました。

5巡目では、1科1種の鳥類が確認されました。確認されたのは越冬期で、樹林に生息するウグイスのみでした。

ダムの管理開始から19年、ビオトープが設置されてから22年程経過していますが、ダム直下という出水等による攪乱が生じやすく樹林環境が成立し難い環境であることから、餌場として利用するために飛来する鳥類が一時的に見られるのみとなっています。



写真出典：大町ダム自然環境調査（鳥類）業務報告書（平成23年2月）、
令和2年度 大町ダム水辺現地調査（鳥類調査）業務報告書（令和3年2月）

② 苫田ダムの環境創出箇所（湿地環境整備箇所） [ダム管理開始：平成17年度]

苫田ダムの環境創出箇所は、湿地環境整備箇所です。また、周辺の森林部との連続性を考慮して、エコトーンとして樹林部が合わせて整備されています。

4巡目の調査では、20科39種の鳥類が確認されました。樹林性のヒヨドリや草地性のホオジロ等が有線して確認されました。水域に依存する鳥類は確認されましたが（サギ類、セキレイ類等）、湿地の草地に依存するような鳥類（例えばオオヨシキリやヒクイナ等）は確認されませんでした。

5巡目の調査では18科24種の鳥類が確認されました。湿地として維持される安定した環境であると考えられますが、湿地性の種の個体数は少なく、繁殖場としては利用されていませんでした。植栽された樹林部についても、樹木の成長とともに樹林性の種の餌場としての機能が向上していると考えられますが、種数・個体数ともに減少していました。

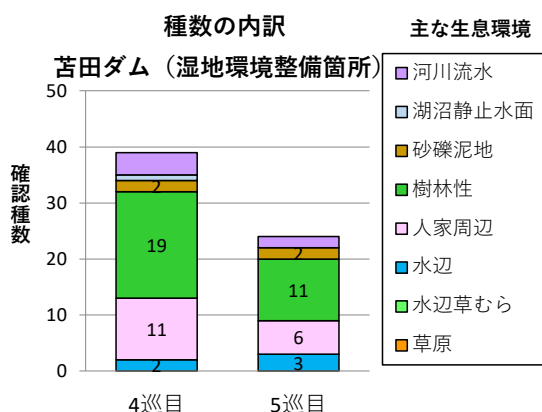
ダムの管理開始から16年程度経過していますが、環境としては樹木が成熟するような変化以外は見られていませんが、湿地環境、樹林環境ともに利用する鳥類の個体数・種数が減少する傾向が見られました。特に湿地環境は、湿地に依存する鳥類の生息環境として、まだ機能が低い可能性があると考えられます。



ヤマガラ（苫田ダム）



ヒヨドリ（苫田ダム）





写真出典：苫田ダム水辺現地調査(魚類・動植物プランクトン・鳥類)業務報告書(平成 24 年 3 月)
令和 2 年度吉井川水辺現地調査(鳥類)業務報告書(令和 3 年 3 月)

